

始



6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100

成田山五事業大正十三年報

大正十三年七月發行

254₂-104

目次

成田中學校一覽……………一

成田高等女學校一覽……………三

成田幼稚園一覽……………五

成田山感化院一覽……………七

成田圖書館一覽……………八

以上……………

石川大僧正の遷化

成田山中興第十五世として、成田山五大事業の經營者として、在任滿三十年、令名中外に高かりし近代の高僧石川照勤師は、昨年三月中旬以來病魔の冒す所となり、本年一月三十一日午前九時半終に遷化せられぬ。五事業に従事する吾人に於ては暗夜に燈火を喪ひたるの感なくんばあらず。然も用意周到なる僧正は、其遷化數月前に於て現貫首荒木照定師を拔擢して、後輩たるの地位を確定し置かれたれば、何等の支障もなく、極めて圓滿裡に襲職せられ、内外俱に其堵に安んずることを得たるは、洵に不幸中の幸慶なりき。

故僧正一代の行業事蹟の世に傳ふべきもの尠ならずと雖も、本誌の性質上之を詳述することは甚だ不便なれば、他の方法に由りて他日之を發表することゝなすべし。今は只故僧正の殆んど絶筆とも云ふべき昨年一月自ら起草せられたる「病氣經過報告書」及本年三月三十一日日本葬の際、大導師高尾山武藤大僧正の誦誦せられたる「歎徳文」との二篇を左に掲ぐることをなせり。

大正
13. 8. 1
寄贈

寄贈本

25f₂-19

石川大僧正の遷化

成田山中興第十五世として、成田山五大事業の經營者として、在住滿三十年、令名中外に高かりし近代の高僧石川照勤師は、昨年三月中旬以來病魔の冒す所となり、本年十月三十一日午前九時半終に遷化せられぬ。五事業に従事する吾人に於ては暗夜に燈火を喪ひたるの感なくんばあらず。然も用意周到なる僧正は、其遷化數月前に於て現貫首荒木照定師を拔擢して、後董たるの地位を確定し置かれたれば、何等の支障もなく、極めて圓滿裡に襲職せられ、内外俱に其堵に安んずることを得たるは、洵に不幸中の幸慶なりき。

故僧正一代の行業事蹟の世に傳ふべきもの尠ならずと雖も、本誌の性質上之を詳述することは甚だ不便なれば、他の方法に由りて他日之を發表することゝなすべし。今は只故僧正の殆んど絶筆とも云ふべき昨年一月自ら起草せられたる『病氣經過報告書』及本年三月三十一日本葬の際、大導師高尾山武藤大僧正の諷誦せられたる『歎徳文』との二篇を左に掲ぐることゝなせり。

大正
13. 8. 18
寄贈

寄贈本

病氣經過報告書

人誰か死なからんや、死は生の始より覺悟せざる可らず。而も其の死する、時と處と場合とを要す、死をして意義あらしむる所以也。人をして其の迷惑を多からざらしめんが爲め也。予生れて五十五年、頑健自ら誇りて曾て病と云ふ者を知らざりしに、底事本年三月の中旬頃より、徐々に胸部に疼痛を覺え、越えて六月の終頃に至りて食物の嚥下稍や困難と爲り、茲に始めて身に病あるを發見したり。而して其の病源の正に食道に在るべきを自覺したり。受診服藥數週、更に其の甲斐なし。七月十七日、關川博道先生に乞ふて同伴上京し、十九日豫て入懇なる京橋采女町鈴木胃腸病院に於てレントゲンの檢診を受けたり。果然故障は食道の下部に在りて一點の黑影は顯然として寫眞の表面に現前したり。而も此の黑影が果して癌なりや、腫瘍なりや、將に他の一時的の糜爛なりや、今後の經過に俟たざれば判明せず、今より一二ヶ月間は萬事を放棄して閑地に靜養すべしとの宣告也。予豈に驚かざるを得んや、病氣に驚きたるに非ず、一二ヶ月の靜養と

云ふに驚きたる也。予は曾て病氣と云ふ者の經驗なし、僅に這個の病氣に對して仰々しき靜養沙汰は寧ろ苦痛に感ぜられ、平生の性質より斷然之を謝絶せんとしたるに、醫師の強要は彌々激しく、此際無理をして醫師の勸告を用ひざる如きは、夫れこそ今後に重大必要ある身體を思はざるの甚しきものにして、寧ろ平生職務に忠實なる者の取るべき所爲に非ずとの忠告にて、予も遂に之に服從せざるを得ざりき。依て直に相州の鶴沼に二軒の小屋を賃借し、七月卅日より遂に其處に移りて靜養するの止むなきに至れり、是れ今回の病氣に對する第一の道程也。

爾來謹慎、讀んで字の如く靜養數日、病狀更に變化なく、其間東京の鈴木ドクトル壹回、關川先生數回の來診を乞ひ、種々なる手當と療養とを受けたれども、病狀一定せずして遂に未だ何病と決するに至らず。偶々此地に在住中の三輪徳寛先生（現千葉醫科大學長）御來訪あり、病氣に就ての永々の御經驗談あり、兎に角更に東京の専門醫數人に診斷を乞ふの必要あり、予紹介の勞を取るべしとて直に先づ藤浪（剛一）博士への紹介狀を書き呉れたり。其他友人各位より數回の注告

もあり、予も遂に決心して上京受診の臍を固め、不取敢八月廿二日夕刻藤澤發の汽車にて上京したり

恰も此日予の病氣に關する各新聞の記事あり、『東京朝日新聞』には重態とあり、『國民新聞』には危篤とあり、藤 よりの車中にて此夕刊を見たる予等一行は、唯だ何となく他人の事の如く思はれ、互に顔見合して苦笑するの外なかりき、何たる滑稽事ぞや。而して其記事の鎌倉電話と附記せらるゝに至りて、一層友人各位を迷はすべきを憂慮したりき。

廿三日午前には千葉市梅松屋主人の厚意に依り、同家の令婿三和功氏の斡旋にて内科の大家稻田博士の診斷を受けたり。一應の診斷にては何とも決し難し、何れ來月の十日前後より帝大病院の方に出勤する故、更に其の方にて充分診斷すべしとのことなりき。午後は慶大病院に藤浪博士を訪問し、數回に涉りてレントゲンの檢診を受けたり。其の結果、病症は癌に非ず、腫瘍に非ず、食道の側室（或は憩室）ならん、併し今後の經過を見て再診せざれば儘に夫れと斷言し難しとのことなりき（但し予の直接聞きたるには非ず）、上京受診の結果は斯の如し。而して關川先生は兩博士診斷の場

合、終始立合ひ聞き取り呉れたること勿論也。廿四日鶴沼に歸る。

自是先、予の病氣の報傳はるや、遠近各地の友人知己諸氏より、電報に郵便に頻々として其の經過を問合され、特に鶴沼に轉地後は、毎日數人或時は十數人、態々見舞のために尊來を辱ふし、殆ど應接に暇なき程のこともあり、感泣拜謝終世忘るゝ克はざるの印象を遺したりき。今にして始めて病氣の兪末に出來ぬこと、予の身軀の予自身のみ身軀に非ることを悟りたり。嗚呼何たる勿體なきことぞや。

此時に當りて、突然九月一日の大震災に遭遇し、家屋倒壊の爲め一時は其の下敷となりしも、幸に本尊明王の御冥助に依りて九死に一生を得、其後海嘯の噂に、鮮人襲來の風説に脅威せられつゝ、倒壊せる家屋の古材を聚めて隨從者の作成せる堀立小屋に生活し、通信交通の杜絶の爲め、國元の模様も各地の狀況も全く判明せずして不安に苦める餘、隨從の者二人に決死の覺悟を授け、三日目に國元へ向け出發せしめたりしに、行違に國元よりの第一使者到來し、始めて深川の不動堂も横濱の延命院も全滅の悲報を承知したり。次で五

日に國元より第二使者、宗務所より第一特使、六日に國元より第三使者と續々到來して漸く各地各方面の状況を詳にするを得たり。慘絶悲絶誠に言語に絶し、何と申そう様もなし、而も通信交通は東西俱に未だ通ぜず、進退全く窮して殆ど策の施すべき無し、遂に其の間に九日を費したりき。

十日に至り、漸く自動車の便を借りて辛ふして八王子に出で、十二日八王子を出發して同じく自動車にて千葉に出で、十四日同じく自動車にて一ト先歸山するを得たり。病氣未だ癒えたるに非ず、容體頗る面白からざりしも、今は夫等を顧慮するに暇あらざりし也。稻田藤浪兩博士に再診を乞ふの機會も遂に失したりし也。歸山後は稍や小康を得、特に數日間勤務を怠りたることの氣に掛れるを以て、廿八日の朝護摩より昇堂し、七十三日目に本尊明王の慈顔を拜し、恙なく奉仕を果すことを得たり。無限の感慨、無量の喜悅、誠に言語の外なりき。引續き本月の五日までは殆ど平常の如く奉仕し得たるに、六日に至りて病狀稍や面白からず、残念ながら其日より萬事を放擲して、再び引籠り靜養するの止むなきに至りぬ。而も病勢敢て昂進と

歎徳文

當傳燈大阿闍黎大僧正照勤大和上下葬之日。由其遺旨。老衲遠來。冒瑜伽導師席。覺懷舊之情甚切。乃爲哀辭。以見意。然自他本佛子。不可徒做世俗常態。而哀也。但不忍視。視德漸凋落。而後學之徒。益喪儀表。嗟嘆之而已。姑託哀辭。欲述感懷而已。至若其一代行業。畢生功德。天下之人悉知之。雖然有未必悉知和上眞面目者矣。其幼而穎悟。勤學不倦者。人皆知之。聰明深智。斷事不誤者。人皆知之。興隆寺門。提撕後進者。人皆知之。振興教育。裨益社會者。人皆知之。致力公益。不惜巨資者。人皆知之。慈善賑恤。不蓄私財者。人皆知之。恪勤勵精。忠實職務者。人皆知之。謹嚴方正。以躬率人者。人皆知之。然和上本領。不在是等數者。而實在至公至正。透徹觀念。與清淨潔白。崇高人格。而存矣。想進退終始。孰得若和上乎。其高風清節。雖出天稟。玉成之者。其修養勉強。能致之爾。昨年三月以來有微恙。醫療攝生。竭人事。而終不起。今年一月三十一日。安祥結印。澹然

云ふには非ず。

抑も食道側室の症狀たるや、元氣の敢て平生と變れるもの有るに非ず、發熱の之に伴ふて耐へられざるもの有るに非ず、唯だ飲食物の攝取嚥下に困難を覺ゆるのみ、随つて飲食物の減量の爲め、日を遂ひ月を累ねて身體羸弱枯瘦し、予の如きも今や殆ど繪に描いた羅漢様同然全く骨と皮と斗りにて、自分ながら能くも生きて居らるゝと思ふ程の現狀也。

而して、予は罹病以來未だ曾て一日も之が爲めに臥床したること無し、臥床すべきだけの苦痛なき也。誠に不思議なる病氣なる哉。執拗なる病氣なる哉。因業なる病氣なる哉。病名は側室と云ふと雖、速疾に平癒せざるのみならず、蓋し永久に不治の難症ならん。之を病氣經過の主要となす。若夫れ其の如何なる時、如何なる處、如何なる場合に於て死し得べきかは、予自身また未だ之を判知し克はざる也。

大正十二年十一月

石川 照勤

而化。享年五十有六。法龍四十有七。老衲自幼。熟知和上道德。所以至者。而今不能復睹溫容。嗚呼哀哉。 廼聯誄詞。而述哀悼之意。

鱗羽振々	龍鳳斯奇	龍不可見	鳳不可知
法燈隆々	師資斯推	師不可隱	資不可虧
大夜月暗	曉星何時	噫公一去	千歲不歸
教界木鐸	忽焉遠辭	如今以後	一門宗誰
清白自守	百世可師	學德圓滿	公獨獲斯
燦然德光	嚴乎有儀	風孫龍子	可爲規
愁雲漠々	桃李未披	四邊慘々	墓陵獨巍
嗚呼靈車遠逝	旛蓋風吹	際此離別	杳々長思

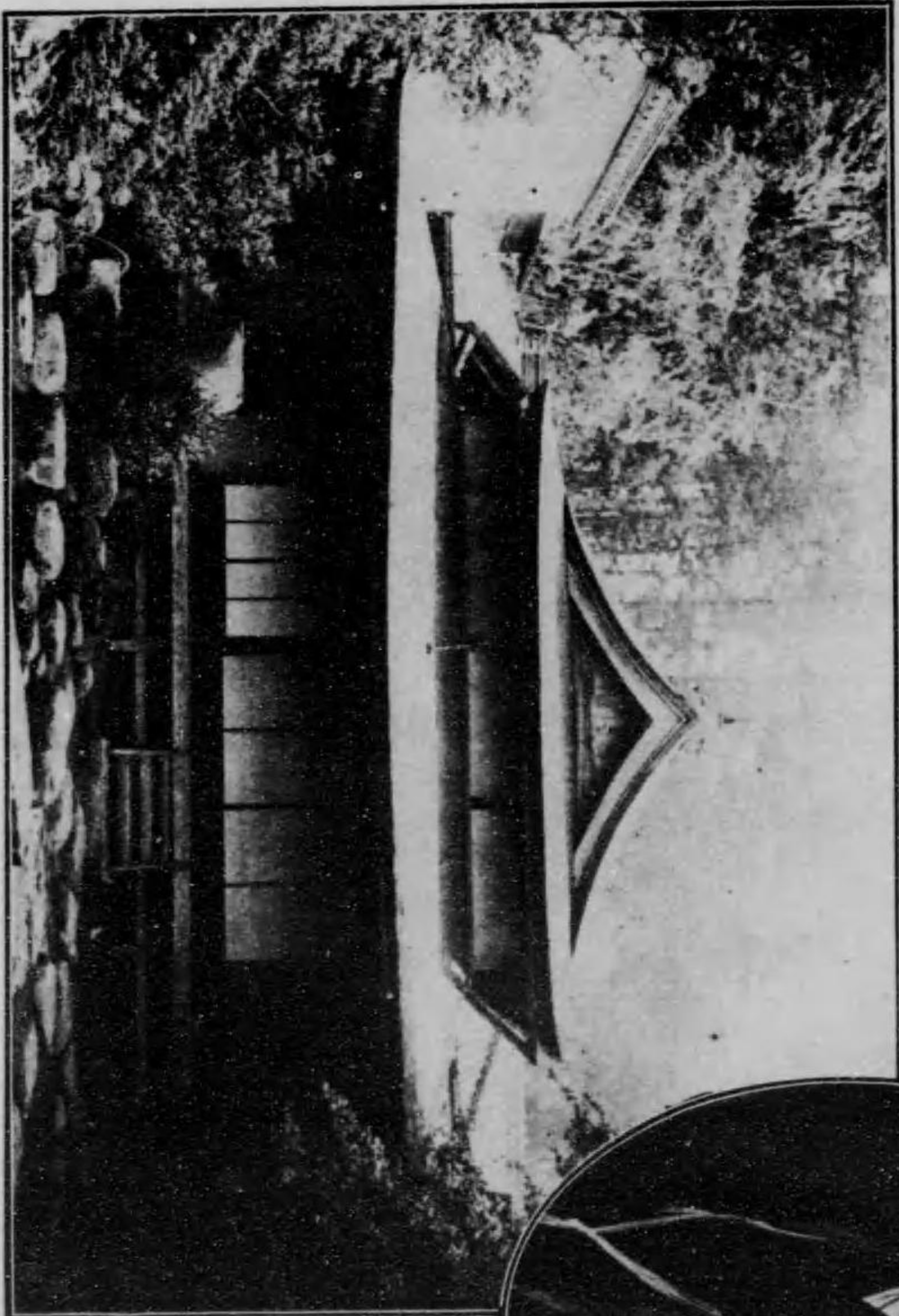
大正十三年三月三十一日

高尾山藥王院貫首
傳燈大阿闍黎大僧正 範秀 敬白

成田山新勝寺が其淨財を喜捨して經營する五事業は歳とともに盛大鞏固となり、國家社會に貢獻したる功は決して尠しとなさず。最近、其の創立者にして又中心たりし石川照動僧正が遷化せられたるは一大恨事なりと雖も、後繼者荒木照定僧正のあるありて、克く其遺風を傳へ、層一層の發展を見るべきは、燭照して龜卜するよりも明に、又五事業に従事する諸氏が、故僧正の遺志を紹いで、其美を濟さんことは信じて疑はざるなり。蓋し五事業の前途は洋々として海の如きものあるなり。

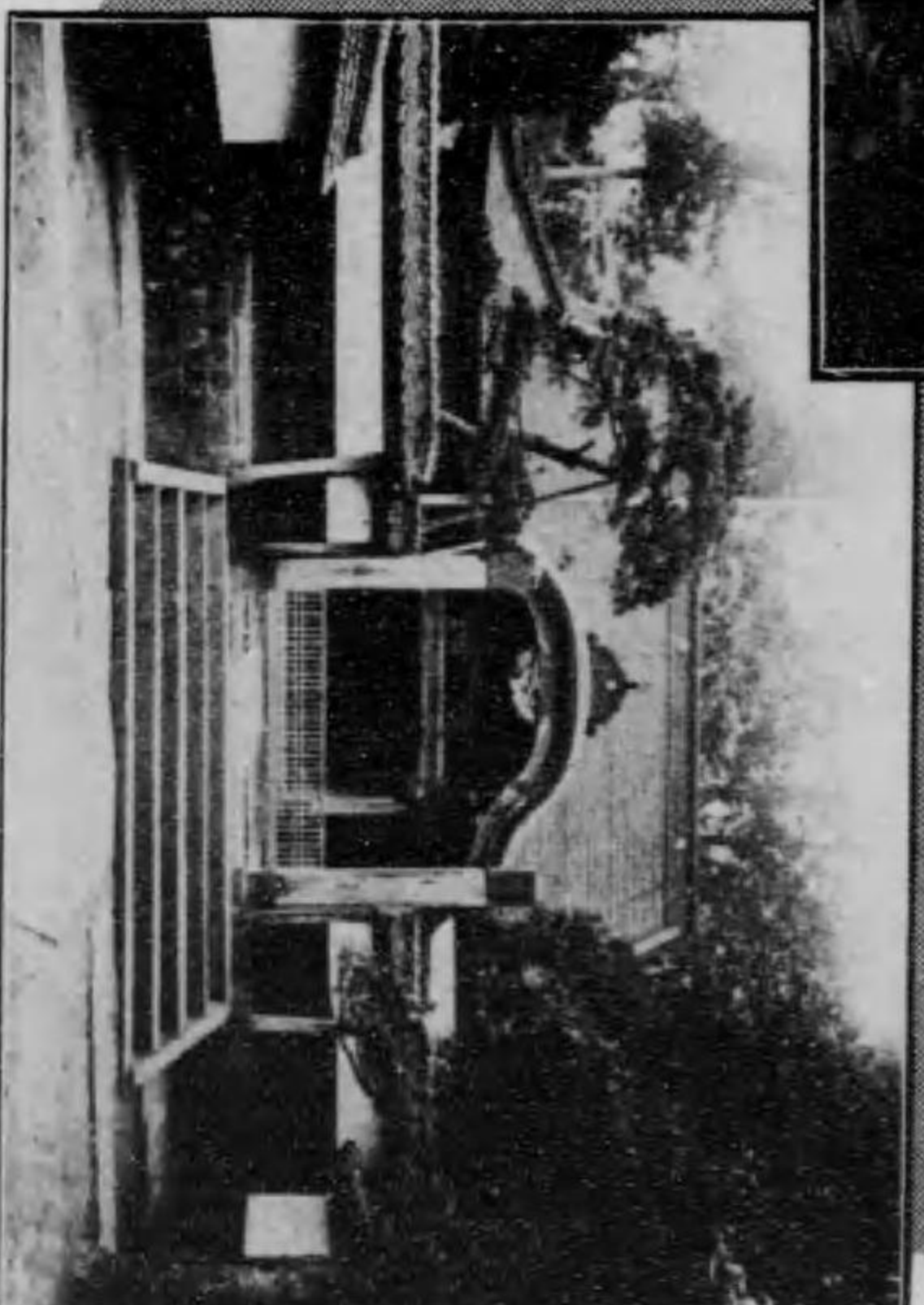
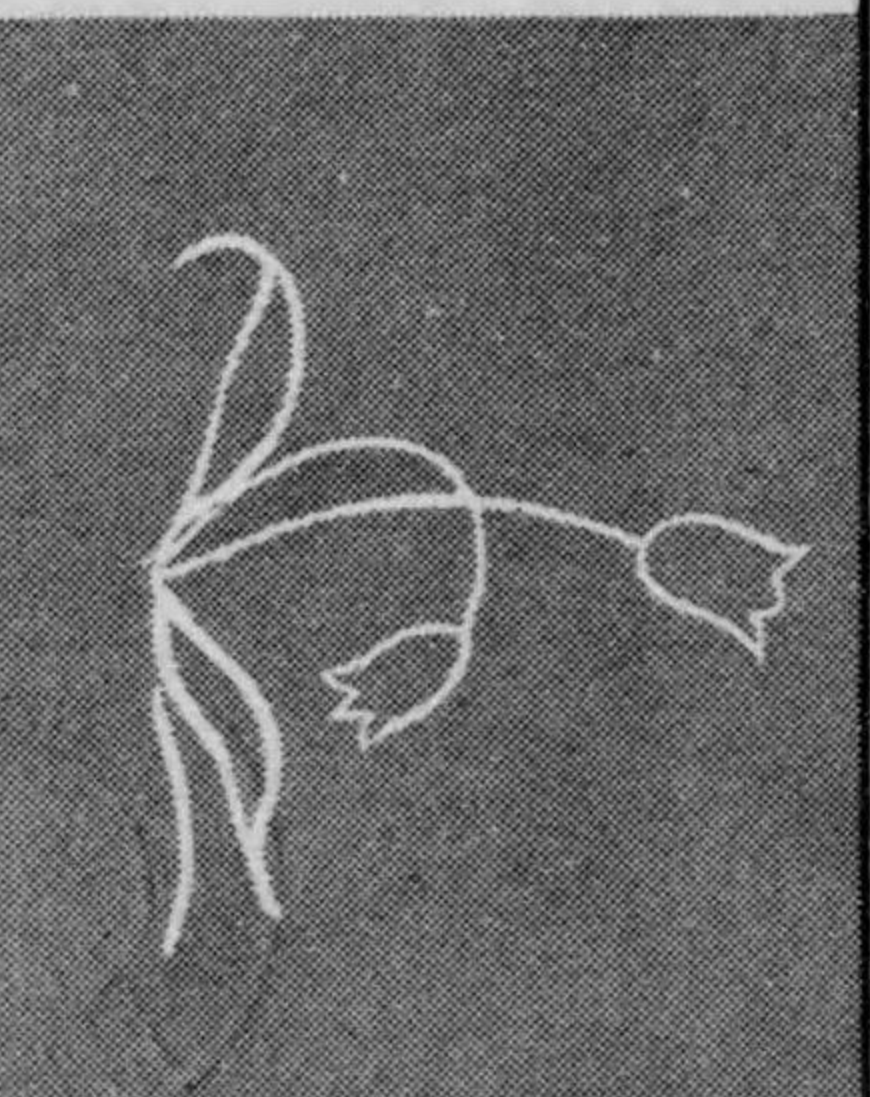
笹川 臨風

五十餘年夢一場 半生功業法薰香 明星忽落梅花冷 嫋々東風引恨長
哭石川大僧正 辱知雨峯小林正盛



成田山新勝寺と正僧大川石首貫山田成放

成田山仁王門



新勝寺

成田中學校一覽

沿革大略	一
學 期	二
成田中學校校則	三
職員表	一〇
生徒表	一一
英漢對照卒業生人名	一五
卒業生人名及現況表	一七
卒業生及生徒別表	三四
編 費	三四

露光量違いの為重複撮影

東京女子高等師範学校教授
文學博士 柴尾上八郎氏作歌

學習院教官
小松新輔氏作曲

一
戦はをさまりはてし

ほがらけき東のみそら

校
櫻爛と日こそはのぼれ

さめよさめよ成郎の健兒

二

雲城は不落のとりで

御すがたは降魔の守

業社丹の校旗のもとに

つどへつどへ成郎の健兒

三
勤勉と克己と慈悲と

忠勇と剛毅と素朴

楯となし 劔となして

立てよ立てよ成郎の健兒

四

全世界再び捲きて

起るべき平和のいくば

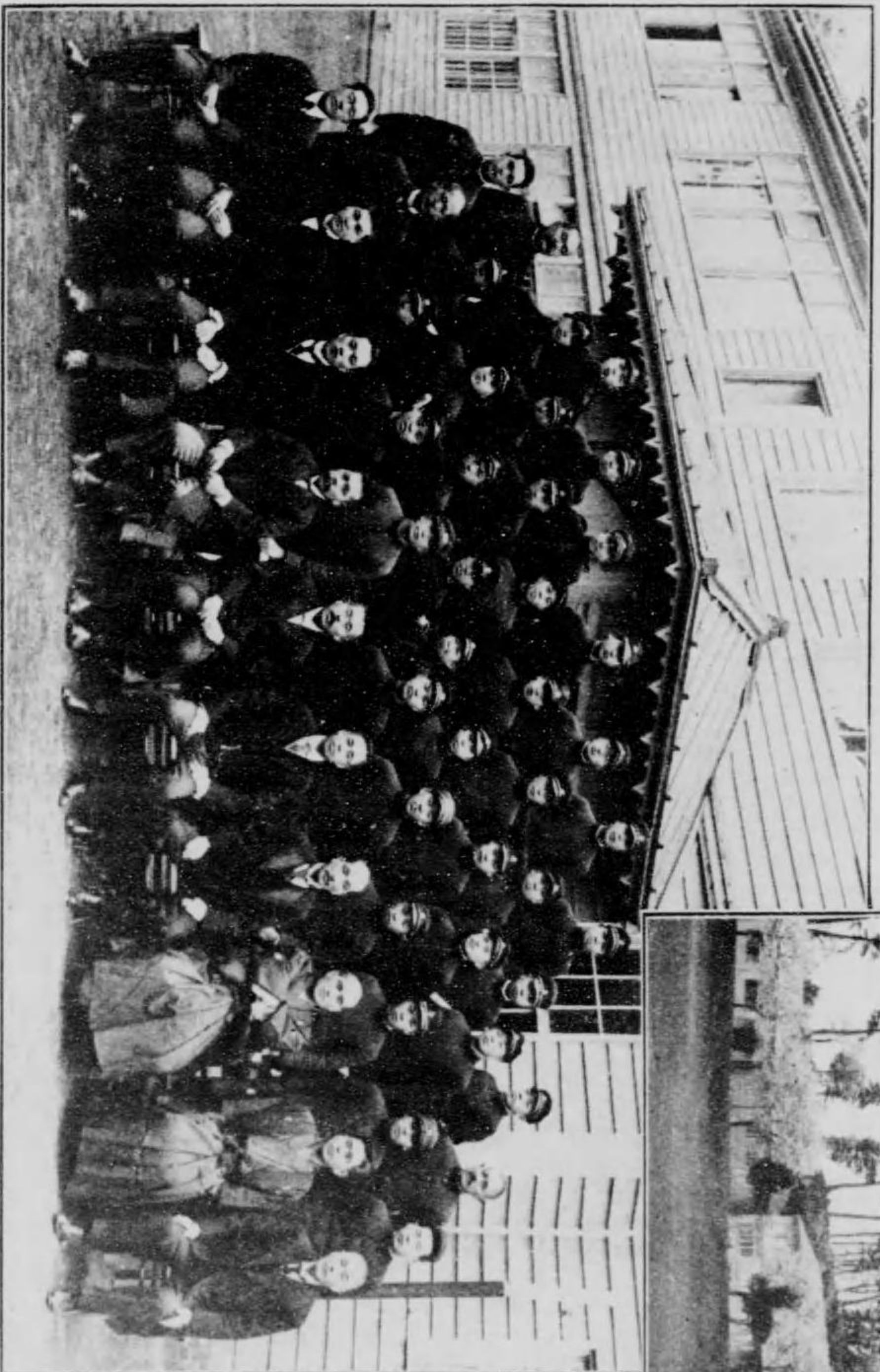
光ある勝利の冠

とれよとれよ成郎の健兒

(第十八回卒業を寄贈)

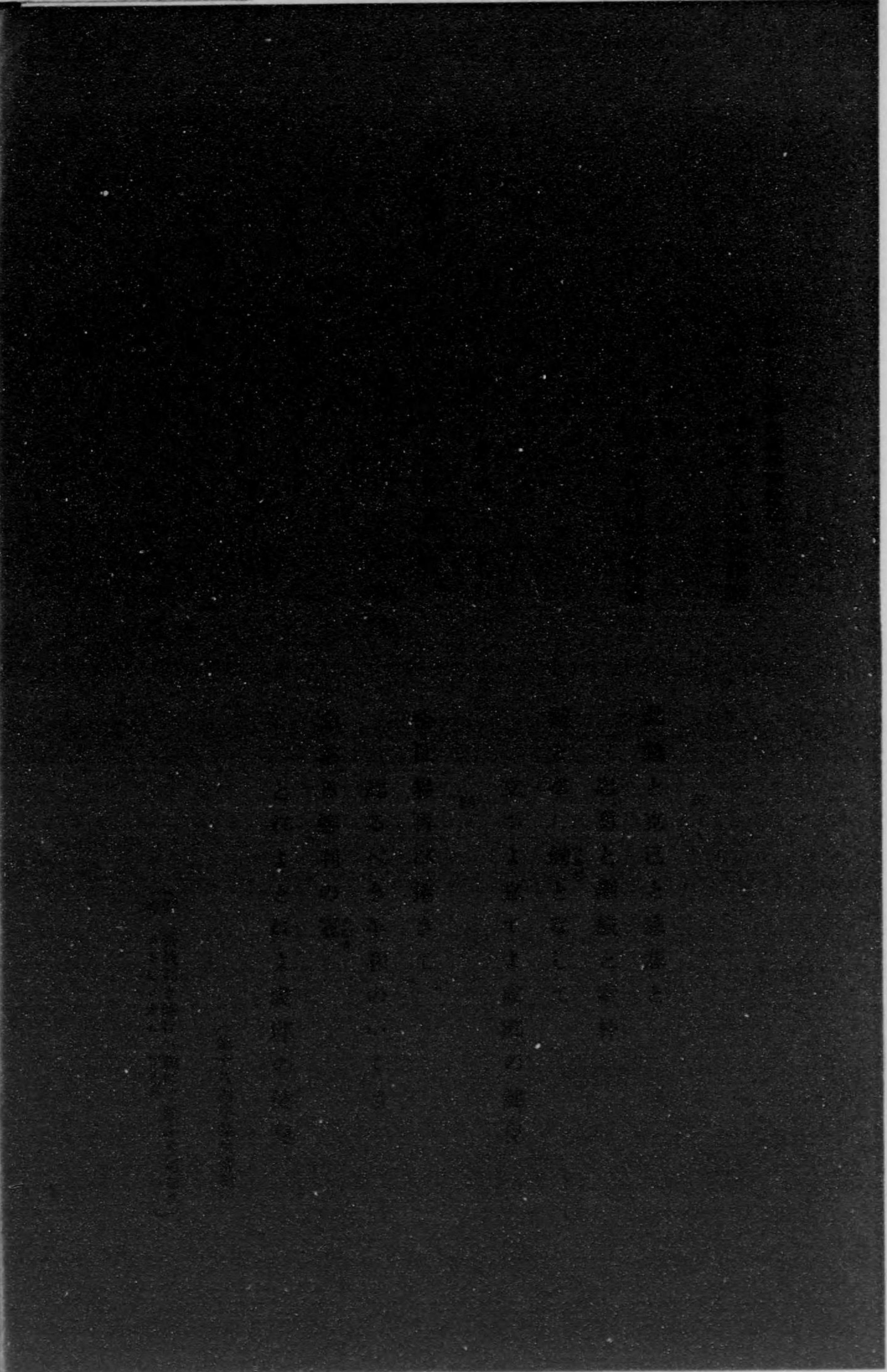
(撮影時「露光量」を調節して、異なる露光量で撮影した)

成田中學校

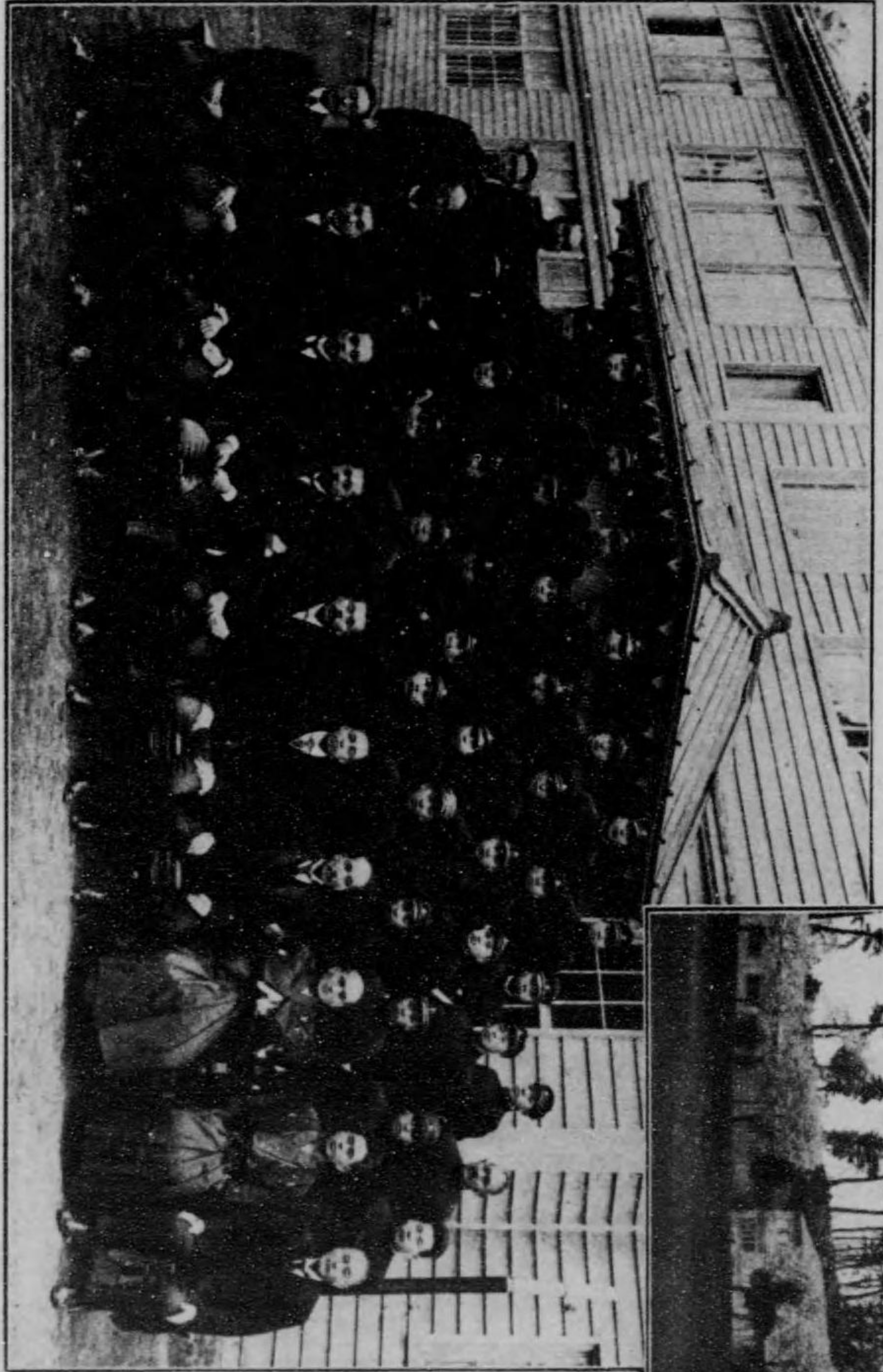


教職員及第三十回卒業生

露光量違いの為重複撮影



成田中学校



教職員及第三十回卒業生

私立成田中學校一覽

(大正十三年四月卅日現在)

◎沿革大略

私立成田中學校は明治三十一年十月七日文部大臣の認可を得て舊成田英漢義塾を改稱したるものにして、圖書館女學校幼稚園感化院と共に成田山新勝寺の施設せる公共事業の一部に係る。

英漢義塾は明治三十一年八月新勝寺先々代の住職正七位大僧正三池照鳳師が有志石川甚兵衛(先代)、諸岡勝太郎(先代)、其他の諸氏と謀り地方の公共教育機關として設立したる中等學校にして、全く三池師の篤志に出生したるなり。修業年限三箇年の規定にて高等小學校卒業以上及び其と同等の學力あるものを收容せり。宮村三多氏最初の塾長に任命せられ二十三年一月に至りて濱田義雄氏其跡を襲ふ此年第一回の卒業生を出す已にして濱田氏辭任。福山龜太郎氏來任せしが二十四年二月に至り和田玉一氏代り立てり。二十九年六月塾主三池師入寂せられ前貫首大僧正石川照勤師繼で塾主となる。三十一年七月新勝寺院代少僧正服部照和師當時在歐中の塾主の囑託を受けて中學校認可を文部大臣に

稟請す、次で千葉縣知事安部浩氏臨校せらる。十月七日成田中學校と改稱の件認可下る。三十一年十一月女學士喜田貞吉氏校長に任せらる。三十二年三月文部次官奥田義人、商工局長木内重四郎兩氏臨校せらる。八月喜田氏辭任。竹内楠三氏來り代る。

此時まで學校は成田町字東谷なる現圖書館の地所に位置せしが中學校認可と共に現在校舎の土工を起し三十三年六月落成す。淺井造、宮田半左衛門(先代)、諸岡市郎左衛門(先代)、飯倉郁太郎の諸氏及評議員三橋金太郎氏建築委員として盡力せり。三月校主歸朝す。六月二十七日落成式を舉行す。文部大臣樺山資紀氏以下朝野の名士多數の參列あり。先是三十三年三月文部省告示第五號により徵兵猶豫の特典を附與せらる。又四月十日校旗授與式を行へり。三十四年七月竹内氏辭し前校主石川照勤師校長を兼ね。三十五年四月中學校となりての第一回卒業生を出す。知事代理來臨、七月粟根鐵藏氏校長事務代理を命ぜらる。三十六年三月第二回卒業生を出す。板垣退助伯來臨せらる。三十七年三

月第三回卒業式を行ひ千葉縣知事石原健三氏臨校。三十八年三月第四回卒業生を出す。千葉縣知事代理臨席。三十九年三月第五回卒業生出づ、千葉縣知事代理臨席。四十年三月第六回卒業生を出す。四十一年三月第七回卒業生を出す。九月文學博士白鳥庫吉氏に本校顧問を囑託す。同月校長事務代理栗根氏辭任。文學士葛原運次郎氏來任。次で校長事務代理に校務主監の名稱を附す。四十二年三月第八回卒業生を。四十三年三月第九回卒業生を。四十四年三月第十回卒業生を。四十五年三月第十一回卒業生を。大正二年三月第十二回卒業生を送る。大正二年七月葛原主監辭任し文學士佐竹元二氏主監に任命せらる。大正三年三月第十三回卒業生を送る。大正四年三月文部省普通學務局長田所美治氏臨校せらる。大正四年三月第十四回卒業生を送る。大正四年六月生徒控場改築落成す。大正五年三月第十五回卒業生を送る。大正五年三月佐竹主監辭任。文學士佐藤禮云氏主監に任ぜらる。大正五年四月文部省參政官大津淳一郎氏の臨校あり。大正六年三月第十六回卒業式を行ひ文部大臣代理、千葉縣知事代理、陸軍大將福島安正閣下及び上田文科大學長等臨校せらる。

大正七年三月第十七回卒業式を行ひ千葉縣知事折原巳一郎氏臨席せらる。大正八年三月第十八回卒業式を行ふ、千葉縣知事代理臨校あり。大正八年四月佐藤主監辭任。大正八年七月濱田丑之助氏主監に任ぜらる。大正九年三月第十九回卒業式を行ふ千葉縣知事代理臨席あり。大正九年九月濱田主監辭任。同年同月文學士名川彦作氏主監に任ぜらる。大正十年三月第二十回卒業式を行ふ。大正十一年三月第二十一回卒業式を行ふ千葉縣知事折原巳一郎氏臨席せらる。大正十二年三月第二十二回卒業式を行ふ。大正十三年一月名川主監辭任。大正十三年一月三十一日校主兼校長石川照勤現下遷化せらる。大正十三年二月文學博士笹川種郎氏校長に任ぜられ。大正十三年三月第二十三回卒業式を行ふ。千葉縣知事代理山川教育課長臨校せらる。

◎學 曆

四 月
 一日 第一學期開始、始業式、入學式
 午前八時始業、
 中 旬 一日遠足

下 旬 身體検査

五 月

中 旬 一泊旅行

六 月

一 日 夏服用、服装検査

初 旬 野球小會、庭球小會、文藝部小會

七 月

中 旬 第一學期試験、第一學期終業式

廿一日 夏季休業始

八 月

卅一日 第一學期終

九 月

一 日 第二學期開始、始業式

十 月

一 日 冬服用、服装検査

七 日 創立記念日

中 旬 武道小會、野球庭球大會、文藝會、修學旅行

卅一日 天長節祝日

十一 月

一 日 午前九時始業

上 旬 遠足又は長距離競走

中 旬 發火演習

十一 月

中 旬 第二學期試験

下 旬 第二學期終業式

廿六日 冬季休業始

卅一日 第二學期終

一 月

一 日 第三學期開始、新年拜賀式

七 日 冬季休業終

八 日 第三學期始業式

中 旬 五年級生徒志望調査

自中 旬 武道塞稽古

至下 旬 次學年教科書選定

二 月

十一 日 紀元節

中 旬 武道大會、文藝會

下 旬 校友會誌發行

三 月

上 旬 第五年級卒業試験、第五年級終業式

中甸 第四年級以下學年試驗、第四年級以下終業式
 中甸 卒業式
 下旬 入學試驗、入學試驗合格者發表
 卅一日 第三學期終

◎成田中學校校則

第一章 總 則

第一條 本校は男子に須要なる高等普通教育をなすを以て目的とし特に國民道德の養成に力む
 第二條 本校の修業年限を五箇年とし一年を以て一學年とす
 但學年は四月一日に始まり翌年三月三十一日に終る
 第三條 一學年を分ちて三學期とす左の如し
 第一學期 四月一日より八月三十一日に至る
 第二學期 九月一日より十二月三十一日に至る
 第三學期 一月一日より三月三十一日に至る
 第四條 休業日左の如し
 各日曜日、開校記念日(毎年十月七日) 大祭日、祝日、夏季休業(七月二十一日より八月卅一日に至る) 冬季休業(十二月二十五日より一月七日に至る)

第二章 學科課程及授業時間
 第一條 各學科の配當并に毎週時間數は別紙に依る
 第三章 試 驗
 第一條 試驗を分ちて學期試驗學年試驗の二種とす
 第二條 學期試驗は其學期間に授業せし科目に付之れを行ふ
 第三條 學年試驗は學年の終に於て該學年間に授業せし全學科に付之れを行ふものとす
 第四條 試驗の評點は各一學年毎に百點を以て最高點とす
 第五條 各教員は其受持學科に就き日課點を附す
 第六條 各學科の學期試驗評點は其學期中に於ける日課點の平均點と學期試驗點とを加へ其和を二除したるものとす
 第七條 各學科の學年試驗評點は第一第二學期試驗評點と學年試驗評點とを加へ其和を三除したるものとす
 但第三學期の平常點は學年試驗の成績に參酌するものとす
 第八條 各學年の學年評點五十點以上總約點六十點以

學科課程 每週教授時數表

科	學年	時數	第一學年	第二學年	第三學年	第四學年	第五學年
修身	一	一	生徒心得、教育ニ關スル勸語、作法	道德ノ要領	一	一	一
國語及漢文	八	八	國語講讀、漢文講讀、作文、習字	同上	六	六	六
外國語	六	七	發音練習、讀方及譯解、讀方及譯解、習字	同上	七	七	七
歷史	三	三	日本歷史	日本歷史	世界歷史	世界歷史	日本歷史、外國歷史、自然地理概説、人文地理概説
地理	三	三	日本地理	日本地理	世界地理	世界地理	同上
數學	五	五	算術	代數	代數、幾何	代數、幾何	代數、幾何
博物	二	二	植物、動物	同上	同上	同上	同上
物理及化學	二	二	同上	同上	同上	同上	同上
法制及經濟	二	二	同上	同上	同上	同上	同上
圖畫	一	一	自在畫	同上	同上	同上	同上
唱歌	一	一	同上	同上	同上	同上	同上
體操	三	三	體操教練及遊戲(擊劍及柔術)	同上	同上	同上	同上
計	三九	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇

上を得るにあらざれば進級するを得ず但一學科四十點以上のもの三學科以内なるときは進級せしむることあるべし

第九條 學年試験に正當の事故の爲め豫め届出の上缺席したるものは追試験を行ふことあるべし但此の場合に於ては其得點の十分の二を減じ之れを試験點と定む

第四章 入學及退學

第一條 生徒の入學は毎學年の始とす但缺員あるときは學期の始めに於て募集することあるべし

第二條 本校第一年級に入學を許すべきものは尋常小學校第六學年卒業のものは其卒業證により其他の志願者は入學試験に合格せるものを取る但尋常小學校第六學年卒業の者と雖も志願者の數募集人員に超過するときは入學試験を執行すべし

第三條 第一年級の入學試験は尋常小學校第六學年を修了したるものに對しては讀書、作文、習字、算術の四科目に就き其他の志願者に對しては尙ほ日本地理、日本歴史を加へ尋常小學校第六學年卒業以上の程度に依り試験を行ふべし

第四條 第二年級以上に入學を許可すべきものは相當年齢に達し其學級に相當する學力試験に合格したるものに限る

第五條 他の中學校より轉學せんと欲する者ある時は缺員ある場合に限り入學を許可することあるべし但前學校と學科の配當に差異あるときは其學科に限り試験を行ひ前學校と同年級或は一級下に編入す

第六條 凡て本校に入學せんと欲するものは體格検査を施し合格せざるものは入學を許可せず

第七條 入學志願者は左の書式に依り入學願書に履歷書を差出すべし但尋常小學校六學年以上の課程を了へたる入學志願者は更に修業證書又は卒業證書を添へ該書なき者は校長又は首席訓導の證明書を添ふべし

入學願書 (用紙半紙 二ツ折)

私儀御校何年級に入學志願に付御許可相成度此段奉願候也
年 月 日

在學證書 (用紙半紙 二ツ折)

印
參入 紙入 錢
保證人の印
私儀今般入學御許可相成候に付ては在學中御規則命令等堅く遵奉可仕候也

住所 誰子弟 姓名 生年月日 名 印

前記之通相違無之候に付拙者保證人に相立ち御規則命令等堅く相守らせ本人に關する事件一切引受可申候也
年 月 日 住所 族籍職業 姓名 生年月日 名 印

成田中學校長 何某殿 姓名 名 印
右保證人は丁年以上の男子にして本町(村)内に於て一家計を立つる者に相違無之候也
年 月 日 何府何縣何郡何市何町村長 某 印

住所族籍 戶主誰子弟 姓名 生年月日 名 印

成田中學校長 何 誰 殿

履 歷 書 (用紙半紙 二ツ折)

本籍 何府縣何市何郡町村何番地
現在 族籍、戶主に非れば誰子弟 姓名 生年月日 名 印
一何年何月より何年何月まで何學校に何學修業
一何年何月何學校を卒業
一何年何月何の廉に付何賞或は何罰を受く
右之通相違無之候也
年 月 日 右 姓名 名 印

第八條 入學の許可を得たるものは一週間以内に左式の在學證書并に戶籍謄本を差出すべし

第九條 保證人は父兄親戚又は後見人中丁年以上の男子にして一家計を立つる者に限る

第十條 保證人は豫め本校長の承諾を得たるものたるべし

第十一條 保證人の資格上不適當と認めるときは之れを變更せしむることあるべし

第十二條 左の場合に於ては退學を命ず

- (一) 性行不良にして改善の見込なしと認めたる者
- (二) 學力劣等にして成業の見込なしと認めたる者
- (三) 引續き一箇年以上缺席したる者
- (四) 正當の事由なくして引續き一ヶ月以上缺席したる者

(五) 授業料怠納二ヶ月以上に亘るもの

(六) 疾病等故に因り學業を履修する能はざるものと認めらるるもの

(七) 出席常ならざるもの

第十三條 中途退學せんと欲するものは保證人連署を以て其理由を具し願出づべし

第五章 授業料

第一條 授業料は一ヶ月金貳圓五拾錢とす

第二條 生徒在學中は出席の有無に拘はらず毎月五日迄に納むべし但毎年八月は納むるを要せず

第三條 授業料納付期日を過ぎ五日以内に尙ほ納めざるものは納入済まで停學を命じ保證人をして之を納めしむ

第四條 入學の許可を得たるものは入學金壹圓を納むべし

第五條 左の各項に該當するものは授業料を減免す

- 一 學力優等品行方正にして他生の模範たるべきもの
 - 一 戦時若しくは事變に際し召集せられたる者の子弟
 - 一 貧困にして資力なく學力品行中等以上なるもの
- 但此第三の場合に於ては父兄又は後見人より特に願書を差出さしめ又本人に對しては相當の義務を負はしむ

第六章 賞 罰

第一條 品行方正學術優等の者には一學年間の授業料を免除し又は賞品賞狀を授與することあるべし

第二條 規則命令に違背し又は風紀を害するものは戒飭、留置、停學、放校の罰に處す

第三條 學校の建物器具器械標本等を毀損又は亡失し

たるときは相當の賠償をなさしむることあるべし

第七章 寄宿舎

第一條 寄宿舎は本校生徒にして父兄及保證人の住宅より通學し能はざるものをして寄宿せしむる所とす但場合により下宿を命ずることあるべし

第二條 寄宿生は食費及舎費を毎月五日以内に納むべし若し故なくして期間内に納めざる者は退舎を命じ未納の費額は保證人より追徴す

但食費の外電燈料の實費を徴集す

第三條 入舎の許可を得たるものは左の保證書を差出すべし

保 證 書

(用紙半紙二ツ折)

<p>御校何年生某儀今般寄宿舎へ入舎致し候上は本人入舎中金員物品の辨償は勿論本人身上に關する一切の事件負擔可仕候仍て保證書如件</p> <p>年 月 日 住所番地族籍 保證人 姓 名 印</p> <p>成田中學校長 何 誰 殿</p>	<p>參 錢 入 紙 印</p>
--	------------------

第四條 保證人に異動あるときは直ちに届出相當の手續をなすべし

第五條 退舎せんと欲するものは事由を記し保證人連署の上願書を差出し許可を受くべし

第八章 服 制

第一條 生徒登校の時は必ず制服制帽を用ふべし

第二條 制帽の地質は黒羅紗にして本校の徽章を附すべし

第三條 制服はジャケット製ホック止めにして地質は紺色又は黒色のヘル若しくは小倉織を用ふべし

但し夏服は小倉の霜降とす

第四條 制服を未だ調製せざるもの若しくは汚損したるものは許可を得て代用服を着用すべし

第五條 代用服は筒袖にして袴を着用すべし

第六條 制服又は代用服を着用するにあらざれば教場に入るを許さず但新入學生に限り指定の期間中制服調製の間は代用服を許す

飯田清太郎

香取 滑河
印旛 成田

小倉信輔

印旛 成田
安房北三原

○福田一太郎

新橋 定江津

堀内季己

香取 滑河
香取 小御門
印旛 本埜

小窪仁

印旛 本埜
印旛 中郷

石川俊吾

印旛 八生
印旛 遠山

日暮真己

香取 高岡
印旛 白井

秋葉武四郎

印旛 富里
印旛 遠山

石川仁

印旛 安喚
香取 滑河

青野彦真

香取 高岡
印旛 成田

大竹久直保

香取 本大綱實
香取 滑河

堀川和仁

印旛 中郷
印旛 多古

中野三樹

印旛 成田

矢島新章

印旛 成田

三原省吾

印旛 成田

武藤文哉

印旛 永治

富澤久治

印旛 成田

佐藤芳雄

印旛 成田

關川邦雄

印旛 成田

加菅孝實

印旛 成田

山邊高晃

香取 神崎

青藤吉三

印旛 成田

香取不二夫

印旛 成田

渡邊高晃

山梨縣古關

齋藤文哉

印旛 成田

菅取孝實

印旛 成田

山邊高晃

香取 神崎

矢野喜亮

鹿兒島春日
印旛 安喚

菅取孝實

印旛 成田

山邊高晃

香取 神崎

○山田武藏

印旛 遠山

伊藤武雄

印旛 遠山

大久原安次

印旛 富里

石原武藏

印旛 成田

木村秀明

印旛 成田

山邊高晃

印旛 成田

川村一

印旛 遠山

諏訪原民雄

印旛 成田

山邊高晃

印旛 成田

鈴村茂作

印旛 遠山

土井平

印旛 成田

山邊高晃

印旛 成田

大鬼澤友藏

印旛 成田

大山島卓

印旛 成田

山邊高晃

印旛 成田

池田大輔

山武千代田
印旛 八生

古木春基

印旛 中郷

山邊高晃

印旛 成田

瀧澤昇

印旛 成田

藤崎末白

印旛 遠山

山邊高晃

印旛 成田

○笹川重己

山武千代田
香取 香取

長島五郎

印旛 成田

山邊高晃

印旛 成田

香取久四郎

印旛 安喚

京須清三郎

印旛 成田

山邊高晃

印旛 成田

伊藤一男

印旛 成田

鈴木順吉

印旛 成田

山邊高晃

印旛 成田

羽倉格

印旛 成田

山崎要吉

印旛 成田

山邊高晃

印旛 成田

大久保恒吉

印旛 成田

宮本左衛門

印旛 成田

山邊高晃

印旛 成田

○鈴木順道

印旛 成田

渡邊善左衛門

印旛 成田

山邊高晃

印旛 成田

關川順道

印旛 成田

浪川四郎

印旛 成田

山邊高晃

印旛 成田

○諸岡新

印旛 成田

松田晴源

印旛 成田

山邊高晃

印旛 成田

木内憲一

香取 多古

佐藤與之助

秋田縣内本步
印旛 中郷

山邊高晃

印旛 成田

飯塚金治

印旛 成田

金子孝茂

印旛 成田

山邊高晃

印旛 成田

丸盛一

印旛 成田

高橋亥年生

印旛 成田

山邊高晃

印旛 成田

高橋亥年生

印旛 成田

高橋亥年生

印旛 成田

山邊高晃

印旛 成田

第一回卒業生 (明治二十二年三月)

法學士 北田彦三郎

三橋金太郎

第二回卒業生 (明治二十五年三月)

× 山田兵治

◎成田英漢義塾卒業生人名

(×死亡)

第三回卒業生 (明治二十六年三月)

吉川 松太郎
法學士 石井 佐次馬
穴倉 高次郎
山田 市太郎
石川 英之助
岡本 幸造
山田 要之助

根本 太一
高梨 盛太郎
石川 昌三
太田 家績
山本 喜助
多田 喜寧
藤崎 欽哉
森原 友之助
篠原 友之助
林田 政吉

(山本改)
河津 金四郎
岡本 保
山野 富五郎
堀井 富五郎
石井 喜一
長谷川 慶
小野 寺弘
木内 啓司
玉造 泰助
細田 孝司

第四回卒業生 (明治二十七年三月)

砲兵大佐 林 政次郎
大野 市太郎
湯淺 眞二郎
藤崎 仁三郎

第七回卒業生 (明治三十年三月)

赤谷 由助
木内 民雄
米津 重次郎
湯淺 暉
石渡 恒三郎
林田 恒三郎
並木 喜太郎
弘

選科履修生 (明治三十一年三月)

原 久藏
山口 要太郎
戸村 喜助
香取 友吉
唯 謹 吾

第五回卒業生 (明治二十八年三月)

伊藤 幸次郎
林田 恒藏
篠崎 幸吉
惠口 忠治
山崎 傳七

第八回卒業生 (明治三十一年三月)

並木 喜太郎
弘

第六回卒業生 (明治二十九年三月)

◎卒業生人名及現況表 (×死亡)

第一回卒業生(六名) (明治三十五年三月)

千葉縣立大多喜中學校長 文學士 小野寺精一郎 印旛成田
朝鮮總督府通信局工務課長 工學士 飯倉 文甫 印旛成田

第三回卒業生(十八名) (明治三十七年三月)

×渡邊 政助 印旛成田
小川 源一郎 印旛公津
×額賀清右衛門 鹿島白鳥
飯倉 貞造 印旛成田
寺内 一夫 印旛成田
後藤 七郎 印旛八生
瀧澤 徳治郎 印旛成田
遠藤 與惣平 印旛六津
木内 茂助 印旛成田
小川 利太郎 印旛公津
×藤倉 精助 印旛成田
佐々木 收治 千葉 川島
田中 重衛 埼玉 北足立
加藤 右二 印旛中郷
神崎 庄助 印旛成田

第二回卒業生(八名) (明治三十六年三月)

×京 須 幸 印旛成田
神崎 義俱 印旛遠山
加納 金助 印旛遠山
高橋 照文 山武南郷
小川 克己 印旛八生
吉岡 猛 印旛酒々井
加藤 芳之助 香取 大須賀
黒川 信 印旛成田

私立成田中學校一覽

私立成田中學校一覽

渡米實業

醫師(慈惠醫學士)

實業

那須 文治 香取飯田

(田中改)

山本 順 印旛成田

多田 亨 印旛公津

第四回卒業生(廿二名) (明治三十八年三月)

芝浦製作所技師 東京高工卒業(加藤改)

大日本農會在勤

尼夕崎紡績會社橋場工場技師 工學士

醫師(千葉醫學專卒業)

渡米醫學研究

埼玉縣秩谷縣隊區司令部步兵大尉

實業

八王子高等女學校教諭(早大卒業)

實業

醫師(千葉醫學專卒業)

實業

小學校教師

中央新聞社在職

兵庫縣兵庫製糖株式會社在職

小學校教師

實業(早稻田大學卒業)

實業

實業

實業

實業(在朝鮮)

藤崎 倭一 印旛富里

藤崎 宗平 印旛遠山

小川 明 印旛中郷

黒川 傳 印旛成田

石原 泰次郎 印旛成田

松本 保 六分字佐

第五回卒業生(廿二名) (明治三十九年三月)

實業

實業

三井物産會社社員(東京高商卒業)

實業

醫師(慈惠醫學士)

京都醫學專卒業

實業

實業

樺太廳中學校教諭(京都高等工藝卒業)

北海道藤田組加比字牧場技師

(東京農支卒業)

野田電燈會社支配人

實業

小倉 榮二郎 印旛成田

長谷川 治吉 印旛成田

土肥 多助 印旛富里

三橋 英治 印旛成田

土屋 圓 山武瑞穂

佐藤 繁藏 安房由基

山野 裕三 印旛成田

澤田 信三 印旛久住

小野寺英二郎 印旛成田

仁科 一 靜岡靜岡

鈴木 七郎 印旛八生

山野 隆治 印旛成田

萩原 長三 山武千代田

實業

南滿鐵道本社在勤

實業(歩兵少尉)

東京瓦斯會社浣橋研究所 (慶大卒業)

實業

第三銀行本店員

實業

實業

實業

實業

實業

實業

實業

實業

實業

實業

實業

實業

實業

實業

實業

實業

實業

實業

丸 良輔 印旛公津

石原 清泉 印旛成田

作田 紋平 山武地濱

淺井 信之 印旛成田

石橋 堯之助 印旛成田

松本 賴三 東京京橋

古矢 誠助 印旛成田

宮田七右衛門 印旛八生

清宮 俊平 印旛八生

石川 金太郎 印旛安食

櫻井 重助 香取遠山

泉 顯藏 茨城行方

黒川 孝 印旛成田

石橋 昇 印旛豊住

石井 孝司 印旛豊住

篠田 憲次郎 印旛八生

葛生 孝作 印旛八生

實業

實業

實業

實業

實業

實業

實業

實業

實業

實業

實業

實業

實業

實業

實業

實業

實業

實業

實業

實業

實業

實業

實業

實業

川島 芳夫 市原津津

藤崎 源一郎 印旛遠山

加藤 光太郎 印旛成田

吉田 新 印旛成田

廣瀬 海治 印旛本下

小川 義徳 山武千代田

鈴木 啓次郎 印旛安食

丸 善助 印旛公津

鈴木 忠治 印旛遠山

橋爪 石民 茨城稻敷

長谷川 利吉 印旛成田

藤崎 勇三郎 印旛遠山

五木田 康吉 印旛成田

石井 延太郎 印旛遠山

三橋 治平 印旛富里

竹村 克之 印旛富里

飯島 貞雄 東京芝

土井 彌一 印旛公津

藤崎 翠 印旛遠山

私立成田中學校一覽

第六回卒業生(廿二名) (明治四十年三月)

廣島縣西條農學校教諭

農學士

內務省特殊財産管理局事務官 法學士

小學校教師

官 吏

小學校教師

實業

實業

實業

實業

第七回卒業生(廿二名) (明治四十一年三月)

千葉縣農業技手

實業

官 吏

實業

實業

實業

實業

實業

實業

實業

第七回卒業生(廿二名) (明治四十一年三月)

長谷川改

實業

實業

實業

實業

實業

實業

實業

實業

實業

私立成田中學校一覽

小學校教師	額賀誠司	印旛成田	實業	河合清	印旛成田
朝鮮銀行浦鹽支店在職	小川清	茨城白鳥	ハルビン高田商會在職	× 藤田保	印旛公津
(東洋協會專門學校朝鮮語科卒業)	河野毅一	山武二川	(外國語學校支那語科卒業)	小山正義	茨城稻敷
實業	岡部秀澄	長生東郷	僧侶	織田順	印旛成田
在久留米三菱試驗事務所	小出清	印旛遠山	亞細亞丸見習機關士	小池嘉之	印旛成田
實業	× 野平四郎次	印旛富里	(大阪高等工業學校卒業)	× 池田榮助	山武千代田
東京市土木橋梁課技手	秋葉右馬之助	印旛豊住	仙臺稅務署在職	× 染谷恒次郎	印旛成田
(改王社工學校高等研究科卒業)	額賀忠孝	茨城白鳥	(大阪高等工業學校卒業)	石橋稔	香取滑川
小學校教師	蛭田真民	印旛豊住	實業	稻垣恒藏	印旛成田
小學校教師	吉岡七郎兵衛	印旛中郷	實業	長谷川桂	印旛成田
實業	小川新	印旛成田	貯金管理局在職	新橋旭	印旛豊住
東洋拓殖會社ハルビン支店在職	× 第十一回卒業生(卅二名)	(明治四十五年三月)	實業	× 江副節藏	東京京橋
大阪府警視	法學士 三橋孝一郎	印旛成田	僧侶	佐藤興仁	安房田原
齒科醫 日本齒科醫專卒業	鈴木靜	印旛中郷	東京瓦斯會社社員	河野和起	長生東郷
成田山感化院職員	大友惟誠	宮城志田	實業	× 日暮太一郎	印旛中郷
(東洋大學文學士)	梶谷循一	印旛安食	實業	岩館昌美	香取滑川
京都帝大工科卒業	瀧川俊雄	印旛成田	三里塚御料牧場員	山崎秋平	印旛飯高
(大阪鐵工所在職)	渡邊和一	印旛成田	實業	綿貫新作	印旛成田
實業(歩兵少尉)	渡邊由松	印旛成田	實業	大塚七郎	印旛成田
慶應義塾醫科助手(新潟醫專卒業)					

私立成田中學校一覽

醫師(新潟醫專卒業)	青柳公	印旛公津	日本棉花株式會社外國課在職	岩澤忠二	山武二川
實業	山田章吾	印旛安食	(東京外國語學校英語科卒業)	塚本憲一郎	香取滑川
東京赤坂區役所在勤	萩原廣	印旛宗像	僧侶(智山大學卒業)	青木榮俊	京都下京
僧侶	栗原照宣	東京八王子	小學校教師	新橋榮	印旛豊住
實業	鈴木廣雄	東京品川	實業	櫻井和	印旛富里
第十二回卒業生(廿八名)	齋藤義秀	印旛遠山	(並木改)	池田一介	東京日本橋
(大正二年三月)	加藤英一郎	印旛成田	小學校教師	大木喜三郎	匝理野口
東洋汽船株式會社在職	石井鼎	印旛遠山	實業	竹村和	印旛富里
(商船學校航海科卒業)	鈴木佐太郎	印旛富里	東京慈惠醫專卒業	飯塚英夫	香取多古
東京帝國大學法科大學卒業	小川浩平	山武千代田	實業	淺岡惠太郎	印旛成田
實業	内田毅	茨城行方	實業	鈴木高治	印旛公津
小學校教師	瀧澤榮亮	印旛成田	實業	菅澤忠爲	印旛遠山
成田中學校教諭(大阪高工卒業)	× 東美義照	東京淺草	實業	三橋仙次	印旛富里
實業	鈴木明	印旛富里	第十三回卒業生(廿七名)	戶村正夫	印旛川上
實業	× 辻愛吉	印旛遠山	(大正三年三月)	早川重雄	印旛成田
實業	内海喜男	印旛八生	鹽水港製糖株式會社在職(東京高商卒業)	藤崎源之助	印旛富里
實業	葛生清三郎	香取滑川	實業(東京帝大農科卒業)	蛭田白民	印旛豊住
小學校教師	三橋有方	印旛富里	警視廳保安部建築課内	山田要	印旛八生
實業	× 小柳秀吉	印旛成田	東京地方裁判所檢事補	丸才司	印旛公津

私立成田中學校一

二四

南滿洲撫順炭礦技師
(東亞同文書院工科卒業)
浦鹽朝鮮銀行在職
(東京外國語學校露語科卒業)

清水長陽 高知高知
竹尾式 印旛八生
山田進 印旛公津

實業
實業
實業

多田喜平 印旛公津
宮内忠雄 印旛八生
石井順 印旛成田

僧侶(智山大學卒業)

三枝照光 君津中郷

海軍主計中尉

岡部義麿 印旛遠山

千葉縣農事試驗場在職
(東京帝大農科卒業)

福島照瑞 印旛中郷

東北帝國大學理學部卒業
理學士

三橋藤太郎 印旛成田

上田蠶糸專門學校卒業

日暮與一 印旛中郷

千葉病院婦人科在職(千葉醫專卒業)

木川浩逸 香取東條

商科醫(東京商科醫專卒業)

大木顯一郎 印旛中郷

大阪商船株式會社在職(拓殖大學卒業)

藤崎總三郎 印旛遠山

東京不動銀行在職(早大商科卒業)

藤崎義雄 印旛遠山

成田役場吏員

小倉要 印旛成田

實業

長竹彦次郎 印旛成田

成田電氣株式會社社員

石井操 印旛遠山

實業

大木健 印旛成田

東亞商科醫專在學

戶村晋 印旛中郷

鐵道省東部管理局員

樁利一 香取滑川

實業

大木嘉平 印旛中郷

實業

出山博 印旛成田

實業

齋藤篤三郎 印旛遠山

實業

貝原塚豐 印旛八生

僧侶(智山大學卒業)

黑羽順教 栃木那須

實業

瀧澤誠 印旛成田

實業

丸善一 印旛公津

小學校教師

瓜生勘之丞 香取多古

小學校教師

大須賀清光 印旛酒井

八日市場蠶紙取締所在職
(上田蠶絲專門學校卒業)

佐瀨旭 印旛八生

實業

萩原正雄 香取多古

小學校教師

田島俊一 印旛北立

東北帝國大學農學部
農學士

吉岡博 印旛中郷

東京府立第一中學校教諭 箕輪平三改

平澤道雄 茨城鹿島

畜産教室助手

加藤浩 印旛八生

小學校教師

椎名勝美 印旛富里

實業

藤崎源一郎 印旛遠山

小學校教師

所晃一 香取多古

小學校教師

石川亮都 印旛遠山

小學校教師

石井與四郎 印旛成田

栃木中學校教諭
(東洋大學卒業)

小川團次 印旛安食

實業

長谷川英一 印旛成田

實業

湯淺健一 印旛八生

實業

加藤暢 印旛公津

醫師(日本醫專卒業)

戶村達郎 山武二川

實業

齋藤健雄 印旛公津

醫師(千葉醫專卒業)

藤崎穰 印旛遠山

實業

京須芳雄 印旛成田

實業

本多傳 印旛遠山

實業

高柳榮三郎 印旛豐住

商船學校機關科卒業

内田信一 山武二川

實業

鈴木金候 山武二川

目白中學校教諭(國學院大學卒業)

渡邊富吉 印旛成田

實業

岩井儀太郎 印旛富里

小學校教師

石川富士雄 印旛成田

實業

片野純三 岐阜大垣

小學校教師

安達國一 埼玉大宮

實業

鈴木秀之輔 印旛成田

實業

小川彌 山武千代田

實業

柳澤吉藏 印旛成田

實業

手島徹 山武千代田

實業

榎田正己 印旛成田

小學校教師

大竹茂 香取滑川

實業

高安盈仁 印旛成田

外國語學校支那語科在學

瀧澤榮一 印旛成田

實業

大沼潔 印旛成田

都留中學校教諭
(早稻田大學卒業)

河野八郎 印旛八生

實業

若月義宏 安房西條

實業

秋葉一吉 山武蓮沼

實業

伊藤茂 香取飯高

京都醫學專門學校在學

熊切儀一 夷隅古澤

實業

藤澤武雄 印旛成田

實業

片野春吉 岐阜大垣

實業

板倉誠 長生茂原

實業

齋藤七司 印旛公津

私立成田中學校一覽

二五

第十五回卒業生(卅五名)
(大正五年三月)
醫師(千葉醫專卒業)
東北帝國大學醫學部在學 (大木改)
栗林商船株式會社在職(小樽高商卒業)

阿部良策 印旛豐住
× 阿部良策 印旛豐住

私立成田中學校一覽

小學校教師

日本醫專在學

實業

實業

實業

實業

實業

實業

實業

實業

實業

實業

實業

實業

實業

實業

實業

實業

實業

(木内改)

伊藤 功

印旛富里

實業(步兵少尉)

山内 誠

印旛成田

早稻田大學在學

伊藤 保次

印旛成田

早稻田大學在學

紺谷 旭

印旛遠山

東京物理學校在學

小川 吉之助

印旛成田

小學校教師

鈴木 治郎

印旛公津

實業

池田 喜一

印旛富里

總武銀行一ノ宮支店在職

萩原 賢治

印旛富里

シヤパンメヂカルワールド社在職

字賀 近治

印旛白井

拓殖大學在學

岩井 平男

印旛大杜

齒科醫(東京齒科醫專卒業)

平山 久一郎

印旛成田

小學校教師

飯高 多一郎

香取 大須賀

小學校教師

秋山 寅郎

香取多古

小學校教師

堀田 彌太郎

印旛久住

三井礦山株式會社東京本店勤務(日暮改)

諸岡 照保

印旛成田

中央大學在學

秋葉 神

印旛富里

實業

齋藤 陽一

印旛成田

實業

深山 浩一

印旛旭

實業

長竹 達三

印旛成田

僧侶

二六

能勢 邦藏

千葉積橋

神山 雅一

印旛成田

竹尾 剛

印旛八生

内藤 達夫

茨城稻敷

渡邊 陸三

印旛成田

池田 義夫

印旛富里

大島 文吉

印旛八生

堀越 誠

山

池田 伊重郎

出武 千代田

永田 令藏

山形新庄

石橋 保

印旛富里

小川 斌

印旛公津

加藤 久治郎

香取本大須賀

湯淺 彦治

印旛成田

檜垣 達也

印旛久住

本多 義

印旛遠山

土井 平重

印旛公津

青柳 忍

印旛公津

長谷川 祐元

安房西條

實業

小學校教師

小學校教師

實業

實業

實業

實業

實業

實業

實業

實業

實業

實業

實業

實業

實業

實業

實業

實業

第十七回卒業生(卅五名)(大正七月三月)

東京帝國大學工科在學

東京帝國大學理科在學

慶應義塾大學在學

慶應義塾大學在學

櫻組製靴會社在職

慶應義塾大學在學

米澤中學校教諭心得

逓信省逓信官吏練習所在學

千葉病院內(千葉醫專卒業)

多田 元二

印旛公津

實業

根本 東海男

印旛公津

小學校教師

篠田 欣吾

印旛豐住

慶應義塾大學在學

石橋 健二

印旛豐住

實業(步兵少尉)

土肥 卓

印旛公津

早稻田大學商科在學

方波見 仲男

茨城鹿島

鐵道省在職

秋葉 三省

市原市東

早稻田大學商科在學

鈴木 斌敏

印旛公津

小學校教師

櫻井 一郎

香取 小門

實業

宇井 龍雄

印旛成田

日本大學卒業

木内 貫一

印旛久住

早稻田大學商科在學

野平 忠

印旛豐住

實業

西谷 謙堂

印旛豐住

實業

吉田 善四郎

東京神田

實業

飯塚 忠

香取多古

耕地整理技手

中野 圭曦

東京 豊多摩

實業

山内 卯之助

印旛成田

實業

鈴木 豊

印旛成田

實業

清水 東四郎

印旛成田

南滿洲鐵道在勤

(後藤改)

鈴木 德治

印旛成田

日色 四郎

香取滑河

神戸 隆太郎

印旛成田

大野 浩次

印旛安食

豊田 謹悟

印旛成田

山田 好助

印旛富里

石井 勝男

印旛成田

越川 明

印旛遠山

伊藤七右衛門

印旛久住

寺内 保

印旛成田

高橋 巖

印旛成田

田中 藤治

香取 小西門

小川 總良

出武 千代田

古川 廣

山武片貝

土井 規矩藏

印旛公津

長谷川 藤市

印旛成田

武士田 胖

印旛成田

實川 和男

出武 千代田

藤崎 英亮

印旛遠山

安藤 俊行

印旛久住

私立成田中學校一覽

二七

私立成田中學校一覽

東京帝國大學農學部助手
(農業大學卒業)

實業
實業
實業
實業

第拾八回卒業生(卅七名)

(大正八年三月)

慶應義塾大學在學

湯淺 三吾
湯淺 武之助

印旛八生
印旛八生

安房農業水産學校教諭
(國學院大學卒業)

津田沼騎兵第十四聯隊附三等獸醫
(駒場農科大學實科獸醫科卒業)

千 脇 辰
篠原 岩次郎

千葉更科
印旛成田

仙臺高工在學
千葉九十八銀行在職
(早稻田大學卒業)

上海東亞同文書院卒業

石川 順
糸川 平

印旛成田
印旛久住

實業
實業

實業

石橋 正也

印旛成田

實業

實業

葛生 幸吉

印旛安食

實業

實業

藤崎 信助

印旛高里

實業

實業

根本 新一

茨城稻敷

實業

實業

林 正雄

印旛成田

實業

實業

澤田 武

印旛中郷

實業

實業

小川 了介

山武 千代田

實業

實業
實業
實業

神崎 俊之助
相原 理三郎
石橋 進

印旛遠山
印旛公津
印旛富里

實業
實業
實業

第十九回卒業生(卅四名)

(大正九年三月)

東京高工在學

福田 郁次郎

香取滑川

早稻田大學在學

新潟醫專在學

深山 陽

印旛 旭

早稻田大學在學

東京帝國大學經濟科在學

若命 富郎

香取滑川

實業

東京日本橋郵便局在勤

岩立 源一郎

香取滑川

實業

海軍機關學校在學

高橋 勇雄

印旛公津

實業

新潟醫專在學

加藤 武夫

印旛成田

實業

千葉醫專在學

山崎 一雄

印旛永治

實業

成田電氣會社在職

鈴木 芳雄

印旛安食

實業

法政大學在學

大野 龜之助

印旛成田

實業

早稻田大學在學

宮崎 廣則

印旛成田

實業

實業

藤崎 章

印旛遠山

實業

實業

伊藤 豐

印旛久住

實業

東京齒科醫專在學

小川 俊一

印旛公津

實業

東京齒科醫專在學

竹村 秀壽

印旛成田

實業

私立成田中學校一覽

第二十回卒業生(卅六名)

(大正十年三月)

東京齒科醫專在學

飯田 榮亮

香取 大湊

實業

實業

藤崎 慶司

印旛成田

實業

實業

吉岡 彰

印旛中郷

實業

實業

寺内 五市

印旛中郷

實業

實業

磯山 儀一

印旛公津

實業

實業

大貫 平吉

印旛遠山

實業

實業

篠崎 忠男

印旛遠山

實業

實業

阿部 規矩治

印旛豊住

實業

實業

竹村 利雄

印旛富里

實業

實業

山崎 守

印旛木下

實業

實業

石井 權之尉

印旛遠山

實業

實業

石井 庄平

印旛成田

實業

實業

萩原 英一

印旛成田

實業

私立成田中學校一覽

三〇

東京高等工業學校在學
第一高等學校在學
文部省圖書館員教育所卒業
成田圖書館員

千葉師範二部卒業
早稻田高等學院在學
海軍機關學校在學
實業

京都智山大學在學
實業

小學校教師
中央大學在學
小學校教師
小學校教師

早稻田大學在學
東京外國語學校在學
第二高等學校在學
早稻田高等學院
大阪高等商業在學
實業

小學校教師
實業

東京商船學校在學

實業
弘前高等學校在學
日本火災保險會社在職
小學校教師
實業

萩原良作 印旛豐住
原義雄 印旛富里
高田定吉 印旛成田
安達一郎 印旛遠山
齋藤光治 印旛成田
松岡勝重 印旛遠山
鈴木除人 印旛大森
高野照典 印旛成田
大宮竹雄 印旛遠山
菅澤英 香取高岡
松田照應 印旛成田
內藤榮 實業
和田英 實業
大貫貞吉 印旛安食
泉瑞敏正 夷隅古澤
小倉良太郎 印旛八生
椎名永良 印旛安食
小海川昌則 印旛久住
手島英 山武千代田
秋山榮吉 印旛八生

實業
千葉醫科大學附屬藥學科在學
小學校教師
實業
實業
實業
實業
慶應義塾專科在學
慶應義塾專科在學
實業
實業
實業
實業
關田川運送株式會社在職
小學校教師
僧侶
水戸高等學校在學
水産講習所在學
慈惠院醫學專門學校在學

齋藤貞雄 印旛公津
萩原道三 海上銚子
後藤慎平 印旛安食
山崎信夫 印旛遠山
磯山宣 印旛公津
福田登 印旛遠山
藤崎巖 印旛中郷
寺内彌茂 印旛成田
宇井聖 印旛成田
石川秀雄 印旛成田
丸善兵 印旛公津
山倉文雄 印旛久住
關川雅司 印旛成田
小倉桂 印旛成田
小川勳 印旛富里
永山敬榮 印旛富里
大島仁 印旛成田
根本五郎 印旛富里
竹村猛壽 印旛成田

第二十一回卒業生(卅八名)(大正十一年三月)

石橋廣吉 香取滑川
榎田章 印旛成田
平山諦 印旛成田
關谷重雄 印旛公津
淺井義一 印旛成田
島村治助 印旛成田
太田家倚 印旛公津
飯高治夫 山武二川
岩澤丈夫 印旛遠山
藤崎昇 印旛和田
埜平統一 印旛中郷
岩澤多門 印旛遠山
小林博 印旛成田
高橋清 印旛成田
相川巳一郎 印旛富里
關川安正 印旛成田
木内正夫 印旛成田
渡邊三郎 印旛成田
桑原啓次郎 印旛安食
伊藤巖 印旛富里

小學校教師
實業
明治大學在學
實業
小學校教師
樺太小學校教師
實業
明治大學在學
業
朝鮮水原道高等農林學校在學
實業
鐵道省在職
僧侶
實業
第二十二回卒業生(卅八名)(大正十二年三月)
第三高等學校在學
小學校教師

根本克巳 印旛八生
本多巳代治 印旛遠山
諸岡一次 印旛成田
加藤曉治 印旛成田
藤崎勘司 印旛遠山
石木晃 實業
丸山正臣 印旛豐住
萩原喜知太郎 印旛八生
湯淺八郎 印旛公津
山田忍 印旛公津
加藤北二郎 印旛八生
伊能春夫 山武二川
吉岡順 印旛中郷
吉田義法 安房田原
竹田正吉 印旛成田
熊切修二 夷隅古澤
檜垣兼三 印旛久住
戶村照學 印旛八生
齋藤操 印旛公津

私立成田中學校一覽

三一

私立成田中學校一覽

三二

慶應義塾大學在學	三門 健一	印旛木下	小學校教師	島 照康	東京山本所
第二高等學校在學	小泉 國衛	印旛成田		青柳 信雄	印旛公津
靜岡高等學校在學	三橋 監物	印旛成田		篠原 幸次郎	印旛成田
千葉師範第二部在學	大澤 麟太郎	印旛八生	小學校教師	平山 祝	香取吉田
	大塚 謹三	印旛成田	東京商科醫專在學	渡邊 泰亮	印旛成田
	石井 俣男	山武 千代田		平山 孝一	香取多古
大倉商業在學	山口 忠	印旛八生	實業	片岡 勇	印旛遠山
	大須賀 誠	印旛安食	日本大小在學	桑名 善雄	香取豐岡郡
千葉師範第二部在學	小川 忠裕	山武 千代田		小川 重雄	印旛中郷
	香取 利雄	印旛久住		石川 明	印旛遠山
	加藤 文一	印旛成田		竹尾 隆	印旛酒々井
	石橋 三郎	印旛安食		石渡 四郎	山武南郷
	多田 清	印旛公津		石山 堯	山武二川
	長澤 博	印旛布織		鈴木 平	印旛公津
	鈴木 三郎	印旛公津		藤崎 浦治	印旛遠山
安田銀行在職	松崎 正重	印旛八生		水野 岩雄	印旛成田
	篠崎 操	印旛遠山		牧野 佐次郎	印旛成田
中央大學在學	平山 正夫	香取多古		遠藤 與惣次	印旛公津
	新村 新助	山武二川		加藤 韓三	印旛八生
	原 公	印旛富里			

第二十三回卒業生(三十三名)(大正十三年三月)

神戸商船學校在學	諏訪原 四郎	印旛八生	日暮 秀明	印旛本郷
	渡邊 進一	印旛成田	小川 貞助	印旛豊住
	山内 康夫	印旛成田	伊藤 清	印旛富里
	土屋 清	山武二川	青柳 晴美	香取滑河
	篠田 光治	香取江津	佐伯 忠夫	長生土陸
	神崎 謙三	印旛遠山	大三川 雄啓	香取多古
	岩内 貢	印旛遠山	湯淺 義雄	印旛公津
	加藤岡 武	印旛成田	黒川 富夫	印旛成田
國學院大學在學	谷上 勝太郎	印旛成田	安達 次郎	
千葉醫科大學藥學部在學	三橋 新	印旛成田		
東京主計學校在學	行方 喜一	山武大郷		
	木内 基治	香取滑河		
	林 貞一	山武日向		
	高橋 忠司	印旛公津		
	佐藤 寛	香取 大須賀		
	武田 未壽雄	印旛八生		
	鳴田 滿	印旛富里		
	藤崎 正義	印旛遠山		
南洋渡航實業	吉川 克己	印旛中郷		
	手島 寛	山武 千代田		

(四年終了者)
第二高等學校在學



私立成田中學校一覽

三三

私立成田中學校一覽

費 經		年 度
大正十三年度決算	大正十二年度決算	俸給
20,800,000	15,370,000	雜給
11,100,000	10,000,000	需用費
6,600,000	5,500,000	雜費
8,800,000	7,200,000	賞與
3,000,000	2,300,000	管轄費
2,300,000	1,800,000	手當金
—	—	豫備金
2,000,000	—	合計
24,500,000	23,000,000	

表別郡徒生及生業卒

(在現月四年三十正大)

卒業生	計	區 別					郡 別
		一學年乙組	一學年甲組	二學年乙組	二學年甲組	三學年	
475	102	26	26	30	22	3	印旛
33	3	2	1	8	3	6	香取
55	2	3	1	0	1	2	山武
3	1	1	0	0	0	0	千葉
4	0	0	0	0	0	0	市原
2	1	0	1	0	0	0	東葛飾
3	3	0	1	1	0	0	匝瑳
1	0	0	0	0	0	0	海上
4	1	0	0	0	0	1	長生
3	0	0	0	0	0	0	夷隅
2	1	0	0	0	0	1	君津
5	3	0	0	0	1	1	安房
5	3	0	0	0	1	0	館府縣
67	22	2	3	3	4	6	計
475	282	26	26	30	22	3	

成田高等女學校一覽

學 曆	三三
沿革略	三五
大正十二年重要記事	三六
學 期	三七
職員表	四〇
生徒表	四一
成田山女學校卒業生人名	四三
卒業生人名及現況	四三
經費統計概表	五四

費	經 度	
	大正十二年度決算	大正十三年度豫算
俸給	一、九三七、〇〇〇	二、六四〇、〇〇〇
雜給	一、四〇八、〇〇〇	一、三〇〇、〇〇〇
需用費	四四八、四八八	六六八、〇〇〇
雜費	七九二、二〇〇	八六五、八五〇
賞與	三三三、〇〇〇	三〇〇、〇〇〇
營繕費	四九三、三三五	七三三、〇〇〇
手當金	—	—
豫備金	—	三〇〇、〇〇〇
合 計	三、六〇〇、三三三	二、七三三、八五〇

表別郡徒生及生業卒

(在現月四年三十正大)

卒業生	計	區 別					計
		一學年乙組	一學年甲組	二學年乙組	二學年甲組	三學年	
四七〇	一〇八	二八	二九	三〇	二五	四三	區別
四三	三三	二	一	八	三	六	印旛
四四	一一	三	一	〇	一	二	香取
三	一	一	〇	〇	〇	〇	山武
四	〇	〇	〇	〇	〇	〇	千葉
三	一	〇	一	〇	〇	〇	市原
三	三	〇	一	一	〇	〇	東葛飾
一	〇	〇	〇	〇	〇	〇	匝瑳
四	一	〇	〇	〇	〇	一	海上
三	〇	〇	〇	〇	〇	〇	長生
二	一	〇	〇	〇	〇	一	夷隅
五	三	〇	〇	〇	一	一	君津
五四	二九	二	三	三	四	五	安房
六三七	二八九	三六	三五	三三	三四	五六	他府縣
							計

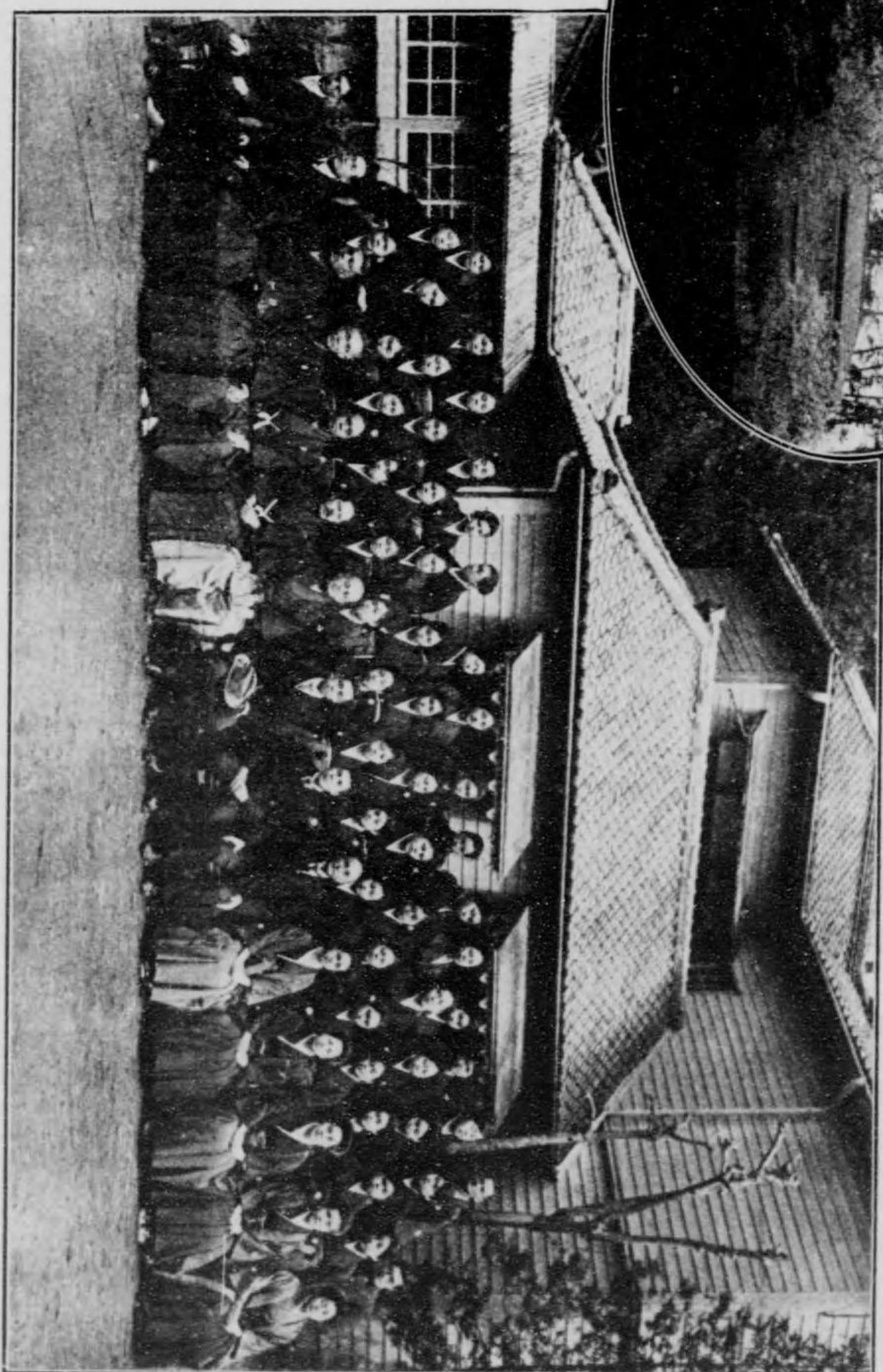
露光量違いの為重複撮影

大正三年

學 曆

<p>第一學期 自四月一日至八月三十一日 第二學期 自九月一日至十二月三十一日 第三學期 自一月一日至三月三十一日 每月 第一月曜日講堂講話 每月 第三月曜日職員會議 每月 第二、四、七、日大掃除</p>	<p>四 月 五日 入學式、始業式 中旬 教授決定記入 下旬 身體検査</p>	<p>五 月 六 日 午前八時十分始業 上 旬 修學旅行四、三、二學年 廿七日 海軍記念日</p>	<p>六 月 上 旬 一學年修學旅行 廿五日 地久節</p>	<p>七 月 十九日 第一學期授業終 廿三日 成績發表、終業式</p>	<p>三十日 明治天皇祭 八 月 三十一日 天長節</p>	<p>九 月 一日 始業式 二 日 午前八時始業 上 旬 教授決定記入 下 旬 保證人會</p>	<p>十 月 中 旬 校友會學部大會 三十一日 天長節祝賀式</p>	<p>十一 月 一 日 午前九時始業 上 旬 校友會運動部大會</p>	<p>十二 月 廿 日 第二學期授業終 廿四日 成績發表、終業式</p>	<p>一 月 一日 新年祝賀式 七日 冬季休業終 八 日 始業式 中 旬 教授決定記入 下 旬 來學年度教科書選定</p>	<p>二 月 十一日 紀元節祝賀式 十三日 創立記念祝賀式 同 日 校友會學部大會 十五日 午前八時始業 本月中 卒業生ノ志望調査</p>	<p>三 月 十日 陸軍記念日 十五日 第三學期終 十九日 成績發表、終業式 廿二日 證書授與式 未 定 入學試驗及入學試驗成績發表</p>
---	--	--	--	---	---	--	--	---	--	--	--	---

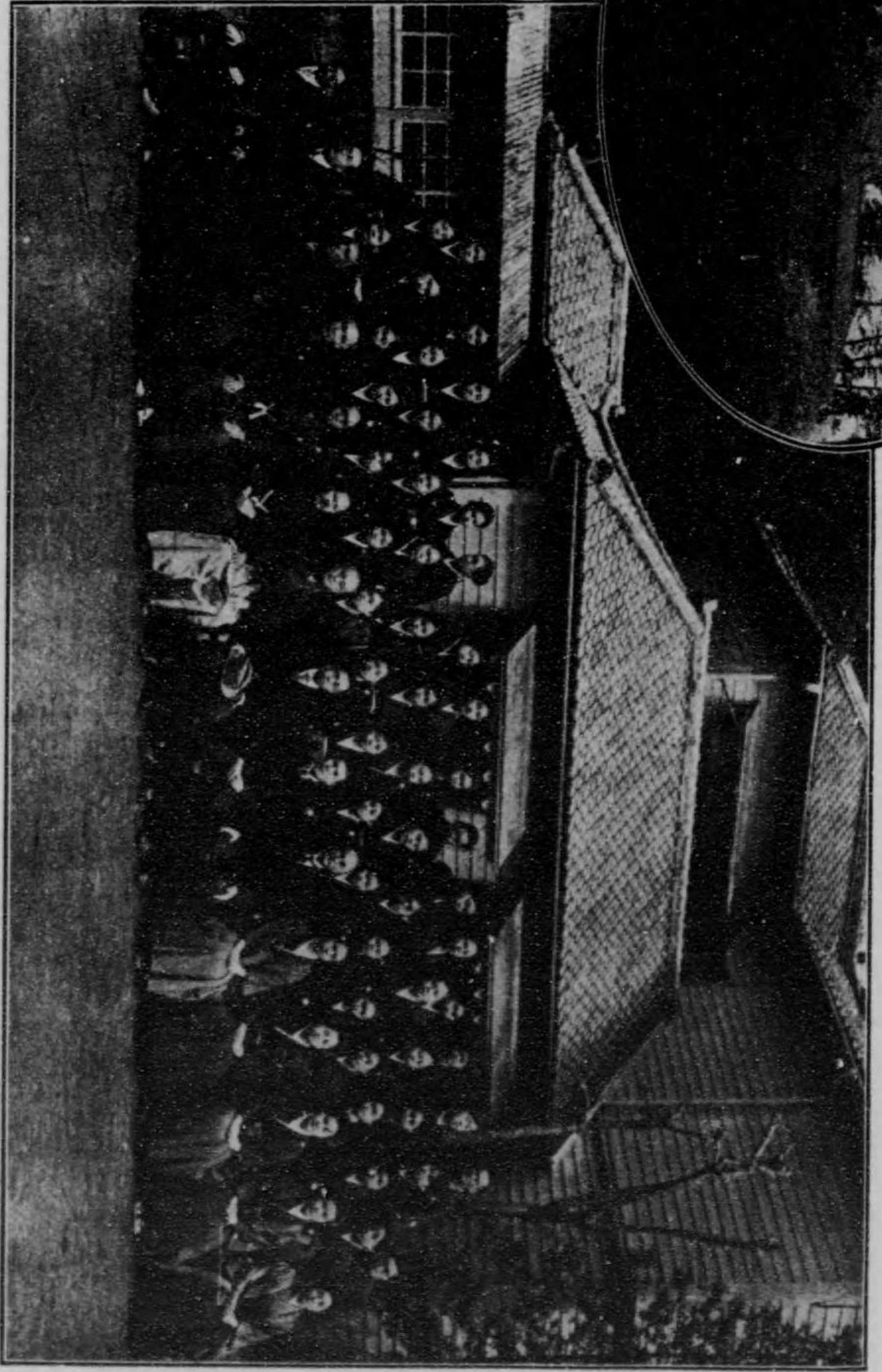
校 學 女 等 高 田 成



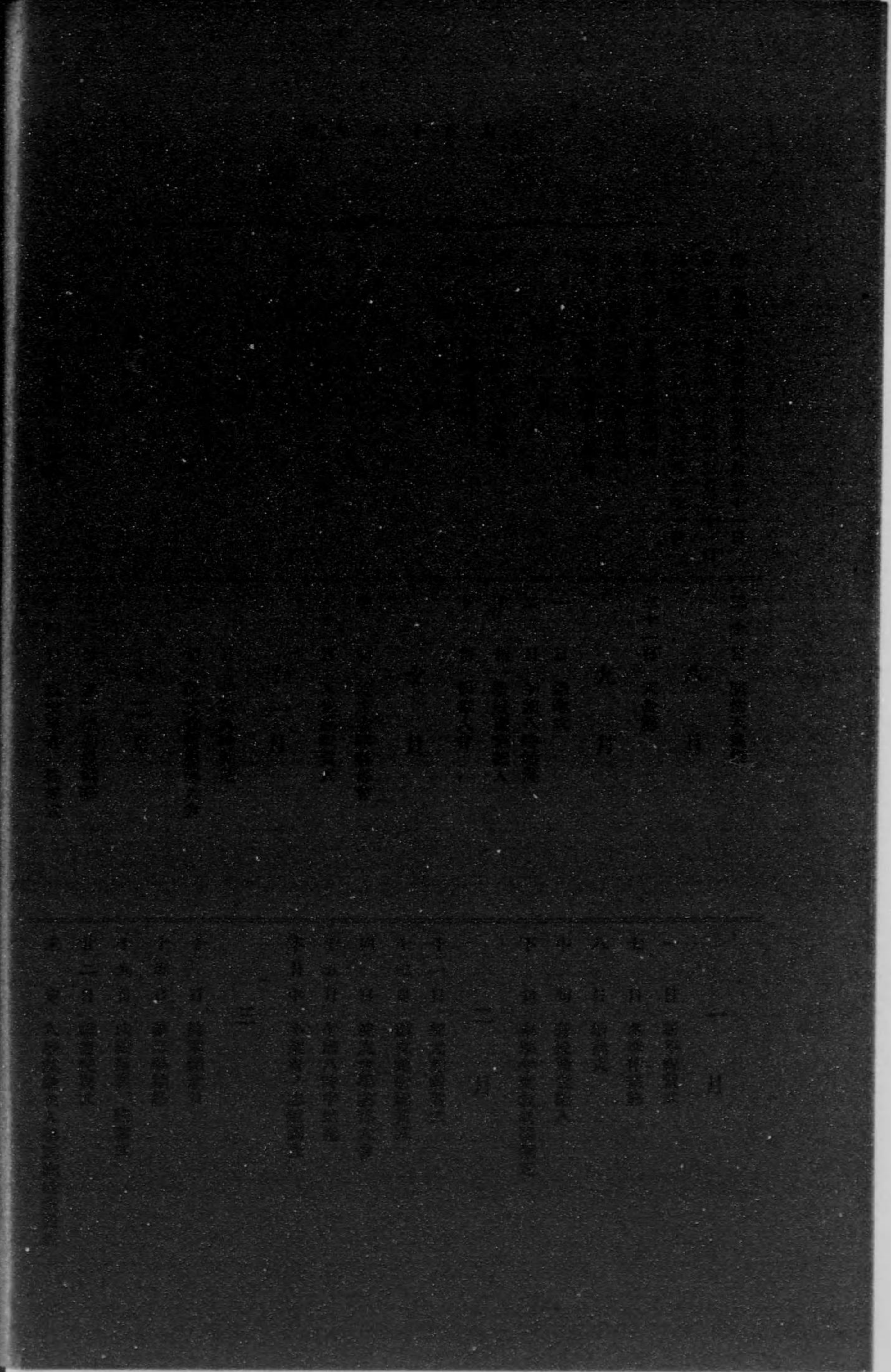
生 業 卒 回 三 十 二 第 及 員 職 教

露光量違いの為重複撮影

校學女等 高田成



生業卒回三十二第及員職教



私立成田高等女學校一覽

◎沿革略

本校は元私立成田山女學校と稱し明治四十一年四月の創立に係り明治四十四年二月文部大臣の認可を得て成田高等女學校と改稱す所謂成田山五事業の一にして校主兼校長たる故成田山貫首石川僧正の慈心の下に生々發達しつゝあるものなり。

本校に理事ありて校主校長を補佐す石川甚兵衛、三橋金太郎、三橋重郎兵衛、小野寺清三郎の四氏は即ち其人にして石川理事現に専務たり。

明治四十四年二月十三日文部大臣より本校設立の認可を受けてより爾後の沿革は大略左の如し。

- 一 明治四十四年三月廿一日本校々則を制定す
- 一同 四月一日成田中學校教諭中島喜一(高等師範學校出身)校務主監教諭に任ぜらる
- 一同 四月一日、二日の兩日を以て二、三、四學年の編入試験を行ふ
- 一同 四月五日生徒八十四名に入學を許可し之を本科第四學年以下の各學年に分編す、同日始業

私立成田高等女學校一覽

式を行ふ

- 一 明治四十五年三月第一回卒業生を出し、千葉縣知事臨席す
- 一 明治四十四年十二月増築に着手せし雨中體操場、理科教室及普通教室等工を竣へ大正元年十一月より使用したり
- 一 大正二年三月第二回卒業生出づ
- 一 大正二年九月校務主監兼教諭中島喜一休職を命ぜらる
- 一同 十月理學士菅野皆可校務主監兼教諭に任ぜらる
- 一 大正三年三月第三回卒業生を出す
- 一 大正四年三月第四回卒業生を出せり
- 一 大正五年三月第五回卒業生を出す
- 一 大正六年三月第六回卒業生を出せり
- 一同 十一月校務主監兼教諭菅野皆可休職を命ぜらる
- 一同 十一月文學士中村安之助校務主監兼教諭に任ぜらる
- 一 大正七年第七回卒業生を出せり

三五

- 一大正八年三月第八回卒業生を出せり
 - 一大正八年十月中村校務主監死去
 - 一大正八年十二月文學士矢野太郎校務主監に任せらる
 - 一大正九年三月第九回卒業生を出し
 - 一大正十年三月第十回卒業生を出せり
 - 一大正十一年三月第十一回卒業生を出す
 - 一大正十二年三月第十二回卒業生を出す
 - 一大正十二年十二月校務主監兼教諭矢野太郎依頼解職を命ぜらる
 - 一大正十三年一月校主兼校長石川大僧正御遷化
 - 一大正十三年二月成田山貫主荒木僧正校主の認可を受く
 - 一大正十三年三月第十三回卒業生を出す
- ◎大正十二年重要記事
- 四月二日 入學式舉行
 - 四月十八日 千葉中學校に於て聯合運動會打合會に矢野主監村崎教諭心得出張す
 - 五月七日 四學年關西方面に修學旅行

- 五月八日 和田教諭の新任披露
- 五月十日 三年以下稻毛遠足
- 六月二日 音樂打合會の爲め佐倉高等女學校に村崎教諭心得出張
- 六月廿二日 國漢文打合會の爲め東金高等女學校に青木教諭出張
- 七月廿日 第一學期終業式
- 七月廿一日 當日より職員生徒交代に成田驛に出張して罹災者救護班に入る
- 九月十一日 職員一同生徒總代にて校長猥下の病氣及震災見舞としてお寺に行く
- 九月十九日 安房郡へ衣類百三十五點を贈る
- 十月五日 杉田教諭の告別式を行ふ
- 十一月十五日 和田教諭依頼解職
- 十二月十八日 第二學期終業式、矢野主監、相田教諭、吉岡教師依頼解職に依り告別式を行ふ
- 十二月廿四日 新年祝賀式、藪教諭の新任披露式
- 一月一日 上野按摩術教師就任
- 一月廿三日 笹川先生の新任披露式
- 一月三十日 校長猥下御遷化に付き哀悼の意を表し職員及生徒總代お寺に行く
- 二月六日 校長猥下の假葬儀により職員生徒會葬す
- 二月十日

- 三月十三日 創立記念式及父兄母姉大會開催す
- 三月廿二日 第十三回卒業式舉行
- 三月廿五日 入學試験施行、翌廿六日成績を發表す

◎學 則

第一章 總 則

- 第一條 本校ノ修業年限ハ本科四箇年トス
- 第二條 生徒定員ハ二百人トス
- 第三條 休業日ハ左ノ如シ
 - 一、祝日、大祭日
 - 二、日曜日
 - 三、皇后陛下御誕辰
 - 四、記念日、二月十三日
 - 五、夏季休業七月廿五日ヨリ八月卅一日ニ至ル
 - 六、冬季休業十二月廿六日ヨリ翌年一月七日ニ至ル

- 第二章 學科課程及教授時數
- 第四條 本校ノ學科目ニ編物袋物插花按摩ヲ加ヘ隨意科目トス
- 第五條 學科課程及ビ教授時數ハ左ノ如シ

私立成田高等女學校一覽

科目	年			
	第一學年	第二學年	第三學年	第四學年
修身	二人倫道德ノ要旨、作法	二同	一上	二法制大意
國語	六講讀、習字、作文、文法	六同	五同	五講讀、作文、漢文
英語	三讀方、譯解、書取、習字	三同	三取方、譯解、書取、習字	三同
歴史	三本邦地理史	三外國地理上	三外國歴史上	三地理通論上
地理	三本邦地理史	三外國地理上	三外國歴史上	三地理通論上
算學	三算術、代數、幾何	三算術、代數、幾何	三算術、代數、幾何	三算術、代數、幾何
理科	二植物、動物	二植物、動物	三化學、物理	三植物
圖畫	一自在畫	一同上幾何畫	一同	一同
家事			三衣食住	三家政、看護、育児等
裁縫	五縫方、裁方	五同上、繕方	四同	四同
音樂	二單音唱歌	二同	一複音唱歌上	一(一)同
體操	三普通體操	三同	三同	三同
教育				一理論ノ大意
計				
編物	(一)編	(一)同	(一)袋	三
插花	(一)挿	(一)同	(一)同上	(一)同
按摩			(一)按摩	(一)同上

第三章 入學及退學

- 第六條 生徒募集ハ學校長期日學年及人員ヲ定メ之ヲ公告スベシ但時宜ニ依リ臨時入學ヲ許ルスコトアルベシ
- 第七條 入學志願者ハ本校所定ノ入學願書ヲ差出スベシ
- 第八條 第一學年入學志願者ニ就キテハ試驗ニヨリテ其力ヲ檢定ス
- 第九條 前條ノ試驗ハ修身國語算術日本地理日本歴史理科裁縫ニ就キ尋常小學校卒業程度ニ依リ之ヲ行フ
- 第十條 第二學年以上ニ入學ヲ許スベキ者ハ相當年齡ニ達シ學力試驗ニ合格シタルモノタルベシ
- 第十一條 入學ヲ許可セラレタル者ハ在學證書ニ戶籍謄本ヲ添ヘテ差出スベシ
- 第十二條 保證人ハ親權者若クハ後見人又ハ親族ニシテ一家計ヲ立テ本人ニ關シ一切ノ責ヲ負フニ足ルベキモノタルベシ
- 第十三條 保證人ノ住所學校所在地ヨリ一里以内ニ在ラザルトキハ一里以内ニ在所ヲ有シ一家計ヲ立ツルモノヲ以テ代理保證人ト定メ保證人連署ノ上之ヲ學

- 校長ニ届出ヅベシ
- 第十四條 學校長ハ必要ト認ムルトキハ保證人又ハ代理保證人ヲ換ヘシムルコトアルベシ
- 第十五條 保證人若シクハ代理保證人住所氏名ヲ變更シ又ハ改印シタル時ハ直ニ學校長ニ届出ヅベシ
- 第十六條 生徒退學セントスルトキハ其理由ヲ記シ保證人連署ノ上學校長ニ願出ヅベシ
- 第十七條 生徒病氣其ノ他止ムヲ得ザル事由ニ由リ三ヶ月以上出席シ難キトキハ期間ヲ定メ休學ヲ願出ヅルコトヲ得但シ期間ハ一ケ年ヲ超ユルコトヲ得ズ
- 第四章 修了及卒業
- 第十八條 各學科ノ課程ノ修了又ハ卒業ヲ認ムルニハ平素ノ成績ヲ考查シテ之ヲ定メ又ハ平素ノ學業及試驗ノ成績ヲ考查シテ之ヲ定ムベシ
- 第十九條 卒業證書及修業證書ハ第四號及第五號書式ニ依ル
- 第五章 授業料及入學料
- 第二十條 授業料ハ月額金二圓トシ毎月十日迄ニ之ヲ納メ特ニ其期日ヲ指定シタルトキハ其當日之ヲ納ムベシ但毎年八月ハ之ヲ徵收セズ

第廿一條 入學料ハ金一圓トシ入學許可ノ際之ヲ徵收ス

第六章 賞 罰

- 第廿二條 品行方正學術優秀ナル者ハ特待生トシテ授業料ノ全部又ハ一部ヲ免除シ若クハ賞品褒狀ヲ與フ
- 第廿三條 學校長ハ左ノ各項ニ該當スル者ニハ退學ヲ命ズ
 - 一 性行不良ニシテ改善ノ見込ナシト認メタル者
 - 二 成業ノ見込ナシト認メタル者
 - 三 出席常ナラザル者
- 第廿四條 規則命令ニ違背シ學校ノ風紀ヲ害スル者ハ其ノ輕重ニ依リ戒飭停學又ハ退學ニ處ス
- 第七章 寄宿舎及生徒取締
- 第廿五條 生徒ハ自宅ヨリ通學スル者及ビ學校長ノ許可ヲ受ケタル者ノ外總テ學校ノ指定スル場所ニ寄宿セシム
- 第廿六條 寄宿ハ自治自炊制トシ舍生ヲシテ輪番ニ之ヲ處理セシム
- 第廿七條 生徒取締ニ關スル規程ハ學校長之ヲ定ム
- 第八章 附 則

第廿八條 本校則施行ニ關スル細則及ビ其ノ他必要ナル内規ハ學校長之ヲ定ム

三錢ノ收入印 紙貼用	在學證書 (用紙美濃紙)
私儀御校へ入學御許可相成候ニ付テハ在學中御規則命令堅ク遵奉可致候也	本人 氏 名印
前書ノ通り相違無之ニ付拙者保證人ニ相立テ御規則命令堅ク相守ラセ本人ニ關スル事件ヲ一切引受可申候也	生年月日
本 籍 何府縣何郡市何町村大字何何番地	現住所 何府縣何郡市何町村大字何何番地
華族、士族、平民職業	右親權者(後見人又ハ親族)
年 月 日	保證人 氏 名印
千葉縣私立成田高等女學校長氏名殿	

私立成田高等女學校一覽

女子美術學校卒業
中村 はる 印旛成田
中島 清子 長野 西守尾
上野 なを 東京麻布
大久保 しげ 印旛本塾
大川 さい 印旛成田
加藤 みつ 印旛豊住
山田 満 印旛安食
山内 泰子 印旛成田
山内 泰子 印旛成田
藤崎 三子 千葉更科
福井 とら 印旛成田
浅井 いし 印旛成田
坂本 まし 茨城文間
湯浅 達 印旛八生
島田 惠 印旛酒々井
日暮 てい 印旛中郷
清宮 いづ 印旛八生
本橋 こづ 印旛本塾
關川 郁 印旛成田

女子醫學專門學校在學
岩館 やす 印旛成田
石井 やす 印旛酒々井
石井 タケ 印旛遠山
伊藤 喜代 印旛富里
伊藤 てる 印旛成田
飯田 敏子 茨城八原
池田 よし 印旛富里
土井 とみ 印旛公津
土井 とみ 印旛公津
大木 とと 印旛成田
小川 さよ 印旛公津
小川 かよ 印旛公津
小川 静 印旛八生
香取 操 印旛船穂
川上 さく 印旛白井
谷川 なな 印旛酒々井
竹村 きみ 印旛富里
根本 テル 印旛豊住
仲山 ル 印旛公津
字井 幾久 印旛成田

第九回卒業生 (大正九年三月) (三一)

小學校教員

山田 喜代 印旛八生
山本 おう 山武日向
山内 貞子 印旛成田
山本 しげ 印旛和田
福田 光子 印旛酒々井
伊藤 せい 印旛白井
寺内 三枝 印旛成田
坂田 コウ 印旛富里
宮島 頼子 印旛大森
三須 知衣 印旛川上
杉田 はな 印旛安喰

第十回卒業生 (大正十年三月) (二六)

小學校教員
石川 婦久 印旛成田
伊東 とも 山武上塚
湯浅 君代 印旛八生
尾崎 サト 山武松尾
小川 てい 印旛公津
小野寺 千代子 印旛成田
海瀨 よゑ 安房稻都
遠藤 あい 印旛遠山

女子醫學專門學校在學
吉岡 珙子 印旛木下
檜垣 たつめ 印旛公津
中山 加津子 印旛成田
中越 津子 印旛成田
葛生 布知 印旛安食
山崎 勢い 印旛八生
藤崎 哲子 香取高岡
中山 さだ 印旛成田
松田 みち 印旛公津
丸田 ち 印旛公津
古田 千代 印旛酒々井
兒島 愛 印旛金江津
後藤 たま 印旛安喰
篠田 ゆつ 印旛遠山
遠藤 ゆら 印旛公津
須藤 静子 印旛六合
鈴木 好枝 茨城布川
鈴木 いく 印旛六合

第十一回卒業生 (大正十一年三月) (三八)

小學校教員
石橋 喜代 印旛成田

私立成田高等女學校一覽

私立成田高等女學校一覽

飯倉	秦野	堀内	堀千	大木	加藤	神崎	川村	川島	田中	高橋	高川	谷村	竹村	増淵	小倉	黒田	山本	山田	矢野	
とひさ	とく	三鶴	代鶴	かつ	くす	やす	長子	まつ	はな	こ	興	す	嘉	才	松	に	か	い	敬	
印旛成田	印旛公津	高知津呂	磨下 大久保	印旛八生	印旛八生	印旛遠山	印旛成田	印旛 酒々井	茨城龍崎	印旛大森	安藤 北三原	印旛公津	印旛富里	印旛安喰	印旛成田	印旛成田	印旛安喰	印旛八生	愛媛久米	
東京裁縫女學校在學	女子藥學專門學校在學	千葉女子師範二部卒業																		
藤崎	藤崎	藤崎	藤崎	小坂	寺本	齋藤	齋藤	佐藤	湯淺	宮崎	篠原	日暮	泉對	菅壽	鈴木	鈴木	伊藤	岩井		
シ	た	ふ	と	さ	さ	て	よ	は	は	秀	芳	ト	ヒ	壽	と	き	き	き		
印旛遠山	印旛遠山	印旛遠山	印旛 酒々井	印旛八生	市原八幡	印旛遠山	印旛八生	印旛八生	印旛八生	長生八幡	印旛木下	印旛中郷	千葉豐富	匝瑳梅海	印旛成田	秋田本莊	印旛中郷	印旛大森		

第十二回卒業生 (大正十二年三月) (三九)

東京共立女子職業學校在學

日本女子大學在學

小學校教員
和洋裁縫速成科在學

井浦	石橋	飯沼	石原	林八	原え	細川	土井	土井	土井	土井	岡田	大澤	大木	小野	小倉	太田	勝田
多美	な	つ	と	千	代	喜	喜	喜	喜	喜	は	し	美	シ	茂	鹿	俊
香取 小川	印旛成田	印旛 酒々井	印旛富里	印旛八生	印旛佐倉	印旛遠山	印旛公津	印旛公津	印旛公津	印旛公津	印旛本埜	印旛八街	印旛成田	印旛成田	印旛成田	印旛公津	印旛八生
小學校教員	小學校教員	小學校教員	小學校教員	小學校教員	小學校教員	千葉師範二部在學	小學校教員	小學校教員	小學校教員	小學校教員	小學校教員	小學校教員	小學校教員	小學校教員	小學校教員	小學校教員	小學校教員
海保	吉橋	椿	並木	鶴澤	山本	山本	増田	京増	藤崎	後藤	小池	安達	相京	秋山	櫻井	島田	
けい	き	た	菊	喜	く	く	温	え	ま	瑞	よ	靖	い	ツ	け	輝	
香取 金江	印旛旭	香取 滑川	印旛遠山	山武 蓮沼	印旛八生	印旛和田	印旛成田	印旛 酒々井	印旛安喰	印旛八生	印旛遠山	印旛遠山	印旛 酒々井	印旛 酒々井	香取 小川	印旛 酒々井	

私立成田高等女學校一覽

私立成田高等女學校一覽

京都同志社在學

平野 江榮 印旛八生
 平山 まさ 印旛成田
 平山 さつ 印旛成田

第十三回卒業生 (大正十三年三月) (四七)

東京女子師範學校二部在學
 小學校教員

石川 多 け 印旛成田
 岩田 聖 美 印旛布織
 石原 節 印旛安喚
 豊田 登 代 印旛成田
 士井 て い 印旛公津
 及川 ナ カ 匣瑳 榮
 岡田 け い 印旛本桂
 大木 ま つ 印旛中郷
 大久保 ち か 印旛本桂
 小川 貞 女 印旛八生
 小川 ふ じ 印旛八生
 綿貫 綾 子 印旛酒々井
 片岡 と 勉 印旛成田

東京女子齒科專門學校在學
 千葉女子師範學校二部在學

吉岡 誠 印旛中郷
 玉村 ハナ 茨城布川
 高槻 洋子 福島木幡
 高橋 しのぶ 香取滑河
 瀧澤 喜代 印旛成田
 中島 さき 印旛安喚
 仲山 勢 い 印旛公津
 野口 と き 印旛豊住
 山田 か つ 印旛成田
 山内 總 江 印旛成田
 山口 ひ で 印旛八生
 松田 ふ く 印旛成田
 増田 と き 香取 加藤
 藤原 せ つ 香取 小野門
 船橋 ツネ 印旛成田
 紺谷 満 枝 印旛成田
 小泉 繁子 印旛成田

日本女子大學校家政科在學

和洋裁縫學校在學

秋山 みつ 印旛八生
 青野 む つ 香取高岡
 相京 タケ 印旛公津
 齋藤 あ い 印旛遠山
 齋藤 きよ 印旛酒々井
 佐伯 と み 長生土陸
 湯淺 ゆ う 印旛八生
 湯淺 つね 印旛八生
 三橋 孝子 印旛成田
 宮川 幾子 印旛酒々井
 宮内 はる 印旛八生
 島田 清 印旛酒々井
 平山 と し 香取多古
 關川 昭 印旛成田
 鈴木 ト シ 印旛公津
 鈴木 つる 茨城布川
 菅谷 と し 茨城白鳥

東京女子大學校在學
 和洋裁縫學校在學



私立成田高等女學校一覽

成田幼稚園一覽

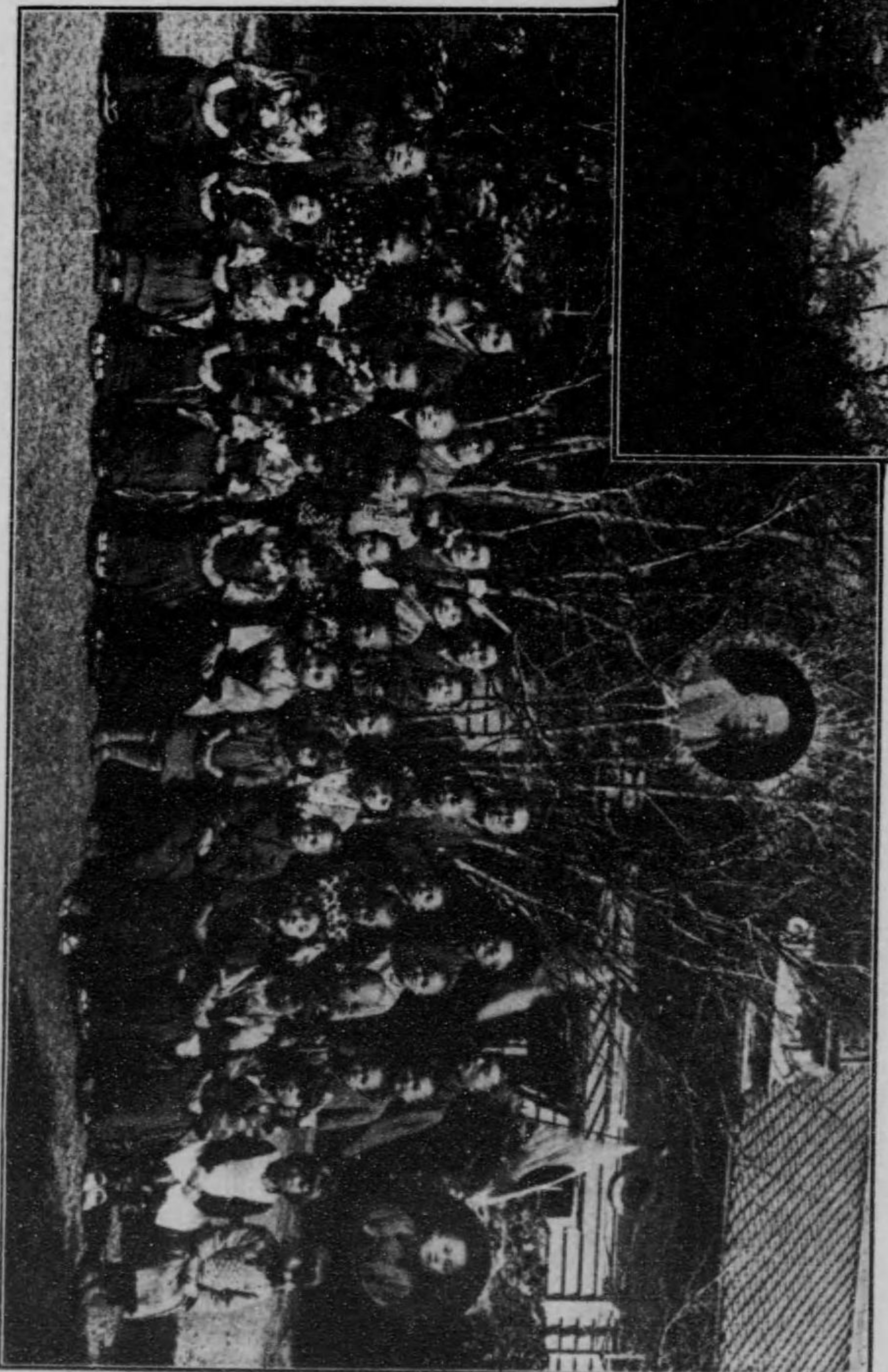
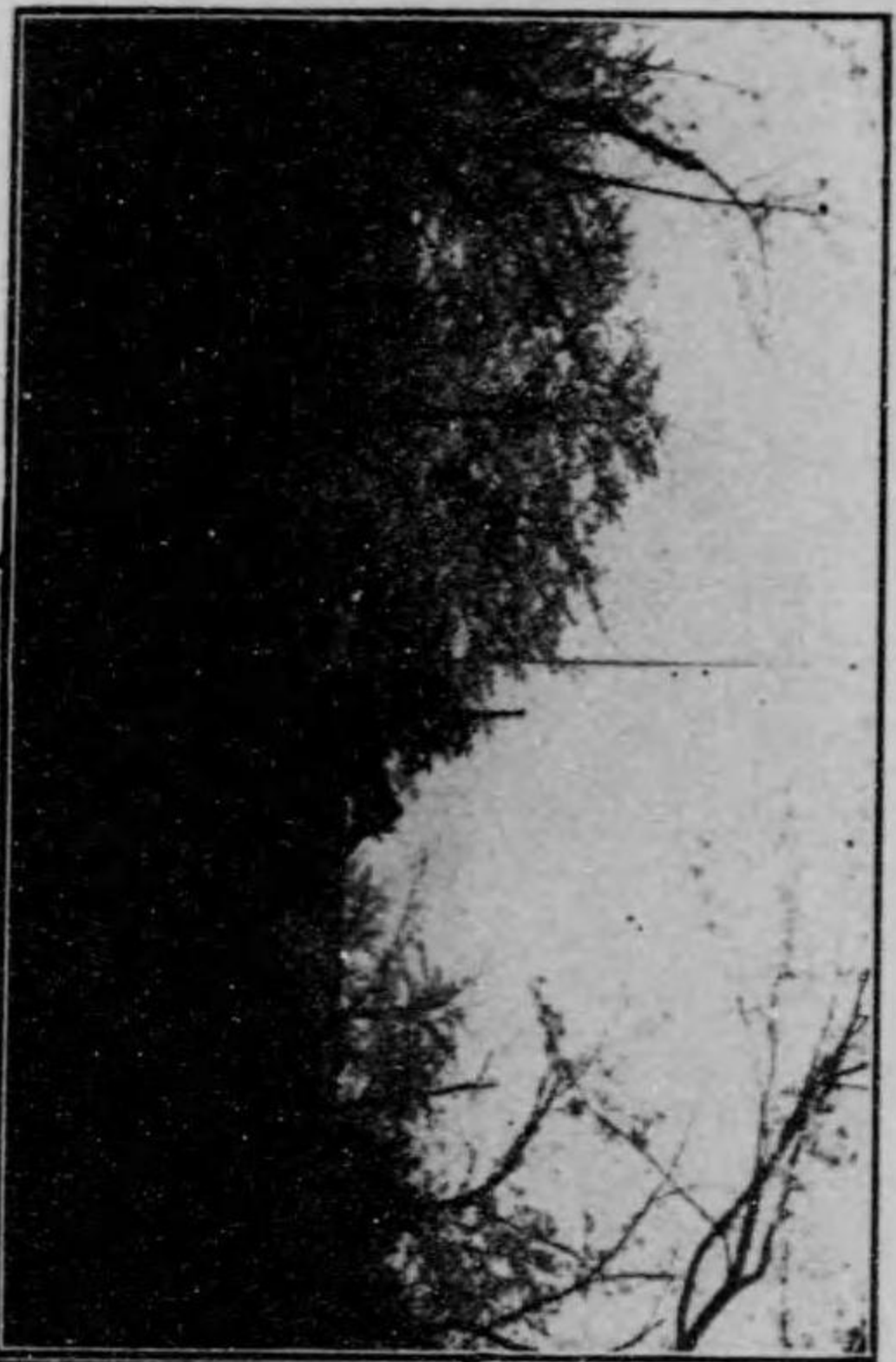
園歌	五五
沿革略	五六
職員、經費	五七
入園園及年度末現員數	五八
保育修了幼兒數	六四
規則	六六
保護者心得	六六

◎經費統計概表

年 度	俸 給	備 給	手 當	賞 與	旅 費	需用費	營繕費	雜 費	準備費	合 計
四十四年度決算	二八三、八四〇	一〇八、〇〇〇	七、〇〇〇	二二、三六〇	四、六〇〇	六三、八二〇	二八、六八一	二七、一六〇		四四七、七九一
四十五年度決算	二八五、三三〇	一〇八、〇〇〇	六、〇〇〇	二九、六〇〇	一〇〇、八〇〇	八八、〇〇〇	八〇、八二二	二八、八八五		四八九、五七六
大正二年度決算	四三〇、一七〇	一〇八、〇〇〇	三六、〇〇〇	五八、二九〇	六八、三〇〇	九四、七七五	九一、四三五	四三、五二〇		七九五、五二〇
大正三年度決算	四三三、二〇〇	一〇四、一〇〇	三六、〇〇〇	三五、四〇〇	九三、〇〇〇	九三、七二五	五〇、八六五	四五〇、五二〇		六七〇、一八〇
大正四年度決算	四三〇、〇〇〇	一三三、〇〇〇	三六、〇〇〇	三七、〇六〇	一一〇、一五〇	一一〇、六六五	四五三、八二二	七四五、〇五四		七六二、六九二
大正五年度決算	四七八、九〇〇	一三三、〇〇〇	三六、〇〇〇	二七、四九〇	一四七、一一〇	八三、八三七	二四、五〇〇	三七、五〇〇		六三三、三三七
大正六年度決算	四五四、六八〇	一四六、〇七〇	三六、〇〇〇	九七、三九〇	二三〇、八九〇	七四、〇二〇	一六、七二〇	三五七、七〇六		七四八、〇〇六
大正七年度決算	五二八、七五〇	一六六、〇〇〇	三六、〇〇〇	五六、六九〇	九七、四三〇	六八、一五五	三四、一七〇	五二、九四八		七三三、一四三
大正八年度決算	八五三、六七〇	三〇三、〇〇〇	三六、〇〇〇	四〇〇、二〇〇	三三〇、四九〇	一七六、四六〇	五七三、二〇六	〇八九、五四〇		一、五三三、五六六
大正九年度決算	一〇七、一六七〇	四〇八、〇〇〇	三六、〇〇〇	二七、五六〇	二九八、五五〇	一七六、〇四〇	五五、七七五	一四六、九六〇		一、五二八、六一九
大正十年度決算	九六五、四四〇	四三〇、〇〇〇	三六、〇〇〇	三三、四四五〇	二四一、三六〇	一六三、四三九	五九、四六七	一三四、五一〇		一、五〇八、三六六
大正十一年度決算	九六九、四一〇	四三六、〇〇〇	六〇、〇〇〇	一八、三、一〇〇	四九、一七〇	一八三、七五〇	八七、九九五	一八七、五六三		一、六七一、一六〇
大正十二年度決算	九〇六、〇〇〇	四三六、〇〇〇	六〇、〇〇〇	二〇八、六六〇	一三七、〇〇〇	三三七、七六三	六八九、一八五	二〇九、七七五		一、五八六、三六三



成田山幼稚園圖



職員及第十九回保育者了

園歌

大和田 建樹氏作歌

小山 作之助氏作曲

御寺の山をあげ暮に

見わたす成田の幼稚園

園に生ひたつ撫子の

花にめくみの露しけし

我等も日々に集りて

雲雀となりて謠はまし

そのゝ恵の嬉しさを

御代の恵のたのしさを

ミテラノ ヤ マヲ アケクレ ニ
われらも ひ びに あつまり て

ミワタス ナリタノ ヨーチエ ン
ひばりと なーりて うたはま し

ソ ノニ オヒタツ ナデシコ ノ
そ のの めぐみの うれしさを

ハ ナニ メグミノ ツユシゲ シ
み よの めぐみの たのしさを

私立成田幼稚園一覽

◎沿革略

本園は明治三十八年五月の創立にして保育を開始せしは其月の二十四日也而して開園式は六月一日町立成田尋常小學校内假園舎に於て舉行せり

假園舎の狹隘なるにも拘はらず幼児入園の申込は月毎に増加し行くの趨勢なるが故に園舎新築の必要を生じ同年の十月地を成田山の東南、向臺と稱する一區域を卜し此所に工事に着手すると爲り而して翌三十九年六月三日園舎新築落成の式典を擧ぐるとを得たり

新築に關する工事費並に諸般の設備費は概算約一萬餘圓内二千圓は成田區よりの寄附にかゝり餘は悉く新勝寺に於て負擔支辨せり

園内の位置は成田町成田小字向臺と稱する所にして町の東南方に位し四方の眺望極めて佳く四季の風光亦大に推稱するに足る高燥なる地域也

園の總敷地は三千七十五坪内遊園に屬するもの約二

千六百坪花壇、砂場、築山、藤棚等を設け自餘は所々に樹木を植えて大に趣を添へたり而して園舎の總建坪は二百四十餘坪其内譯左の如し

一昇降口	一	十二坪
一保育室	四	四十九坪五合
一園長室	一	三坪
一恩物室兼保母室	一	八坪
一遊戯室	一	四十八坪
一應接室	一	四坪
一靜養室	一	四坪
一廊下、便所	一	六十四坪五合
一保母住宅	二	三十四坪
一小使室等附屬建物		十七坪二合五勺

大略右の如くにして其構造上特色とも見るべきものなきも只主として幼児の出入の便を計るが爲めに廣き昇降口を園舎の正面に置きて有觸たる玄關構を設けず南面にして空氣の流通光線の射入等に意を注ぎ専ら保

育上の便宜を旨とし又華美に渉るを避けて質實を旨としたり、而して全般に亘る工事の設計は斯道に名ある服部文部省技手之に當られたり。

かくて園舎の新築落成と同時に幼児保育の効果を完うせんが爲に家庭との連絡を計り屢次保育懇話會を開きて園児の保護者を招集し或は不定期刊行の雑誌『撫子』を發刊して其連絡の機關とし聊か得る所ありき

保育の事は保母専ら其の任に當り保育主任之を指導監督す其他全般の庶務等に至りては園長之を總攬し理事之が諮問の任に當る而して園長は園主之を兼ね理事は園主之を囑託す外に幹事、會計主任、園醫あり共に園主の任命する所たり。

園主兼園長は成田山貫首荒木僧正にして理事は石川甚兵衛、三橋重郎兵衛、關川博道の三人也内三橋理事は幹事を關川理事は園醫を兼ね別に淺井儀助會計主任たり。右の外現在職員は保育主任以下保母四名たり左の如し

職名	族籍	姓名	就職年月
保育主任	德島縣士族	山口政子	大正三年十月

職名	族籍	姓名	就職年月
保母	神奈川縣平民	若命きみ	大正十年三月
保母	千葉縣平民	瀧澤よし	大正七年十一月
保母	千葉縣平民	山内とわ	大正九年三月
保母	千葉縣平民	海瀬よしゑ	大正十年五月

本園の新築費及經費は左の如くにして保育料以外は凡て新勝寺の負擔支出する所のもの也。而して保育料として保護者より徴收する料金は一人一ヶ月五十錢とし二人以上を通園せしむるものは一人毎に半減とす。

敷地買入及新築費、落成式費

- 一金參千五百八圓八十五錢 (自三十八年六月經費至四十年三月經費)
- 一金壹千八百八圓十七錢 (四十年經費)
- 一金壹千九百四十圓四十錢 (四十一年經費)
- 一金壹千五百二十七圓三錢 (四十二年經費)
- 一金壹千七百二十五圓四十二錢 (四十三年經費)
- 一金壹千九百三十五圓七十錢 (四十四年經費)
- 一金壹千九百二圓九十五錢 (大正元年經費)
- 一金貳千一百四十圓十五錢 (大正二年經費)
- 一金貳千三百四十一圓十五錢 (大正三年經費)

- 一金參千壹百四十六圓五十壹錢 (大正四年度經費)
 - 一金壹千九百九十一圓三十五錢 (大正五年度經費)
 - 一金壹千九百五十四圓七十九錢 (大正六年度經費)
 - 一金貳千四百五十九圓七十參錢 (大正七年度經費)
 - 一金參千四百九十五圓九十七錢 (大正八年度經費)
 - 一金參千六百九十五圓二十六錢 (大正九年度經費)
 - 一金四千九百四十九圓九十錢 (大正十年度經費)
 - 一金六千六十九圓九十八錢 (大正十一年度經費)
 - 一金五千壹百五十一圓八十錢 (大正十二年度經費)
- 合計六萬二千二百十六圓九十七錢
最近三箇年經費平均額
金五千三百九十圓五十六錢

◎入退園及年末現員調

年	度		入園	卒業	退園	死亡	現年度末現員
	女	男					
明治三十八年度	女	男	四二	一三	四	〇	二五
	女	男	三九	九	六	一	二三
明治三十九年度	女	男	三〇	二三	七	一	二二
	女	男	二三	一五	九	〇	二四

年	度		入園	卒業	退園	死亡	現年度末現員
	女	男					
明治四十年	女	男	二六	二二	一〇	〇	一八
	女	男	二六	二六	四	〇	二四
明治四十一年	女	男	二四	一五	七	〇	二六
	女	男	三一	二〇	一一	一	二五
明治四十二年	女	男	三一	一九	五	〇	三三
	女	男	二九	一七	七	〇	三〇
明治四十三年	女	男	二二	二〇	九	〇	二六
	女	男	四九	二三	一七	〇	三九
明治四十四年	女	男	四一	二二	一〇	〇	四〇
	女	男	二五	一九	四	〇	四三
大正元年	女	男	二五	一九	二	〇	四二
	女	男	二〇	二九	九	〇	二五
大正二年	女	男	二〇	二六	六	二	三八
	女	男	三〇	二六	六	〇	二五
大正三年	女	男	二〇	一三	六	三	二三
	女	男	二六	一六	九	〇	三六
大正四年	女	男	二六	一八	九	〇	三一
	女	男	三二	九	九	〇	三八
大正五年	女	男	二五	一五	一二	〇	三〇
	女	男	二四	二〇	九	〇	三二

私立成田幼稚園一覽

一ヶ年	櫻井 泰治	一ヶ年	宇井 幾久子	一ヶ年	加藤 孝太郎
同	香取 とみ	同	宇井 博	同	久保田 や
同	紺屋 きぬ	同	茂手木 たま	同	七ヶ月 椿 ゆき

明治四十三年度三十七人 男一七 女二〇

四ヶ年	浅井 義一	三ヶ年	松田 さだ	一年七月	柳本 美恵
同	石川 ふく	同	三橋 雅子	同	野々部 甲
同	中越 加津子	二年七月	若葉 さよ	一年七月	志村 かづら
同	關川 安正	二ヶ年	京須 善太郎	一ヶ年	山崎 平治郎
同	大矢 光子	同	小林 博	同	木内 正夫
同	小野寺 千枝子	同	増淵 才	同	藤崎 貢太郎
同	河合 ヨシ	同	竹村 猛	同	京須 きん
同	平山 謙	同	鈴木 はな	同	出山 いと
同	木村 五郎	同	葛生 きち	同	内田 裕
同	大島 仁	一年十二月	赤尾 とし	同	渡邊 三郎
同	中山 方	一年七月	鶴岡 なか	同	渡邊 實
同	紺谷 勝雄	同	粕川 せい	同	

明治四十四年度四十人 男二三 女一七

四ヶ年	加藤 文一	三ヶ年	鈴木 とし	三ヶ年	大塚 謹三
同	竹井 まさ	同	長谷川 浩一	同	三橋 藍
同	紺谷 満枝	一ヶ年	水野 岩雄	同	黒川 廣

大正二年度五十五人 男二九 女二六

三年三月	小泉 繁子	三ヶ年	諸岡 ます	二ヶ年	石井 さと
同	石川 たけ	同	高安 愛之助	同	高橋 恒三
同	石川 仁一郎	同	瀧澤 喜代	同	木内 淡
同	關川 昭	同	鈴木 喜美子	同	豊田 登代
同	夏海 新	同	諸岡 薫	同	智淵 衛
同	關川 安世	同	高須 賀富美	同	久保田 潔
同	吉田 美津乃	同	山崎 勳	同	鶴田 明
同	佐久間 みつ	同	小倉 美枝	同	長竹 定子
同	武士田 謙	同	山田 照子	同	椿 せい
同	宮田 たい	二年七月	藤崎 茨	同	神戶 貞剛
同	浅井 隆	同	高石 藤作	同	諏訪 貞夫
同	浅井 鋭次	二年七月	大友 廣高	同	豊田 喜美
同	渡邊 道治	同	京須 やす	同	福田 茂重
同	長谷川 清	二年七月	大野 豊吉	一年七月	松本 はな
同	山田 文太郎	同	石橋 重雄	同	高安 美哉子
同	高川 俊夫	同	山内 總江	同	寺内 一し
同	諸岡 貞子	二年七月	關川 中	同	酒井 一太郎
同	藤倉 しげ	同	關川 正司	同	棟原 ティ

私立成田幼稚園一覽

六〇

三ヶ年	清水 ふき	二ヶ年	青木 義雄	一ヶ年	鳥居 たか
同	高川 興子	同	三橋 孝子	同	加藤 義明
同	古川 芳江	同	豊田 保	同	横田 昭
同	貞松 壽子	同	瀧澤 七郎	同	島村 いし
同	早川 くに	同	櫻井 みつ	同	岩谷 しづ
同	大友 強哉	同	廣川 きみ	同	森谷 しづ
同	關川 慶造	一年七月	豊田 文雄	同	石井 午太郎
同	飯倉 ひさ	一年七月	平山 保	同	石橋 泰三
同	荒木 みさ	一ヶ年	大川 益雄	同	大野 勝司

大正元年度三十八人 男一九 女一九

四ヶ年	山内 康夫	四ヶ年	石原 市尾	二ヶ年	小野寺 シゲ
同	林 七郎	同	柳本 應	同	小野寺 俊郎
同	神田 若治	同	高石 寅吉	同	京須 すみ
同	文屋 新一	一年十二月	伊佐治 喜美子	同	神戶 盛三
同	三橋 新一	二年七月	小島 友藏	同	貞松 具徳
同	吉岡 清	二年七月	増田 温子	同	豊田 てる
同	松田 ふく	同	平山 まさ	同	小島 たか
同	石橋 なか	二年七月	大木 君子	同	渡邊 敏
同	石原 はつ	二年七月	京須 忠雄	同	宇井 敏子
同	若葉 孝四郎	二年七月	小田垣 君	同	寺内 多喜子

大正三年度二十九人 男一三 女一六

四ヶ年	京須 八重	三ヶ年	信田 繁	二年七月	椿 榮助	
同	林 子	同	小倉 梅	二ヶ年	河合 ふし	
同	文屋 壽	同	大木 常男	同	越川 薫行	
同	三ヶ年	鈴木 とみ	同	伊佐治 清	同	加藤 伸次
同	諸岡 ます	同	香取 ゆわ	同	岩館 はる	
同	高橋 秀子	同	小倉 治子	同	京須 てる	
同	三橋 誠一	同	松野 正之助	同	大竹 治	
同	堀 榮三郎	二年七月	西内 ちし	同	上原 千代	
同	吉田 茂	二年七月	小野寺 秀雄	一年七月	佐竹 結實	
同	廣瀬 鐵夫	同	長谷川 のぶ	同	佐竹 結實	

大正四年度二十五人 男九 女一六

三ヶ年	加藤 きん	三ヶ年	稻垣 惠	二年七月	木下 ケイ
同	寺内 賢治	二年十二月	沼尻 芳郎	二ヶ年	寺内 てる子
同	浅井 とし	同	小野寺 アイ	同	菅澤 治夫
同	瀧澤 利一	同	鶴田 孝	同	石橋 たみ
同	夏海 いま	二年七月	文屋 喜美	同	山田 はる
同	棟原 鮎雄	同	關川 邦雄	同	廣川 くす
同	諸岡 琴子	二年七月	堀内 鶴夫	同	佐竹 田鶴子
同	藤倉 さだ	二年七月	小田垣 君	同	
同	若葉 孝四郎	二年七月	小田垣 君	同	

六一

私立成田幼稚園一覽

大正五年度三十五人 男一五 女二〇

三ヶ年	小倉 格司同	渡邊 つる	二ヶ年	水野 愛子	
同	吉田 壽同	大橋 あい	同	伊佐治 照子	
同	大徳 愛子同	高石 きよ	同	長竹 勅子	
同	大野 政治同	宮田 節同	同	加藤 まつ	
同	根本 玉壽同	瀧澤 由子同	同	田島 中	
同	諸岡 新一同	古矢 春子同	同	鬼澤 いち	
同	早川 類同	京須 清三郎同	同	大木 安治	
同	鈴木 恒夫同	小倉 信亮同	同	井口 壽	
同	武士田 萬壽子同	高橋 よね	同	石塚 賢太郎	
同	鈴木 慶三同	豊田 喜美一	同	松井 登	
同	大橋 廣雄同	豊田 恒	同		
三ヶ年	鈴木 志津	三ヶ年	鬼澤 幸治	三ヶ年	瀧澤 昇
同	大木 豊一	同	大木 俊子	同	竹内 まつ
同	成田 ふみ	同	根本 誠	同	京須 瑞雄
同	神戸 光子	同	藤崎 健吾	同	石川 まく
同	大島 卓同	同	關川 順道	同	大友 清源
同	山本 雅子	同	諸岡 幹同	同	佐久間 ふみ
同	椿 文雄	同		同	

大正七年度四十一人 男二一 女二〇

二年	小野 寺キク	二ヶ年	古矢 勝正	二ヶ年	宇井 春雄
同	高橋 正雄	同	石川 文枝	同	吉田 松年
同	山田 保同	同	田中 節	同	諸岡 武
同	諸岡 綾子	同	木内 しげ	同	森口 せい
同	武士田 美都子	同	湯浅 秀一	同	西村 庸夫
同	伊藤 英夫	同	江上 英子	同	
同		同	木内 喜久雄	同	
三ヶ年	三橋 壽子	三ヶ年	瀧口 清	三ヶ年	小倉 あや
同	石橋 正俊	同	石原 廣	同	加藤 春雄
同	坂本 なる	同	諸岡 みつ	同	稻垣 昌男
同	坂本 くら	同	渡邊 三男	同	佐藤 寅吉
同	高木 眞一	同	田中 靖悟	同	古川 正子
同	渡邊 利子	同	木曾 智恵	同	木村 豊太郎
同	石橋 はつ	同	小野 幸	同	山田 豊
同	新橋 千代	同	三橋 貞子	同	藤崎 さく
同	木下 てる	同	今井 正治	同	古矢 茂子
同	平野 大子	同	藤崎 菊枝	同	根本 寛
同	黒川 家壽	同	伊佐治 忠雄	同	三神 正雄
同	京須 壽雄	同	高野 正二	同	鈴木 政信
同	加藤 俊子	同	高川 春野	同	
同		同		同	

大正八年度四十五人 男二一 女二四

三ヶ年	山田 ける	三ヶ年	木内 よね	二ヶ年	内田 純一
同	淺井 文哉	同	佐久間 やす	同	神崎 純一
同	岩瀬 トシ	同	石原 繁三	同	大徳 正雄
同	藤倉 静男	同	長谷川 明慶	同	諸岡 貞子
同	小倉 富太郎	同	木内 みね	同	川田 まき
同	石川 とみ	同	石橋 武四郎	同	小林 さだ
同	伊藤 久子	同	小野 寺キ	同	沼田 和江
同	日暮 静	同	天木 誠治	同	菅澤 富美子
同	小泉 豊	同	山田 文太郎	同	瀧澤 ひさ
同	小倉 千代	同	小倉 勇三	同	小林 つる
同	渡邊 延江	同	京須 しげ	同	小野 つる
同	瀧澤 清	同	稲垣 シゲ	同	藤倉 章
同	南村 秀雄	同	黒川 善子	同	豊田 壽美
同	早川 満治	同	小川 あい	同	原 昂
同	萩原 貢	同	成田 敬二	同	芦田 ハル
同		同		同	
三ヶ年	湖田 修一	三ヶ年	三池 豊	三ヶ年	木内 文江
同	秋山 正夫	同	久保田 節二	同	大川 登志
同	信田 まさ	同	平野 正雄	同	淺井 きし
同	諸岡 新	同	青木 勝	同	伊佐治 勝
同		同		同	

私立成田幼稚園一覽

大正九年度三十七人 男二一 女一六

三ヶ年	京須 静江	二ヶ年	古谷 秀男	二ヶ年	諏訪原 正治
同	早川 榮男	同	古谷 光子	同	大橋 とみ
同	長谷川 秀吉	同	大塚 伸造	同	小倉 八郎
同	加藤 登志子	同	加藤 宗平	同	河合 定治
同	二年九月 林 光夫	同	廣野 健太郎	同	木川 まさ
同	二年八月 松田 まさ	同	關川 春江	同	佐久間 正子
同	二年七月 諸岡 信吾	同	福島 義七	同	高津 かな
同	二年七月 島村 勝子	同	橋本 静子	同	
同		同	武士田 昇	同	
四ヶ年	原 敬子	三ヶ年	藤 弘	三ヶ年	大川 コト
同	渡邊 佐喜子	同	石渡 松江	同	秋葉 勝子
同	長谷川 みつ	同	谷ヶ崎 満	同	木内 ひさ
同	川口 源次郎	同	伊藤 市郎	同	藤崎 安治
同	柏原 義雄	同	木下 茂	同	藤崎 安治
同	齋木 歌子	同	關谷 俊雄	同	神崎 謙二
同	富井 恒雄	同	藤倉 ひさ	同	神崎 謙二
同	石川 壽一	同	坂本 とし	同	神崎 謙二
同	田代 雅章	同	白石 猛夫	同	山所 節子
同	諸岡 のぶ	同	諸岡 勝夫	同	田所 武於
同	佐久間 榮一	同	鈴木 一	同	島田 家起
同	渡邊 清	同	木内 武之助	同	信田 のぶ
同		同		同	渡邊 三千歳

◎私立成田幼稚園幼兒保護者心得

一 家庭と幼稚園との連絡に關する事

幼兒の保育に關しては幼稚園と家庭と相待ちて協力するにあらざれば効果を博すること能はざるは云ふまでもなき事なるべしされば家庭と幼稚園とは常に氣脈を通じ内外相應じて保育の效を全くせざるべからず今彼此の連絡に關して當園の冀望する所を擧げんに概ね左の如し

一 家庭より當園の事に付疑義あるか或は幼兒の事に關して擔任保母に問合せ又は協議せられたき事あらば何事にも遠慮なく口頭又は書面にて申出でられたし

二 父母兄弟並に直接に幼兒の保育に關係ある人は時々來園して當園の實況を視察し之を家庭の保育に參考せられんと當園の最も冀望する所也又毎年春秋二回特に保育懇話會を開き保護者諸君の來會を請ふを例とせり是一は實地保育の模様を諸君に示し又一は諸君より家庭の狀況を聞き幼兒の保育に關し相互に懇話せんが爲なり日時は其都度通知すべければ成るべく來會ありたし

一 幼兒付添人に關する事

當園に於ては幼兒付添人を要せず但往復途中の送迎は隨意たるべし

一 幼兒の遊戯に關する事

遊戯は實に幼兒の仕事にして心身の發達一に之によるものなれば最も自由快活に之を爲さしむること必要なれども野郎亂暴に涉るものは之を制せざるべからざるは勿論玩具等に付きて亦能く其良否を甄別せ

られたし又幼兒の記憶に任せ讀書等を授けらるゝ向もまゝあるよしなれども是等は幼兒の發育に害あるも益なかるべければ注意せられたし

一 幼兒服裝に關する事

幼兒の服裝は成るべく質素にして遊戯運動等は便利なる者を用ひ從つて地質は綿布麻布の類とし仕立方を筒袖とせられたし

一 幼兒の携帶品に關する事

幼兒在園中用ふべき器具等は總て當園にて貸與すべきが故に手拭鼻紙等必要な物品の外に幼兒に携帶せしめざる様致したし帽子蓆當傘等の携帶品には一々氏名を記し置かれたし

一 幼兒の往復に關する事

幼兒の往復は充分に保護せらるべきは勿論なれども風雨其他疾病遠路特別の事情ある時の外は成るべく徒歩せしめられたし

一 幼兒の缺席並に家庭の疾病等に關する事

幼兒の缺席一週を越ゆるときは口頭或は書面にて詳に其事由を届出でらるべし凡て多人數の集る所は充分注意を爲すにあらざれば或は惡疫傳染の媒をなす恐あるを以て幼兒の家族に傳染病者ある時は直に其病名を記して届出でらるべし

但茲に傳染病と稱するは痘瘡及假痘、猩紅熱、腸室扶斯、發疹室扶斯、虎列刺、赤痢、ジフテリア、ペスト等を云ふ

一 保護者の異動に關する事

保護者の變更は勿論其轉任改氏名等異動ありたる時は直に届出でらるべし

◎私立成田幼稚園幼児保護者心得

一 家庭と幼稚園との連絡に關する事
 幼児の保育に關しては幼稚園と家庭と相待ちて協力するにあらざれば効果を得ること能はざるは云ふまでもなき事なるべしされば家庭と幼稚園とは常に氣脈を通じ内外相應じて保育の效を全くせざるべからず今彼此の連絡に關して當園の冀望する所を擧げんに概ね左の如し
 一 家庭より當園の事に付疑義あるか或は幼児の事に關して擔任保母に問合せ又は協議せられたき事あらば何事にも遠慮なく口頭又は書面にて申出でられたし
 二 父母兄弟並に直接に幼児の保育に關係ある人は時々來園して當園の實況を視察し之を家庭の保育に參考せられんと當園の最も冀望する所也又毎年春秋二回特に保育懇話會を開き保護者諸君の來會を請ふを例とせり是一は實地保育の模様を諸君に示し又一は諸君より家庭の狀況を聞き幼児の保育に關し相互に懇話せんが爲なり日時は其都度通知すべければ成るべく來會ありたし
 一 幼児付添人に關する事
 當園に於ては幼児付添人を要せず
 但往復途中の送迎は隨意たるべし
 一 幼児の遊戯に關する事
 遊戯は實に幼児の仕事にして心身の發達一に之によるものなれば最も自由快活に之を爲さしむること必要なれども野郎亂暴に涉るものは之を制せざるべからざるは勿論玩具等に付きても亦能く其良否を甄別せ

られたし又幼児の記憶に任せ讀書等を授けらるゝ向もまゝあるよしなれども是等は幼児の發育に害あるも益なかるべければ注意せられたし
 一 幼児服裝に關する事
 幼児の服裝は成るべく質素にして遊戯運動等は便利なる者を用ひ従つて地質は綿布麻布の類とし仕立方を筒袖とせられたし
 一 幼児の携帶品に關する事
 幼児在園中用ふべき器具等は總て當園にて貸與すべきが故に手拭鼻紙等必要な物品の外に幼児に携帶せしめざる様致したし
 帽子辯當傘等の携帶品には一々氏名を記し置かれたし
 一 幼児の往復に關する事
 幼児の往復は充分に保護せらるべきは勿論なれども風雨其他疾病遠路特別の事情ある時の外は成るべく徒歩せしめられたし
 一 幼児の缺席並に家庭の疾病等に關する事
 幼児の缺席一週を越ゆるときは口頭或は書面にて詳に其事由を届出でらるべし凡て多人數の集る所は充分注意を爲すにあらざれば或は悪疫傳染の媒をなす恐あるを以て幼児の家族に傳染病者ある時は直に其病名を記して届出でらるべし
 但茲に傳染病と稱するは痘瘡及假痘、猩紅熱、腸室扶斯、發疹室扶斯、虎列刺、赤痢、ジフテリア、ペスト等を云ふ
 一 保護者の變動に關する事
 保護者の變更は勿論其轉任改氏名等異動ありたる時は直に届出でらるべし

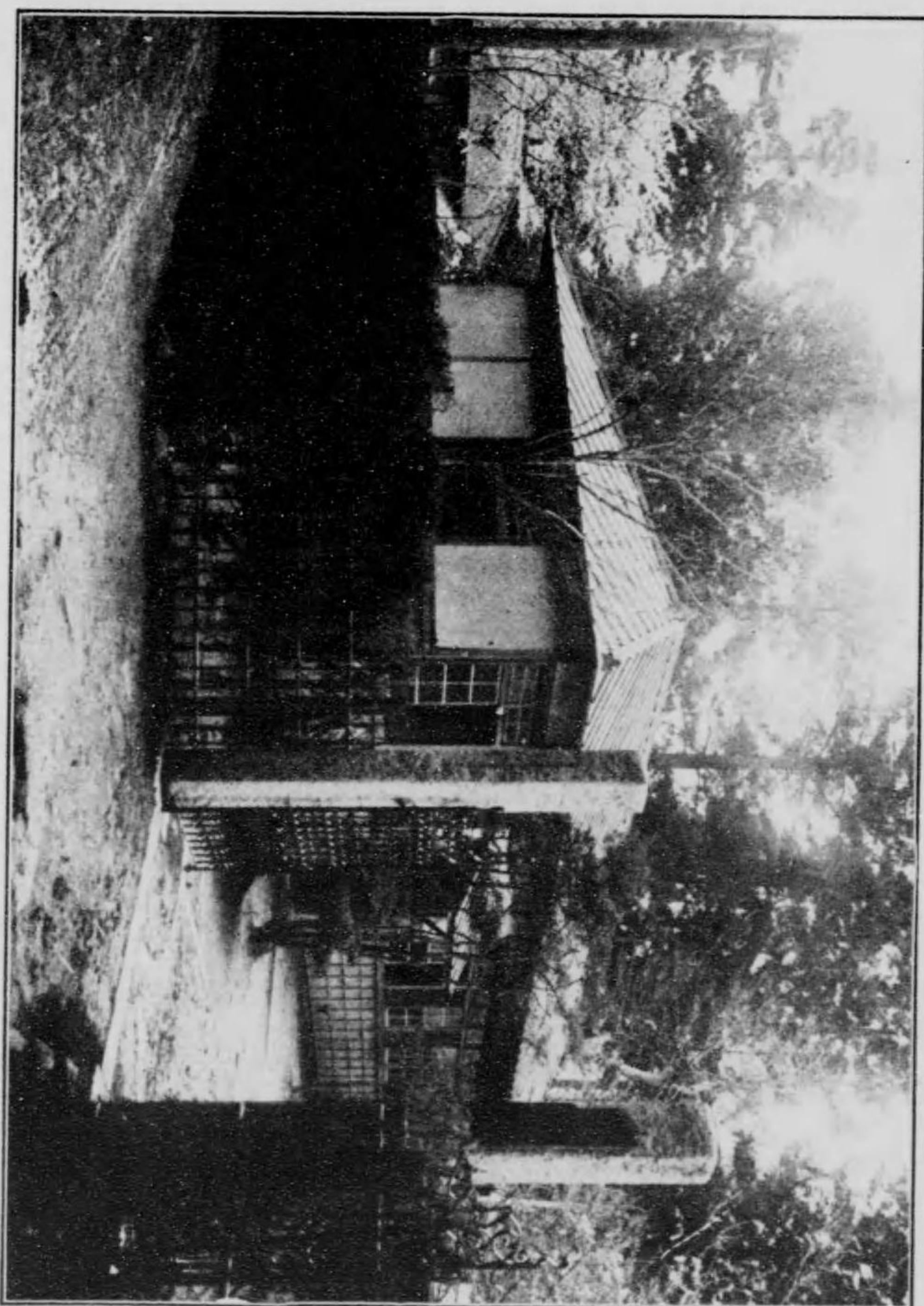
成田山感化院一覽

今日一日の務	六七
平面圖	六七
沿革要項	六八
位置	六九
建物	六九
職員	六九
日誌抜萃	七〇
生活	七三
經費	七七
成績	七八
退院	八〇
入院	八〇
基本金の蓄積	八二

露光量違いの為重複撮影

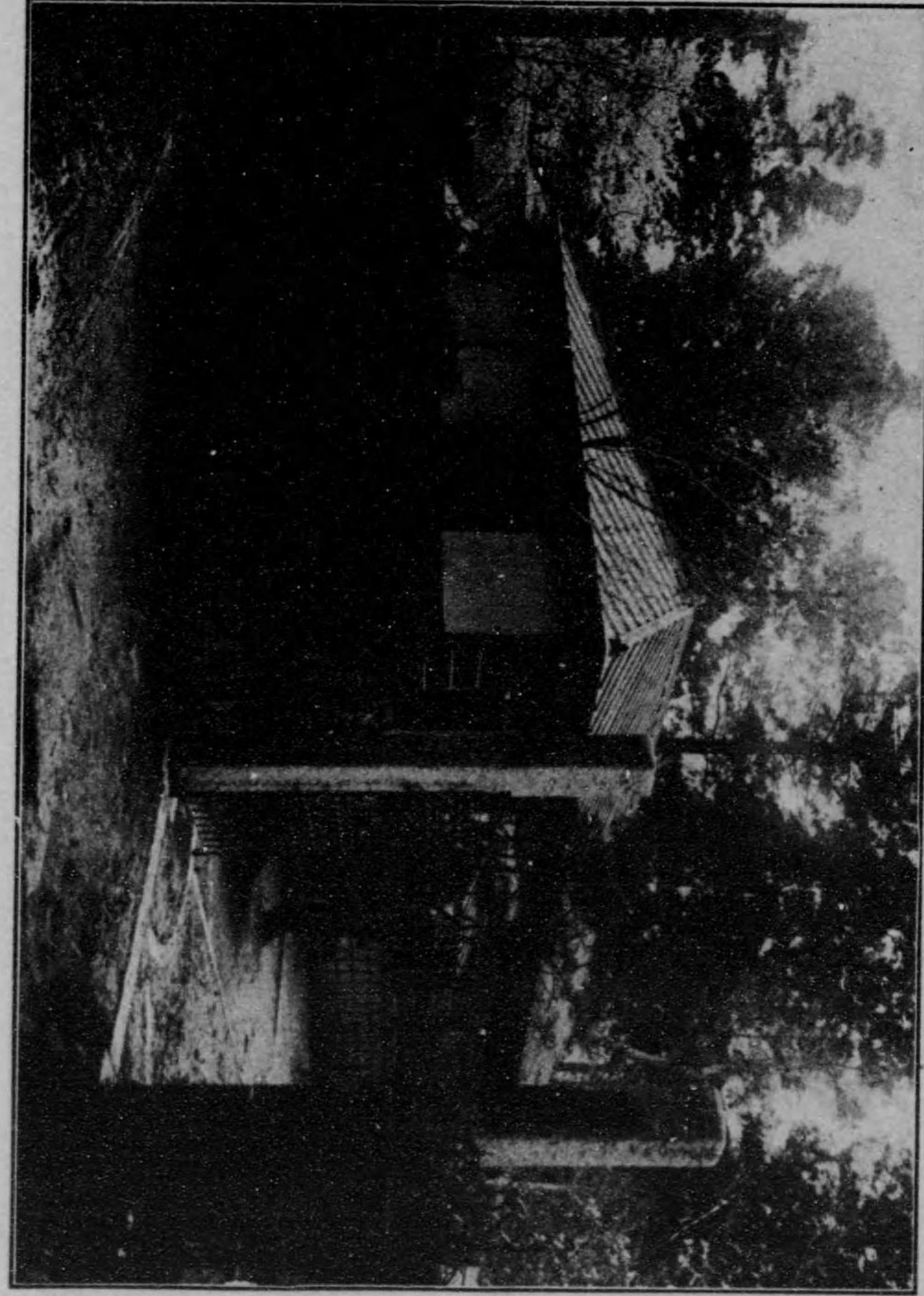
今日一日の務

- 一、今日一日一心に不動尊を信仰する事
 - 二、今日一日父母教師の教を守り能く命に従ふ事
 - 三、今日一日心から親切の人となり又動物を愛する事
 - 四、今日一日能く自制克己し我儘なことや悪いと思ふことをせぬ事
 - 五、今日一日常に正直を旨として決して虚偽を言はぬ事
 - 六、今日一日能く勉強し能く仕事を働く事
 - 七、今日一日禮儀を守り無作法の言行をせぬ事
 - 八、今日一日人より受けたる恩を忘れぬ事
 - 九、今日一日腹を立てぬ事
 - 十、今日一日仕事に倦まない事
 - 十一、今日一日總てに對し清潔整頓を心掛くる事
 - 十二、今日一日物を大切に取扱ふ事
 - 十三、今日一日人の悪口を言はぬ事
 - 十四、今日一日不平なく愉快に日を暮らす事
 - 十五、今日一日出来る丈多く善行を積む事
- 右十五ヶ條毎朝精讀し必ず實行せらるべし

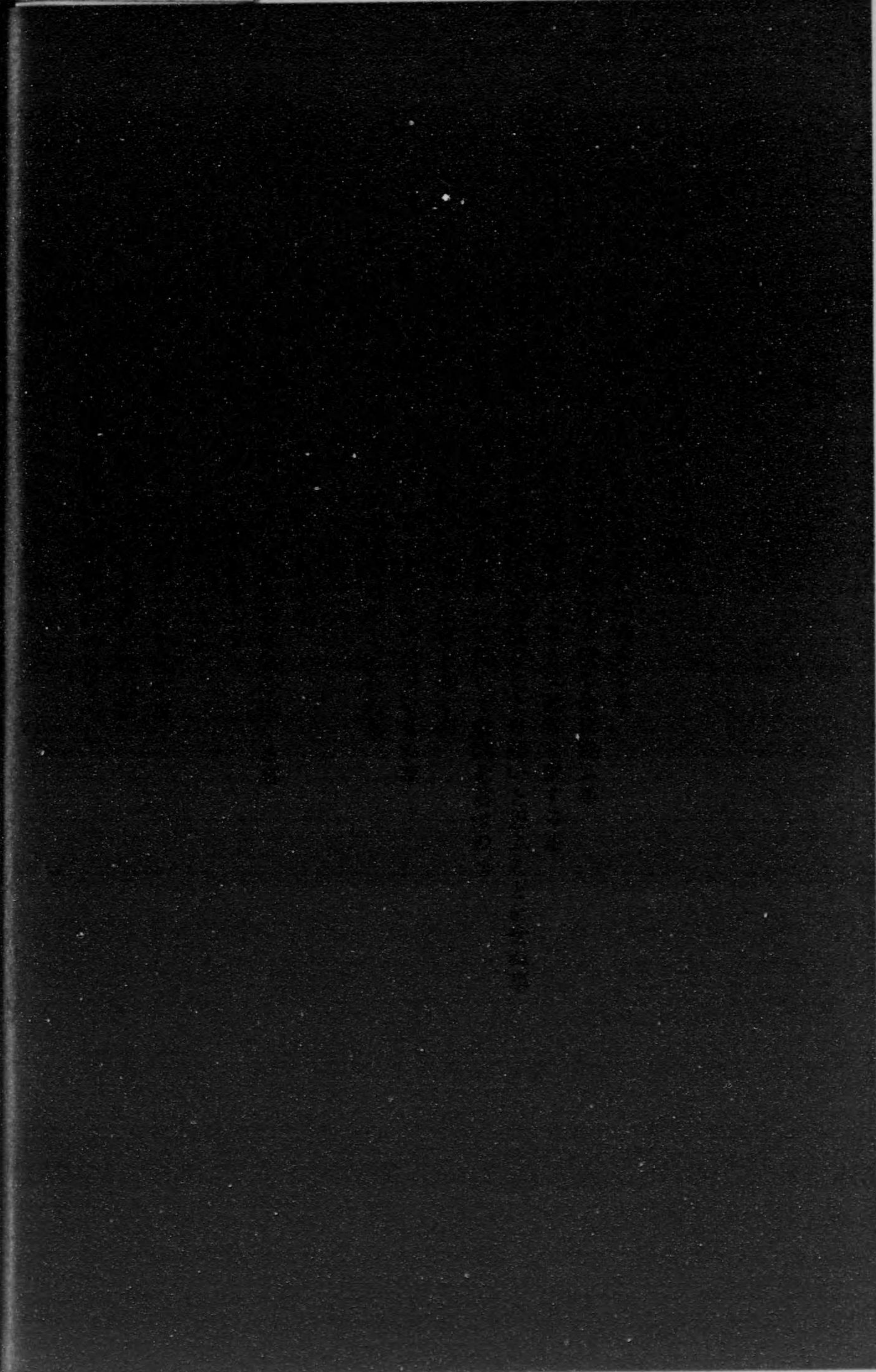


院 化 遂 山 田 成

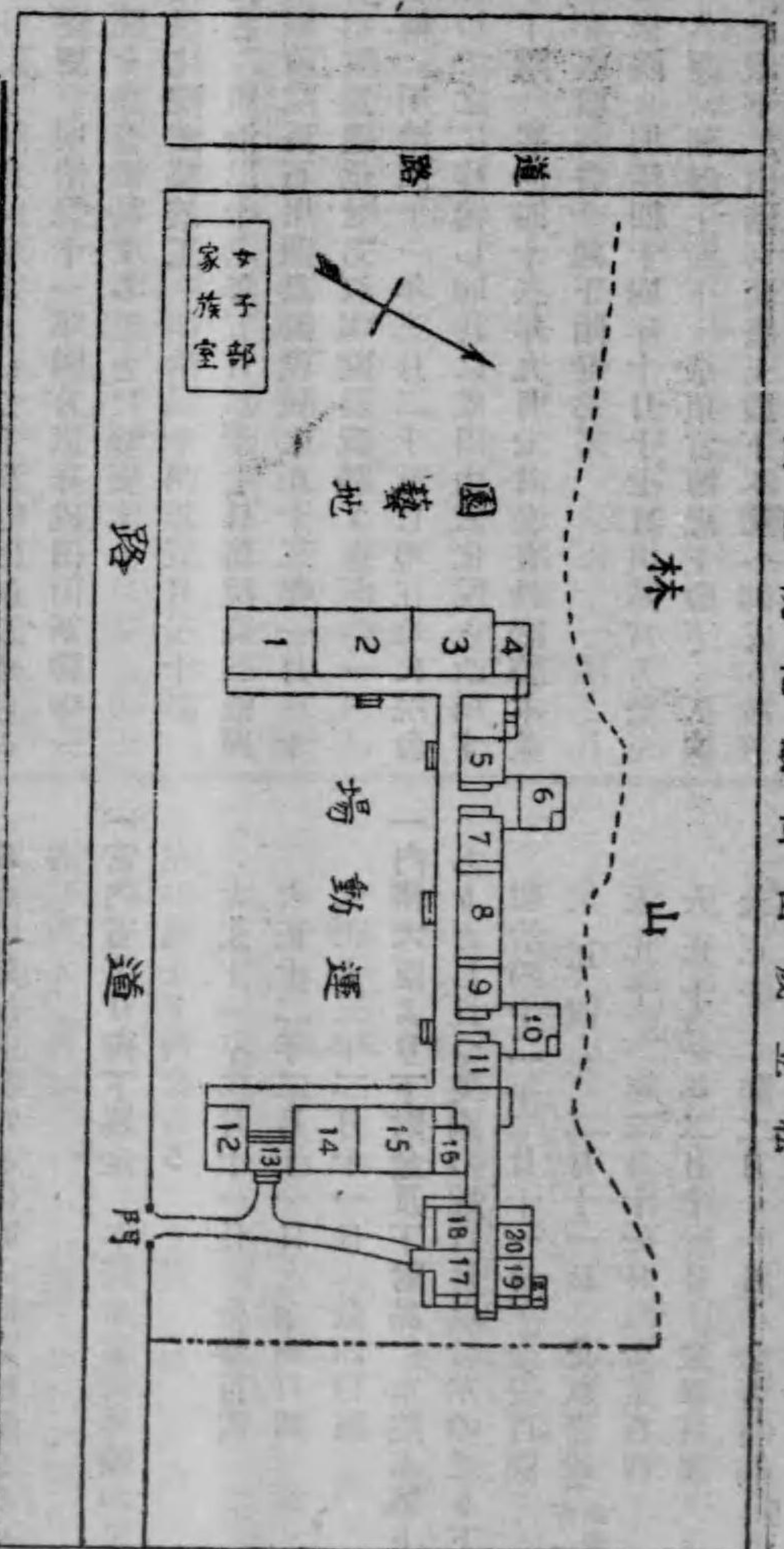
露光量違いの為重複撮影



院 化 感 山 田 成



私立成田山威化院全圖



面積二百二十五坪	1	講堂	室
	2	圖書室	室
	3	教室	室
	4	佛教室	室
	5	生徒室	室
	6	教師室	室
	7	生徒室	室
	8	手工場	室
	9	生徒室	室
	10	保母室	室
	11	生徒室	室
	12	事務室	室
	13	昇降口	
	14	食堂	堂
	15	炊事場	
	16	洗風器	
	17	主任室	室
	18	同居室	室
	19	病室	室
	20	新入生室	室
	21	物置	
總建坪二百十			

私立成田山感化院一覽

(大正十三年三月三十一日現在)

◎沿革要項

- 一 創立 明治十九年十一月廿八日千葉感化院と稱し千葉縣下各宗寺院共同事業として千葉町に創設せらる
- 一 組織の變更 明治二十一年四月以降成田山新勝寺一手に本院を經營維持することに變更す
- 一 舊千葉感化院建築竣工 明治二十四年五月三十日
- 一 院長更迭 明治二十七年五月二十七日舊院長三池照鳳師辭職前院長石川照勤師就職大正十三年一月三十一日石川院長遷化せられ現院長就職す
- 一 移轉改稱 明治四十一年三月二十五日現在地に院舎を新築して之に移轉し同時に成田山感化院と改稱す
- 一 御膳本下附 明治四十三年九月七日教育勅語膳本並に戊申詔書膳本各一通下附せらる
- 一 皇族御來院 明治四十四年十月十七日山階宮芳麿王殿下 久邇宮朝融王殿下 華頂宮博忠王殿下 久邇宮邦久王殿下 山階宮藤麿王殿下本院へ御成り被遊尙同月二十二日更に 山階宮妃殿下には御姫宮安子

女王殿下を御伴はらせられ本院へ御成り遊され生徒一同へ御菓子料御下賜の光榮を蒙れり本院よりは生徒製作に係る竹籠の内に三里塚名産の初茸を入れたるものを献上したるに直に御嘉納遊さるゝ旨恩命に浴したり

一 宮内省より御下賜金 本院事業御獎勵の思召を以て左の通り下賜せらる

- 大正十一年二月十一日 金參百圓
- 大正十二年二月十一日 金四百圓
- 大正十三年二月十一日 金四百圓

一 内務大臣より下附金及下附品 本院事業上從來功績ありとし且つ獎勵の趣旨を以て左の通り下附せらる

- 明治四十二年二月十一日 金壹百圓
- 大正四年二月十一日 花瓶壹對(市岡素雲作)
- 大正十一年二月十一日 金貳百圓
- 大正十二年二月十一日 金參百圓
- 大正十三年二月十一日 金壹百圓

一本縣知事より獎勵金 本院事業獎勵として左の通下

附せらる

- 大正十一年一月十三日 金壹百圓
- 大正十二年三月九日 金壹百圓
- 大正十三年三月二十五日 金壹百圓
- 一 平和記念東京博覽會より銅牌受領 大正十一年七月十日 先に出陳したる本院一覽に對し銅牌を送らる

◎位置

千葉縣下總國印旛郡成田町成田四百二番地の一にして成田山境内に在り前面成田町幸町より新勝寺へ往復する道路に浴ひ成田停車場よりは約六町成田山不動尊よりは山上奥の院大日如來の伽藍を右に見左方へ約一丁にして來るを得東隣出世稻荷への參詣者は左方に古木鬱蒼幽靜の間に白聖の一家屋を見るべし、本院即是れなり

◎建物

明治四十一年三月二十五日の竣工に係り敷地建坪並に建築費用左の如し
一本院敷地面積 一千二百二十五坪

一 建築費 一萬八千二百九十九圓九錢九厘
但し別に女子部家族室を有するも此中に算入せず敷地建物明細圖は別頁に掲ぐ

◎職員

成田山新勝寺住職

- | | |
|----------------|--------|
| 一 院長 | 荒木 照定 |
| 一 主任 | 大友 惟誠 |
| 一 會計主任 | 久保田 萬吉 |
| 一 唱歌教師兼保母 | 大友 靜 |
| 一 保母 見習 | 岩崎 道子 |
| 一 炊 女 | 長井 道子 |
| 一 篤志院醫 | 關川 博道 |
| 職員中院内常住のもの左の如し | |
| 一 主任兼教諭 | 大友 惟誠 |
| 一 唱歌教師兼保母 | 大友 靜 |
| 一 保母 見習 | 岩崎 道子 |
| 一 炊 女 | 長井 道子 |
- 職員一同は院長の指導監督を受くるは勿論能く院長の

精神と威化院職員たるの自覺とにより職務に従ふの外
現在としては別に職員に對する成文の制令なし唯協同
一致して圓滿に且つ規律ある家庭を作るを目的とし而
かも此範圍に於て自由に活動を許し妄りに牽制を加へ
ざる組織なり

院醫關川博道氏は本院の當地に移轉以來引續き篤志を
以て其職に在り常に院生の保健に留意せられ殊に疾病
治療に際しては熱心之に當らるゝが故に院生の健康狀
態常に良好稀に疾病あるも後害を遺せし者なきは本院
の最も欣幸とする所にして深く同氏の厚情に謝意を表
し居る所以なり

◎大正十二年度日誌拔萃

- 四月 一日 退院生一名來訪
- 四月 八日 一同三里塚に櫻狩す 生徒仁遠の誕生
祝をなす
- 四月 十日 生徒從之の誕生祝を行ふ
- 五月 八日 生徒改之の誕生祝
- 五月 十四日 生徒一名入院欲仁と稱號す
- 五月 二十三日 成宗電氣軌道株式會社従業員家族慰安

會に本院職員生徒一同も招待を受け之に列す
五月二十八日 生徒慎啓改善退院せしめ家庭より實業
補習學校へ通ふことゝなれり

六月 三日 生徒敏求風邪の爲め醫療を受く翌々日
全快

六月 八日 生徒敏求の父危篤の電報に接す敏求は
直に職員におくられて歸宅、後其父は幸に全快敏求
も歸院す

六月 二十日 井戸ポンプ並に水道を改設す

七月 一日 退院生一名來訪終日遊びて夕方歸る

七月 二日 生徒擇善遊戯中左手に負傷醫療を受く

七月 五日 生徒文行の誕生祝を催す

七月七、八、九日 當町祇園祭に付午後休業して町内に遊
ぶ此日退院生二名來訪共に遊ぶ

七月 廿七日 生徒敏求の誕生祝

八月 一日 生徒有恒胃腸を悪くし醫療を受く四日
間

八月 二日 生徒文行耳だれにて醫療を受く

八月 五日 本日より同月十六日まで山武郡綠海村
字木戸海巖寺に一同臨海生活を行ふ

九月 七日 主任は在京退院者及在院生の在京家庭
訪問の爲め上京退院者の罹災したる者五名在院者の
家庭六家中罹災したる者四家ありしも生命には何れ
も別條なかりしは幸甚なりと唯退院者の姉一人死亡
したるものあり弔意を表す

(右臨海生活に關し成績を々々さ何等組織的の調
査は之を行はざりしも單に體重の點よりすれば僅々
十二日間に總員十五名中其増加したるもの十三名減
少したるもの二名増加の最大なる者四百匁而して之
が總平均は一人當り百八十匁の増加を見たるは此試
みの決して徒爾ならざりしを思はしむ況んや兒童の
精神上に及ぼしたる効果は蓋し計り知るべからざる
ものありたるべきを信ず)

此生活中同村諸賢の示されたる厚意は一同と共に深
謝する所なるが就中同村長秋葉拾司郎氏同助役齋藤
兼次郎並海巖寺住職小林祐然師及其御家族の御厚情
に對しては一同深く感銘し居り茲にも記して謝意を
表するものなり

八月 十七日 生徒一名入院仁至と稱號す

八月 二十二日 主任は職員生徒を代表し病氣療養中の
院長現下を相州鶴沼に御見舞即日歸院す

八月 三十一日 天長節につき終日愉快に遊ばしむ

九月 一日 關東大震災 本院は講堂教室の壁破損
及主任室の鴨居墜落したる外幸に損害輕少なり

九月 四日 東京に於て罹災したる退院生一名避難

十二月廿四日 生徒欲仁の誕生祝
 十二月廿五日 院長猥下より一同に日記帳及御菓子澤山下さる
 十二月三十日 院長猥下よりリンゴ密柑等澤山下さる
 一月 一日 午前零時主任は生徒一同を引卒先づ若水に心身を清めたる上不動尊御本堂及鎮守社に參拜す現在生有恒好古爲有温厲用行改之仁遠欲仁文行擇善從之仁至の十三名皆壯健なり、午前九時四方拜の舉式後成績よく家庭の近きもの四名に歸省を許す退院生二名來訪一同と打交りて歌留多双六羽子ツキ等に打興す
 一月 二日 退院生二名來訪
 一月 三日 生徒用行の誕生祝
 一月 四日 退院生一名來訪
 一月 六日 試筆を行ふ
 一月 七日 院長猥下より水菓子澤山下さる
 一月 十日 生徒仁至保護者よりの願により中途退院家庭より小學校へ通ふこととなる
 一月 十一日 生徒好古の父命日につき本人を謹慎せしむ

一月 十五日 院長猥下より半紙澤山下さる
 一月 二十一日 退院生一名來訪
 一月 二十三日 院長猥下の病氣重らせらる
 一月 廿六日 午前十時御成婚遙拜祝賀式を舉行一日業を休み夜は談話會を行ふ
 此日我等の院長も社會事業家表彰者の中に加へられ御紋章付銀盃壹個及金貳百圓御下賜の恩命に浴す
 生徒改之の父の命日に付本人謹慎
 一月 三十一日 午前十時院長石川照勤猥下遷化せらる職員生徒一同の悲嘆哀悼極なし噫呼
 二月 二日 本日より主任は新勝寺に行き院長猥下密葬準備の手傳をなす主任の不在中生徒は最も靜肅に謹慎の意を表し大聲を發する者さへなかりきと蓋し猥下を敬慕することの深きがためなるべし
 二月 六日 今夕一同は故院長猥下の御遺骸に參拜燒香す 生徒改之出來物を切開して頂く
 二月 十日 密葬は新勝寺に於て執行せらる一同參列す式前生徒五名を出して受付を手傳はしむ
 二月 十一日 紀元節にて一日休業、本日の佳辰に當り宮内省及内務省より御下賜金あり主任は縣廳へ出

頭して其傳達式に列す
 二月 十三日 本院飼養の孔雀死す(猥下の二七日に相當す)剝製する事とす
 二月 十六日 生徒用行の祖母命日本人謹慎、本月及來月には職員を始め誕生日のある生徒二三あれ共猥下本葬前につき其祝を遠慮す
 三月 十五日 生徒仁遠改善退院して自宅より中學校へ通ふこととなる
 三月 二十五日 本院の移轉記念日にして從來なれば盛大に祝ふ例なりしも本年は本葬前につき遠慮せり
 三月 三十一日 院長猥下の御本葬午前十一時より新勝寺に於て執行一同參列す式前の手傳密葬の時と同じ退院生一名來訪

◎院内生活

本院の生活は普通一般に於ける温き家庭生活と毫も異なる所なし尤も普通教育と異り或る一定の時間を限り教育するにあらずして普通教育の時間以外家庭教育として兒童一般の躰をなすと共に信仰の觀念を生ぜしむるを以て實に本院生活の精神と爲すが故に此根本の精神

に基き總ての施設及全體の方法を實現し居れり其生徒待遇の方法に至りては慈悲仁愛の情を以て之に對するは勿論一面には亦整然たる規律生活をなさしめ亂雜放肆に流れざる様最も注意せり然れ共本院家庭内の大小悉く豫て定めたる成文によつて行動せしめ監督すると云ふが如き方法にあらず常に便宜を主とし温き家風自然の慣例等により之を教練し力めて愉快なる生活をなさしむるを以て主眼とせり約言すれば本院の生活は信仰ある規律正しき家庭生活といふを得べし
 日課及其説明を擧ぐれば左の如し
 午前五時 起床二十分間の自強術冷水摩擦を終りて直に掃除
 午前七時 朝食
 午前八時 朝拜式
 一、皇室の萬歳を奉祝す 二、大廟遙拜
 三、成田山不動尊禮拜 四、各自先祖敬拜
 自午前九時至正午 學科
 正 午 晝食
 自午後一時至四時 實科
 午後五時 夕食

自午後六時至同七時三十分 自習
自午後七時三十分至同八時 自強術
午後八時 就寐

以上の如く定むると雖も時季により時々變更するは勿論便宜上臨時變更することあり

起床 朝起は新勝寺の曉鐘に警醒せられ蹶起せざるを得ざる習慣を作れり但本院のみならず成田町一般に此良習を存するが如し

自強術 自強術なる一種の體操は健康増進上甚良好なるを聞き職員先之が實地研究を試むる事數月然後大正九年十二月一日より從來の徒手體操に更へ朝夕二回之を行ふ事として今日に及べり確に効果を認む

清潔 清潔は本院の最も努むる所也毎朝掃除の外日に數回之をなし時々大掃除及各生の清潔整頓を検査す
冷水摩擦 冷水摩擦は毎朝洗面の時職員生徒一緒に之を行ふ水浴は自由に任せ置けり

食事 常に兒童の營養状態に留意し滋養に富める物を選び居るを以て敢て中流家庭に劣る事なし而して職員(其家族も)生徒皆一堂に集りて食を共にす單に食事のみならず本院の生活は總てに於て「共に」といふ事に

最も留意し學ぶも遊ぶも常に職員生徒其行動を共にし美しき圓滿なる家庭を作る事に努力し居れり

衣類 普通の衣類を用ゆ曾ては制服ありしも今は之を定めず但毎朝禮拜の時及授業の際は袴を着用せしむ
朝拜式 毎朝講堂に於て之を行ひ兒童に敬虔の心を養成せんが爲め職員先特に敬虔的態度を持し最も嚴肅を旨として之を行ふ

本院修身教育の大本として教育勅語並に戊申詔書の聖旨を奉戴する事勿論にして之が實踐躬行の實を擧ぐるは宜しく信仰の力に依りて之を喚起せざる可らざるを信ず本院の特色として成田山不動尊を信仰せしむる所以即是なり

訓話 一般に對する訓話は毎朝先祖敬拜の際及就寐前不動尊禮拜の時之をなせ其平易簡單にし之が爲め多くの時間を費さず何となれば職員は生徒と起臥を同し行住坐臥の間之が師たり父兄たるの心を持し實踐躬行所謂行を以て訓ふるを旨とすればなりされど個人に對しては機會を捕へ之に投じて其兒童に適切に徹底的に訓話をなす

學科 概ね小學令に據る教科目により午前中三時間

乃至四時間(但雨天又は冬期は午後に及ぶ事あり)の授業をなす但特に重きを讀方書方綴方算術珠算等の實用學科に置けり尋常科を卒業せし後猶ほ向上の見込ある兒童にして且品行最早差支なしと認めらるゝ時は中學へ通學せしむる事あり然らざる者には院内に於て高等科及補習科教育を授く又特に進歩の見込あるものには午前の學科とは別に夜間特殊の學科を授く例へば其兒童の將來に於ける職業を見込み農業入門商業道德を教ゆる等是なり

實科 農業を主とし外に簡易なる手工(竹細工及運針)を課す但冬期は手工のみなり耕地は目下三段歩を有し追々擴張の見込なり院内に於ける實科に對しては生産的職業的技能を與へ實社會に出で直に夫に依て自活し得るものを選ばざる可らずと論ずる者あり本院固より考量したる事なるも三四の業務を設備したりとて到底全生徒の個性嗜好に悉く適合せしむる事至難にして強て職業を狭き範圍に押込む嫌あり殊に感化院に適する授業師たる人物を得る事困難にして施設繁多なる割合に好果を收められざる遺憾あり依て本院は教育終局の目的を主眼とし身體の鍛鍊精神の訓練特に勤勞

性の養成を目的とし單に農業手工の二課を設くるのみ
娛樂 兒童の性情を圓滿に發達せしめ愉快の中に教化の目的を遂げんとし娛樂には相當の意を用ふ

一、**庭球及捕球** 娛樂に供する外體力の養成にも資せんと之等を設けたるに一同は喜びて之を遊び晴天の日には殆んど其遊び時間を之に費し居れり

一、**圓球盤** ビンボン、カラム雨天の日には之にて喜び遊ぶ

一、**蓄音機** 祝祭日及日曜日の夜間又は談話會其他の會の際に之をなさしむ

一、**生徒圖書室** 此所に有益なる佛喇雜誌(目下實業の日本、日本少年及談海)寫眞、繪畫等を置き兒童の閱覽に供す

一、**自由園藝** 一定の土地花壇を貸與し蔬菜草花の栽培箱庭作り等自由に園藝の樂を味はしむ

一、**散步、遠足及旅行** 日曜日の午後不動尊に參拜をなさしめ同時に散歩せしむ又附近神社佛閣の參拜水泳船遊魚釣蕨狩茸狩栗拾或は單なる山遊び等にて數々山野を跋渉し郊外に遠足し娛樂に兼て體力の養成に資せしむ或は臨時に汽車に乗りて遠方への修學旅行をなす

一、三大節及本院記念日 當日は祝賀式後種々なる餘興(琵琶浪花節福引の外各生自身の餘興)をなして一日を祝はしむるを以て兒童は頗る樂となし居れり

一、角力 院内に土俵を設け夏期は殊に盛にとらしむ尙毎年九月に於て成田素人大角力あり生徒も出場せしむるを常とす

一、誕生祝 院長を始め職員生徒の誕生日には其夜職員生徒一堂に團樂し茶話會を行ふ特に生徒の誕生日には該兒童に一日の休暇を與へ早朝先不動尊に參詣其立身出世を祈らしめ本院よりは祝意を表して本人の好める文具品を贈り又特に御馳走を供す

一、五月節句 講堂に幟を飾り柏餅にて茶話會を開く

一、義士祭 盛に之を行ふ

一、談話會 時々之を開く

一、鸚鵡 鶏、山羊を飼育す

右の外生徒自が時節により流行によりてなす遊戯例へば輪廻し獨樂歌留多双六陣取鬼事將棊五目(其他種々)等は大抵自由に任かし徒に拘束を加へざるのみならず多くの場合職員之に加はるを常とす

賞罰 總て普通の家庭生活と状態を同らせしむる希望なるが故に賞罰の如きも固より格別の定なし毎年三月二十五日は本院の記念日にして當日は多くの賞與を與ふるを例とするも平日は格別なる善行ある場合の外賞與を實行せず但賞與を行ふ場合と雖も式場に於て舉行するが如き事なし

望なるが故に賞罰の如きも固より格別の定なし毎年三月二十五日は本院の記念日にして當日は多くの賞與を與ふるを例とするも平日は格別なる善行ある場合の外賞與を實行せず但賞與を行ふ場合と雖も式場に於て舉行するが如き事なし

生徒の席順は一日より月末に至る一ヶ月間各生徒の操行成績を調査し右の結果により(日々の成績表に依るの外更に職員の見解を附加す)翌月一日席順を改むるの例にして此席順には最も重きを置けり

雜件 一、祭日 生徒中若し父母死したる者ある時は勿論其他最も近き先祖の命日に於て特に祭壇を設け香花供物を献じ一日の休暇を與へ祖先に敬拜の意を表せしめ終日謹慎せしむ

一、稱號 生徒在院中は特殊の稱號を用ひ本名は嚴に之を秘して呼ばしめず例へば志道サン爲徳さん好學サンと名稱するが如し生徒よりしては院長は御前様主任は先生主任妻女は奥サン他の職員は誰だれ先生と其姓を頭に於て先生と呼べり生徒に稱號を用ふるは其依頼者に於て自己の住所氏名及其子供の名とは公然世上に發表せらるゝを好まざるの希望あるを知ると共に本

院としては生徒入院の際に於て改めて新なる道德的名稱を附するは本人の改善上一種の大いなる暗示の力あるものと認めたるに由れり

一、間食 初は日曜日及毎月一日のみ之を與ふるの定めなりしも特志の人々より時々菓子等を生徒に寄贈せらるゝことあり又院長手許より生徒を慰めよとて特に珍菓水菓子等送り來ること數々なるのみならず院教師へ他より贈られたる菓子等を總て生徒に分配するを以て實際に於ては間食の度數甚だ多き方にして是等の方法は總て一般家庭の兒童生活と異なることなし

一、當番 生徒中順番に當番並に便所掃除の勞務に就かしめ當番には雜務の外臺所の手傳をなさしむ

◎經費

本院には嚴密なる豫算なしと云ふ方事實に近し固より大體の豫算を定め置き右を標準として支出をなし嚴に濫費を防ぐ事は勿論なりと雖も實際は必要に重きを置き必要なる以上は實費を使用するに躊躇せず況んや錢匣に拘泥するが如きをや從て亦豫算内なりとして必要なき費途を無理に消費するが如きことなきは無論なり

毎月定日本院經費の金額を新勝寺會計主幹より領收し之を支出するの慣例なるが會計上院長及主幹より未會て一言の注意質問を受けたることなし全く深き信頼を與へて濫りに細小の監督を加ふるが如きはあらざるなり此結果は自然局に當る者に對し自制心を與へ求めずして總ての節約行はれ其效果は慥に豫算を限定する以上において更に頗る便利を極め居れり左に記載するは本院移轉後の決算なり

金千六百十圓九十錢	明治四十一年度
金千九百五十九圓四十八錢	明治四十二年度
金二千八百八十五圓四錢	明治四十三年度
金二千三百二十一圓八錢	明治四十四年度
金二千六百七十五圓六十七錢	大正元年度
金二千三百四十五圓六十三錢	大正二年度
金二千三百三十二圓七十四錢	大正三年度
金二千八百三十一圓五十七錢	大正四年度
金二千七百八十六圓五十九錢	大正五年度
金三千〇二十五圓八十八錢	大正六年度
金二千六百〇八圓三十四錢	大正七年度
金三千六百四十圓三十七錢	大正八年度

- 九 不良の原因と認むべき事由及不良行為開始の年時
- 十 本人に最も嗜好するもの
- 十一 如何なる地方に生活せしや
- 十二 里子に出せし事ありとせば其年月及歸家せし時の年月並に其行先きの職業住所氏名生計の程度
- 十三 身體の健否若し病氣ありとせば如何なる病症なるや及其發病の原因並に時期
- 十四 現に健康體なりとも曾て大病に罹りしことありや否や若しあれば其年月及病名
- 十五 寢小便するの悪習あるや否や
- 十六 改善退院後に於ける豫定業務

右の通り相違なし

年月日

依頼人 何 某印

(第三號)

印紙 在院誓約書

拙者儀今般入院御許し被下候に付ては在院中は職員一同の教訓に従ふべきは勿論諸規則は堅く遵守可仕候也

前書何某一身に關しては在院中如何様の儀出來候とも拙者等引受決して御院に迷惑相掛申間敷は勿論尙左の條堅く相守り申すべく候

- 一 規定の院費及食費は毎月三日限り前納致すべく候事
- 二 在院中本人諸規則命令に違背致し候節は相當の罰に處せらる

- 三 本人不正の爲め感化方法執行上に必要なる親權は總て委任致し候事
- 右の三ヶ條約定致し候處確實也仍て保證人連署を以て誓約書差入候也

年月日

住 所 住 所
依頼人 何 某印
住 所 住 所
保證人 何 某印

成田山威化院長 荒木照定殿

備考 入院の手續は前記の書面を本院に差出すを以て其手續を終るものにして此他何等面倒の方法無く又此の書面と雖も依頼人希望によりては本院にて代書するも差支なし從來參觀せられたる諸君の中より本院は單に本山信徒の希望者のみに限り其依頼に應ずるものか又は千葉縣下の依頼者のみに限り入院せしむるかとの質問を受けたることあれ共固より如斯き制限すべき理由なし本院は成田山新勝寺の私立經營しつゝある感化事業なれば何れの家庭何れの地より依頼せらるゝも差支なきなり

本院基本金の蓄積

明治四十一年三月本院を千葉町より成田町へ移轉せし以來各慈善家より本院へ寄附せられたる金員を蓄積し將來の基本金を作るの方針を探り着々實行中恰も前掲の如く宮内省及本縣より本院へ事業資金として

金圓の下賜あり依て政府の斯道に對する賞奨勸勵も茲に存するを知らるも本院より進んで寄附金を受けんとするの方法を探るは往々世の誤解を受くるの嫌ひあるを以て全然勸募方法を探らず一に篤志家の同情義捐に任せ其結果として現下は金四千四百四十二圓三十九錢と勸業債券(圓券)七十壹枚(三月三十一日調)とを有するに至れり殊に敬服すべきは成田山々民諸君の美風にして一朝其家人に死者あるときは其遺善供養の爲に大抵本院に金圓を寄附し其意を表せらるゝことになり居れり
尙ほ此基金蓄積の外本院は銀行預金八百十六圓七十四錢を貯蓄せり右は本山御開帳の折該御開帳を記すべく右施設費として本山主より寄附せられたる金員及特に此内へと寄附せられたる金員となり依つて本院は本金を基礎として將來本院附屬の果樹園を建設するの見込を以て本金を預金しつゝあるものなり
本院は不動尊本堂脇、本院門前、並に成田停車場内三ヶ所へ喜捨箱の設置あり大正十二年四月一日より大正十三年三月卅一日に至る各慈善家より本院に寄附せられたる金品並に該芳名尙篤志家より投入せられたる喜捨箱の金額左の如し但し本金は全部基本金として貯蓄し毫も本院經費に使用せざるなり

寄附金品の分(但し各團體より寄附せらるゝ如誌等は之を略せり)

- 一金 參圓 後藤 勇 太 郎殿(成田)
- 一金 拾五圓 瀧 澤 德 次 郎殿(成田)
- 一金 拾圓 川 村 佐 平 治殿(成田)
- 一金 五圓圓 二 宮 伊 三 郎殿(成田)
- 一金 參圓 稻 橋 西 造殿(成田)

私立成田山威化院一覽

- 一金 拾圓 重 田 頼 賢殿(成田)
- 一金 五圓 京 須 貞 次殿(成田)
- 一金 五圓 關 川 照 慶殿(成田)
- 一金 五圓(生徒文具料) 山 本 勝殿(成田)
- 一金 壹圓(生徒菓子料) 石 井 り 子殿(成田)
- 一金 壹圓(同上) 右 同 人殿
- 一金 五圓(同上) 青 木 勝殿(成田)
- 一金 五圓(同上) 松 壽 神 達殿
- 一葉子澤山 淺 井 壽 子殿(成田)
- 一鉛筆三打 山 本 敬 三 郎殿(成田)
- 一ノートブック十二冊 成田電氣軌道株式會社殿
- 一活動寫眞觀覽 成田電氣軌道株式會社殿
- 一麥葉澤山 小 林 定 吉殿(東京)
- 一御料理數回 高 尾 謙 一殿(東京)
- 一果物澤山 淺 葉 清 一殿(東京)
- 一菓子澤山 鈴 木 勇 助殿(成田)
- 一雜誌向上(每號) 八 木 善 助殿(成田)
- 一理 髮(毎月一回)

右八木善助氏は當町幸町に理髮店を營める方にして極めて慈善の心篤く數年來毎月(同氏病氣の爲一時中絶したることあるも)理髮店の定休日なる十七日を割きて本院生徒の爲めに來りて理髮し下さること極めて親切丁寧本院は深く其篤志に謝意を表し居るものなり

以上の中特に生徒何々料として寄附せられたる分は直に其品に更へ若しへは生徒娛樂費に供し居れり

喜捨函の分

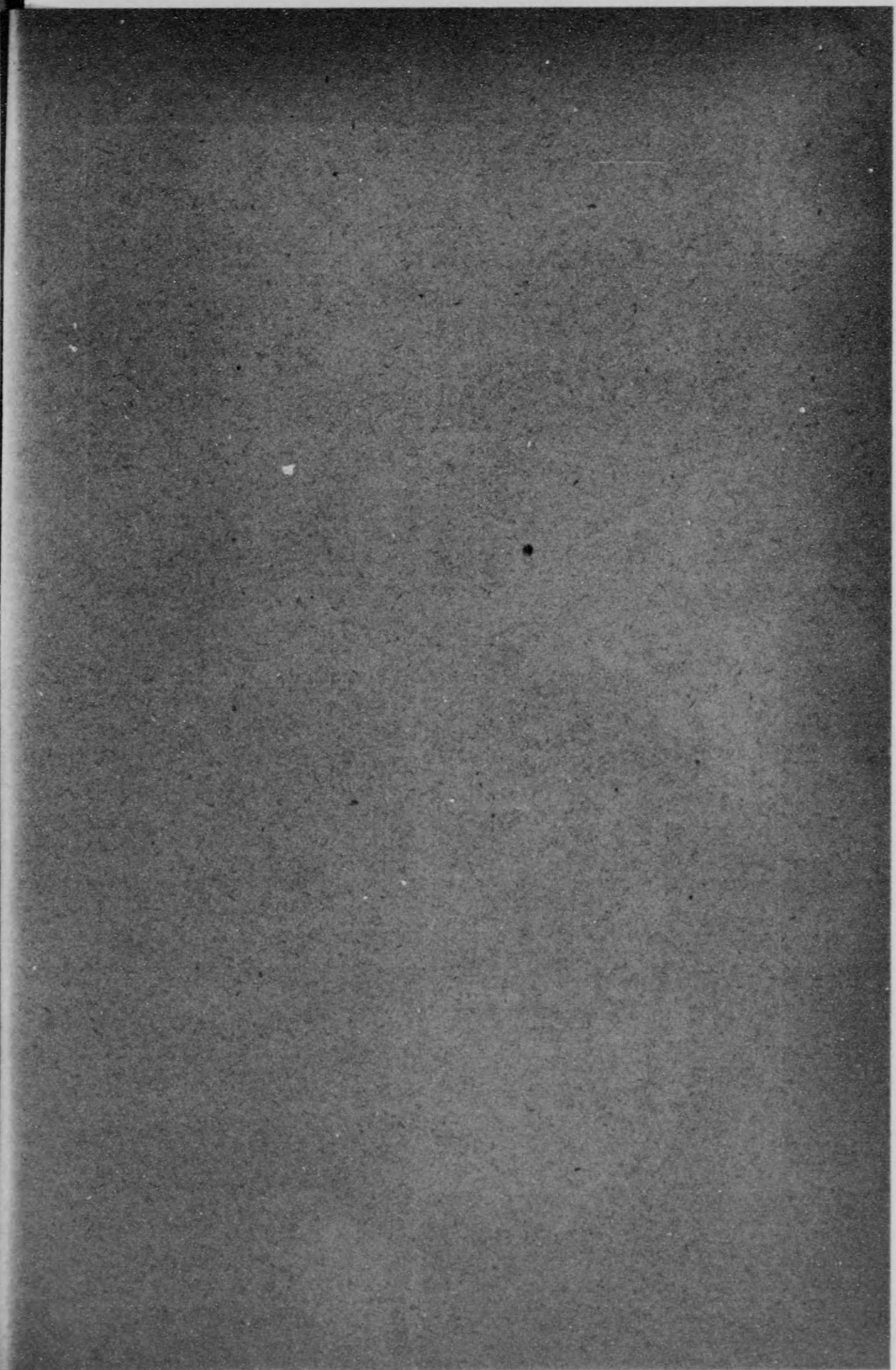
一金五圓貳拾壹錢	四
一金五圓五拾六錢五厘	五
一金壹圓五拾六錢九厘	六
一金壹圓貳拾壹錢	七
一金壹圓貳拾七錢五厘	八
一金貳圓參拾參錢	九
一金八拾八錢五厘	十
一金四圓拾五錢五厘	十一
一金壹圓六錢	十二
一金九拾參錢	一
一金貳圓五拾七錢	二
一金參圓九錢	三
合計金參拾圓拾四錢九厘	

終りに臨み各入院生の金額を擧げんに
 ○自費生は食費文具書籍雜費一切の費用として毎月三日迄に左の頭書金額を依頼人より本院へ差出せしむ
 一金拾圓 年齢滿八歳以上十歳まで
 一金拾貳圓 同十一歳以上十三歳まで
 一金拾參圓 同十四歳以上十六歳まで
 ○減費生は家計の都合上前記の金額支出金し能はざる向きに限り本院に於て其幾分を補助するもの
 ○院費生は全部補助するもの

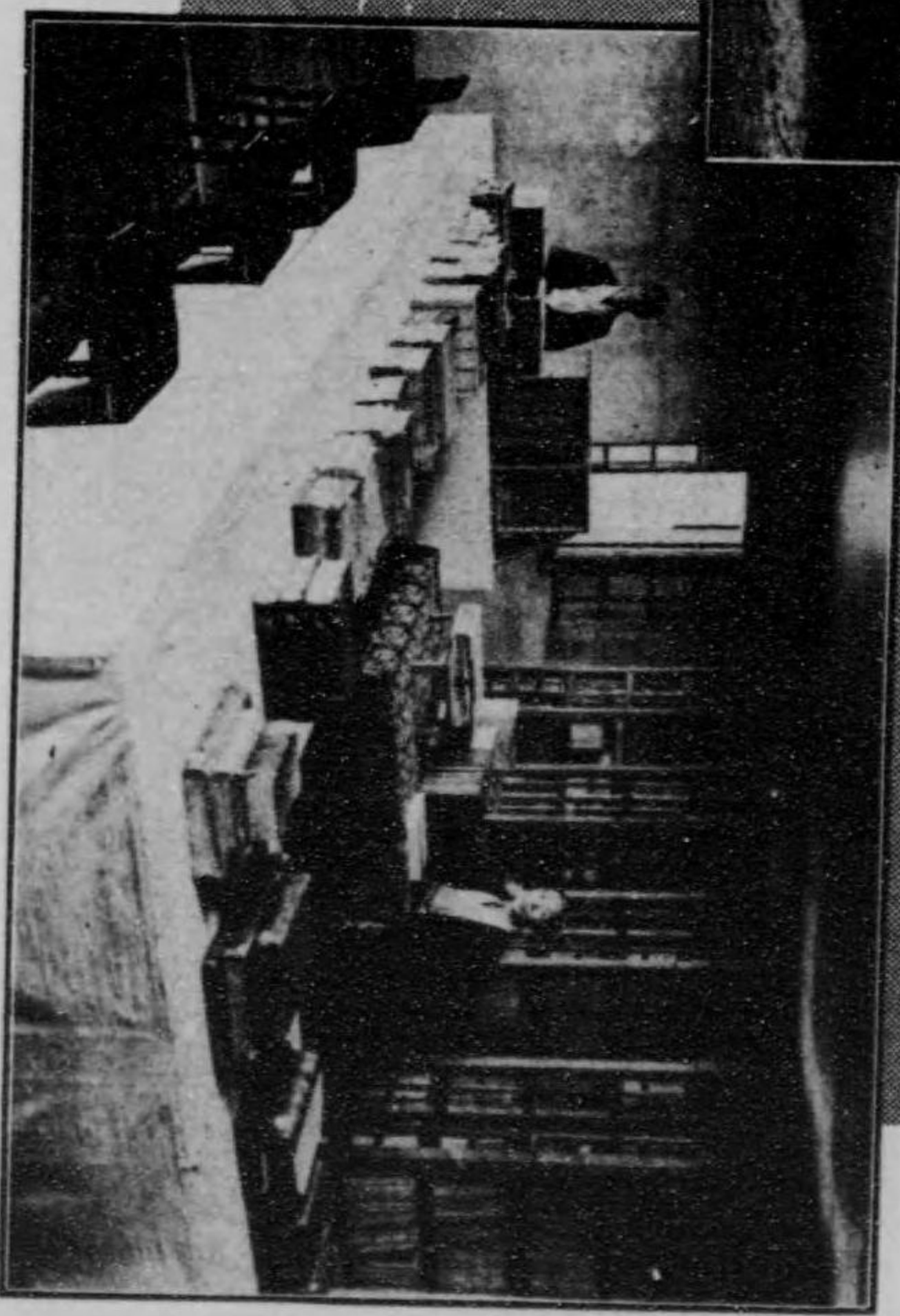
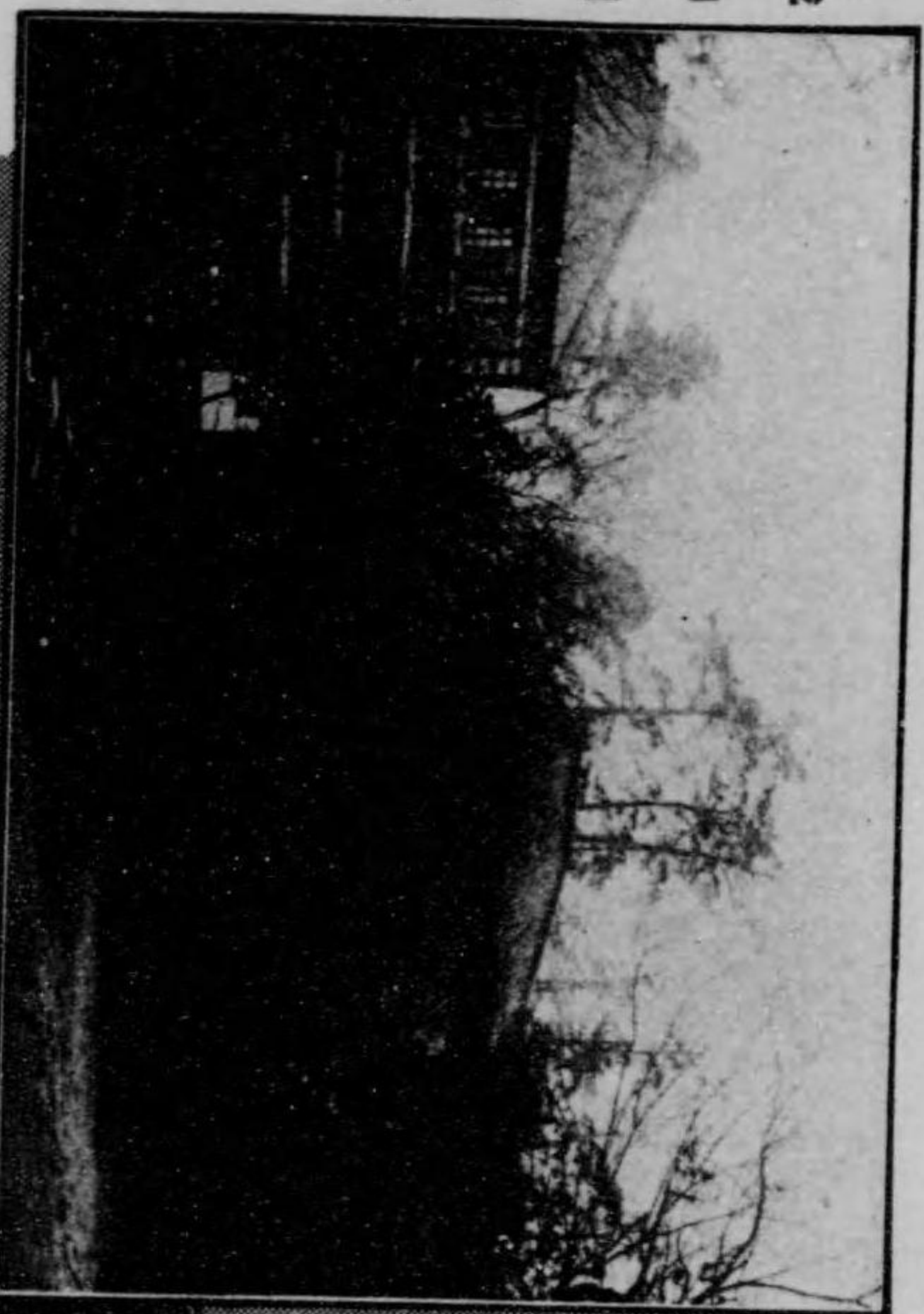
入院の際は各本人現所持する衣類書籍文具等實用に適するものは持参せしむ 以上

成田圖書館一覽

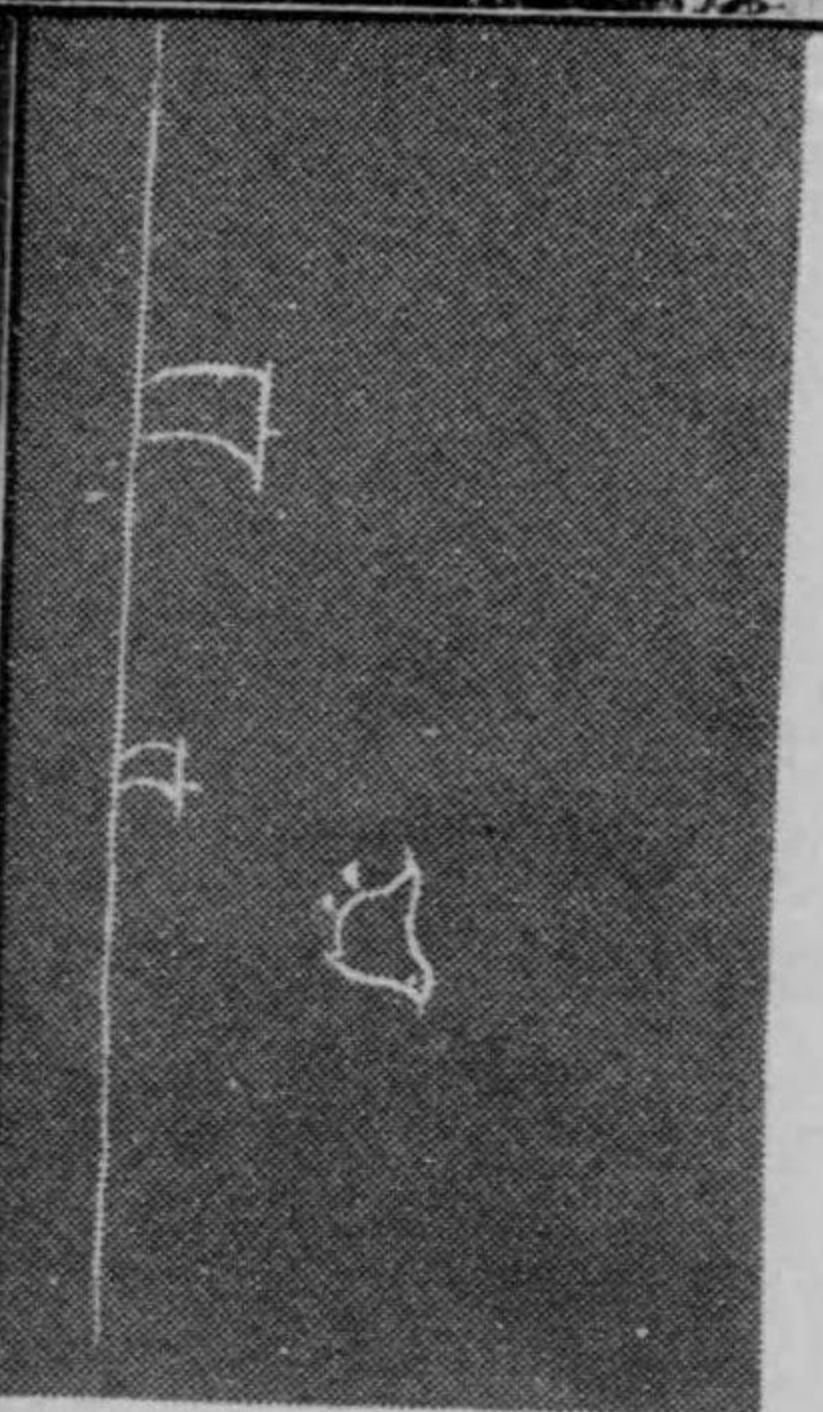
鳴呼前館主石川大僧正	八五
建築	八七
經費	八八
職員	八九
藏書	九〇
圖書の増加	九〇
閱覽人及貸出圖書	九一
特許帶出一覽	九二
閱覽狀況一覽表	九三
規則	九四
館外帶出規則	九五
圖書寄贈者芳名	九六
雜誌新聞寄贈者芳名	九七



成田圖書館



部一の内庫書



私立成田圖書館一覽

◎嗚呼前館主石川大僧正

本館は故石川館主が洋行歸朝直後に於て、其理想の一端を實現せらるべく經營せられたる教育機關の一端であります。直接其衝に當れる私が微力無能なりし爲め、未だ充分なる進展を見ざりしも、館主の理想はなかなか堅實にして高遠なものでありました。

私は本館開設第一日から其事務に與かり、爾來二十有三年、顧みて故館主の深甚なる信頼に辜負するもの極めて多かりしを愧づるのであります。幸に新館主荒木僧正は從來圖書館事業には多大なる趣味と經驗とを有せらるゝの人、大正六年六月より東京日比谷圖書館に於て、同館頭今澤慈海氏に就て圖書館事務の一斑を練習し、同七年二月より本年二月即ち石川僧正の後を承けて成田山貫首に就任せらるゝまで、滿六年間司書として本館に従事せられたれば、圖書館内外の事柄は細大詳知せらるゝ筈なれば、本館將來の發展上最も慶ぶべきことであります。

故石川館長は其人格徳望等に就て今更申すまでもな

く、實際非常なる愛書家でありました。一例を申せば新聞雜誌等の廣告も圖書の外は一切目に入らぬと云ふ位にて、一度夫れが目についた以上は取寄せて見ねば氣が済まぬと云ふ、謂はゞ一種の購書癖、然も夫れが頗る濃厚なる方でありました。其實成田山貫首と云ふ重大なる職責は、到底僧正に悠々讀書に耽るの時間を與へませぬ。夫れは能く承知して居られる、乍併矢張取寄せて其體裁や目次位を瞥見して、僅かに慰安とせられた程でありました。昨夏御病氣に罹られて切なる醫師の勸告で、轉地靜養の事になりました時に、是から意のまゝに讀書が出来るとお悦びでありました、夫れ程好まれた讀書の期間も餘り長からざりしは、今更哀しき思出の一であります。

明治三十五年圖書館開館の際は、從來新勝寺の藏書約壹萬五千冊と、館主が書生時代に購入せられたる所謂手許の書籍約壹萬五千冊と、併せて三萬冊を移して不取致開館致しました。其後も館購入の外に毎年多量の圖書及雜誌をお手元より寄贈せられたるは、年報にて報告せる通りであるが、今回御遺言に基き書齋に在る所の圖書は悉く館へ御寄贈下さることに決し、本

館は大急ぎに其御寄贈を請け入るゝの準備に取掛り、昨今稍や出来致した次第で、其冊数は詳細なる調査は未了であります。私の見た分量では約壹萬五千冊以上、上貳萬冊位もあるかと思はれます。是れは本館書庫内へ「望洋文庫」として特設し、不日讀者諸君の面前へ展開さるゝと與に、設立者たる前館主猥下を永遠に偲びまつる好個の記念物であります。元來が骨董品や贅澤物の嫌いな方でありましたから、世に所謂珍書奇籍と稱せらるゝ種類は極めて少ないようであり、夫れでも相當觀るに足るべきもの多からうと信じます。

尙故館主は白鳥文學博士と深交がありました爲め、實は雙方から頼み合ふたと云ふ形で、同博士の手に由つて東洋史研究資料を世界に蒐集し、既に少分は本館へ入藏したるものもあり、其大部分は同博士のお手元に留められてありますが、是等も追々と同博士が整理して、尙同博士が御自分で購入せられたるものも、既に御不用になつたものは俱に與に本館へ御寄贈下さることになつて居りますから、夫れが整頓致しますと將來東洋史研究上の一大權威として、研究者に非常なる

便益を寄與することが出来ようと思ひます。是等のものが皆集まれば、本館藏書も優に十萬冊を超過することになります。藏書十萬冊の聲をお聞かせ申さぬ内に、御遷化あらせられたことは、返す／＼も残念であります。

私は去四月末福岡に於て二日間、長崎に於て二日間、全國圖書館大會に出席致し、又我國文化の大恩人たるシーボルト先生が長崎上陸百年の記念祭にも參列致しました。其往復に三十餘日を費して伊勢太廟、高野山等を初め關西方面の神社佛閣靈山靈場を巡禮參拜致しました。夫れは自己の娛樂的見物遊山でなく、故館主猥下に對する報恩謝徳の一端として、聊か恩顧の萬一に酬へ奉る微意に外なりません。乍併如斯は所謂消極的報恩にして老人の分相應と云はゞ謂ふべきも、決して故猥下に報ずる所以のものでありませぬ。眞の報恩は絶愛せられたる此圖書館を、益々内容を充實せしめ、總ての不備を改善し、圖書館本來の使命たる國民の教育文化に貢献することが、猥下の御遺志に副ふ意義ある報恩であらねばならぬ。今後は更に老軀を呵して眞目的に邁進するの覺悟であります。(高津親義拜記)

◎建築

本館 木造 二階建 五十五坪
 建築費 金九千貳百〇九圓拾七錢
 書庫 煉瓦造 三階建 三十坪
 建築費 金壹萬參千貳百四拾八圓八拾錢
 附屬建物 木造及煉瓦造 百一十一坪五合餘
 建築費 金七千三十二圓十四錢

計
 建坪 百九十六坪五合餘
 建築費 金貳萬九千四百九十圓十一錢
 敷地 壹千貳拾八坪

本館は最初水産物品評會會場として造りしものなれば、其位置と云ひ、其間取りと云ひ、圖書館としては稍や不便なれども、事情止むを得ざれば、其儘各所に修繕を加へて之を閱覽所に宛たり。

書庫は、帝國圖書館を始め、各書庫を參觀して、地方相當、位置相應に加減斟酌し、最も書架と光線と通氣との割合に注意し、裝飾外觀等を顧慮せず、唯實用と堅牢と防火との三點を主としたり。而して其容量は

平均幅十一尺七段の書架九十基を据附たれども、既に増築の必要に逼れり。

附屬建物は、事務所、應接所、閱覽人休憩所、廊下、事務員住宅、物置、便所等なりとす。事務員住宅は、四戸約八十餘坪にして、主任以下重なる館員に住居せしめ、一面は常在當直に宛て、一面は安心館務に従事せしむる方針を取れり。從來本館設備の完からざるものは、暖房器と夜間點火の用意充分ならざりし二點なりしが、四十三年十一月に於て、成田電氣事業完成したれば、本館は第一着に、四十燈、百五十二燭光の裝置を爲し、四十四年一月より直に夜間開館を實行したり。夜間開館は、平均五時間の延長にして、之に一年平均開館日數三百三十日を乗ずれば、實に壹千六百五十時間、從來一日の開館時間平均九時間とすれば百八十三日間、即ち約六割の増加なれば、それ丈閱覽者の便利は増加せられたる割合なり。茲に特記すべきは成田電氣會社が、四十四年一月夜間開館實施以來大正六年一月に至るまで、毎月點火料金中へ二萬キロツツの無料寄附を繼續せられたる好意を深謝す。

◎經費

本館經費は一に出版界の状況に伴ひ一定の豫算なし。最近に於ては一ヶ年約六千圓内外にして、大略總經費の約半額は圖書購入費にして、其他は俸給賞與館員養成費管繕費雜費等なりとす。創立以來の概算

明治三十四年	九、〇〇九、一七四 <small>(本館建築費を含む)</small>
同三十五年	一、八一六、三七四
同三十六年	一、六一一、五五〇
同三十七年	一、九七五、〇〇〇
同三十八年	二、六九三、五八三
同三十九年	三、三四〇、九七五
同四十年	二、二七八、九九一 <small>(書庫建築費を含む)</small>
同四十一年	三、九六三、八三五
同四十二年	五、四六〇、二二三
同四十三年	六、四三四、九五八 <small>(第一印刷目錄刊行)</small>
同四十四年	五、一七一、六七七
大正元年	六、六六三、五三七
同二年	五、〇七四、八二七
同三年	五、一六〇、七六〇 <small>(第二印刷目錄刊行)</small>
同四年	五、二九〇、二二二

同五年	六、一六七、五五二
同六年	五、七二一、八八五
同七年	六、一二九、八一五
同八年	六、三七一、七六〇
同九年	五、八二八、一七五
同十年	六、八四五、二六〇
同十一年	七、二〇七、五六〇
同十二年	七、八七七、四八〇

合計 金拾三萬九千九百九十五圓拾八錢

内譯

金五萬八千六百七拾九圓拾五錢 圖書購入費
 但創立の際新勝寺及館長手許より移したる約壹萬五千冊の價格並に寄贈圖書又購入費として寄附せられたる金額等は總て本項に算入せず
 金參萬六千九百七拾九圓五拾八錢 建築費
 金四萬參千五百參拾六圓四拾五錢 管繕費

以上費目中圖書購入費の外、他の諸費目は前掲を以て其の全部竭したるものにあらず。建築管繕に於ける材料人夫經常部に於ける薪炭筆紙等其多くは新勝寺大經濟中に含まれて別に算出せざるもの多ければなり。

◎職員

館主兼館長	荒木照定
主事	高津親義
司書	成田善亮
同	高田定吉
事務員	小川益藏
事務見習	渡邊清
同	武士田文哉

本報告の初めに記述せる如く、本館の設立者たる石川前館主は不幸遷化せられたるを以て、大正七年以來本館に司書として執務せられたる荒木師は、其後董として成田山貫首に就任せられたれば、當然の結果として五事業を總攬せらるゝことゝなれり。本館は愛書家たる前館主を喪ひたることは非常なる大打撃として、一時絶望したるも、幸に圖書館業に精通せらるゝ所の新館主を迎ひ戴くことゝなり、且つ從來の方針を踏襲して益々向上せしむべしとの御意見なれば、本館將來の發展上極めて良好なる結果を齎すべく、各員奮て館務に精勵しつゝあり。

事務員高田定吉は、昨年四月より文部省主催の圖書館員教習所に入所し、大震災の爲め一時多少の支障を受けたるも、當局の努力に由り豫定の如く本年三月末を以て修了歸館したれば、司書に昇任したり。

時勢の進運に伴ふて館務に多少の改善を加へたり。其重なる一二を擧ぐれば、從來空室と爲し置きたる本館階上を普通閱覽席、特別閱覽席となし、階下を婦人席、兒童席、新聞閱覽所と區別したること、前館主の遺書全部を本館へ移す爲めに、書庫三階へ新たに十四箇の書架を設け、總て特別扱となし。其他圖書購入の方針は成るべく讀書界の趨勢を考察し、且つ地方農村青年を指導すべく、中學、高等女學校等の學生に參考資料を供給すべく、深き注意を拂ふことゝなし。更に館外貸出しの手續を成るべく簡便にして、讀書の趣味を普及せしむるに努むると同時に、他方購入雜誌に制限を加へたり。又事務取扱方面にも圖書購入、入藏手續、分類、目錄作製等精確と簡捷とを旨として一大刷新を實施せる等なりとす。他山の石以て我玉を琢すべし、本館は喜んで讀者の聲を聞かんことを希ふ、大方の諸彦幸に他山の石として忠言を賜はらんことを。

◎藏書

明治三十五年開館當時に於ける本館藏書は、約壹萬五千冊内外に過ぎざりしが、爾來逐年増加して、大正十二年三月末日現在數は

和漢書 七萬一千三百三十三冊
洋書 三千五百五十二冊
合計 七萬四千八百八十五冊
を算するに至れり。

本館藏書中、他に特色あるものなしと雖も、佛書の八千餘冊、殊に秘密部の豊富なると、學者の研究調査に資せんが爲めに易めて、新刊の辭書類、叢書類を網羅したると、白鳥博士等の好意に由りて得たる、朝鮮本六十九部三百六十五冊等は、本館の貴重書として些か誇る所なり。

其他康平弘安の古寫本、慶長已前の古版本、古徳碩學の書入本、手澤本、洋書に於ては一千五百年代の古刊本、其他多少の由緒歴史附のものなきにあらざるも煩はしく之を擧げず。

◎圖書の増加

本館の圖書は三種の方法に由りて増加す。第一は館費購入、第二は館主の手元より寄贈、第三は一般有志家よりの寄贈なりとす。以上第一に就て亦二種あり、一は本館自ら有益なりと認めたるもの、二は一般讀者より備付の請求ありて本館の是認したるもの是なり。而して本館は一般讀書界の趨勢傾向に注意を怠らざる

と與に、毎に進一步を期せり。
本館圖書購入費には別に豫算なるものなく、極めて自由なる立場にあれども、左りとして突飛なる要求は又設立者の許さざる所なれば、要は出版界の状態如何にありて、本館は只有益なる新刊書を網羅せんことを期するのみ。然も此事たる一二者の力の能くする所にあらざれば、謹て大方讀者の援助を希ふ。

開館以來の増加の割合は、一ヶ年約三千五百冊にして、將來の増加率は、必ずしも此標準を以て律する能はずと雖も、今日は各部門共稍や一通り具備したるを以て、今後の増加は、最も慎重に選擇すべければ、其價值や必ず見るべきものあらん。

◎閱覽人員及貸出圖書

年 度	開館日數	閱覽人員	貸出圖書
明治三十五年	三一五	二、四五一	三、九二二
同 三十六年	三三三	三、四四八	五、八六三
同 三十七年	三三五	三、四三七	六、五九〇
同 三十八年	三四一	四、一三九	五、九三八
同 三十九年	三二六	四、四三七	九、四九二
同 四十年	二七六	六、二二八	一一、二九七
同 四十一年	三二六	六、五八八	一一、〇三八
同 四十二年	三二八	六、九一七	一二、六五七
同 四十三年	三二六	一四、六四八	一二、八五八
同 四十四年	三二七	一四、六四三	一三、八一〇
大正元年	三二六	二〇、〇六四	一四、四〇二
同 二年	三二四	二〇、〇九八	一五、八二八
同 三年	三二二	二四、二二五	一五、九七六
同 四年	三一八	三一、五五四	一〇、四一六
同 五年	三二二	二九、六一一	一八、七九六
同 六年	三二二	三四、一八六	九〇、一〇四
同 七年	三二二	三一、一五一	七三、八一九
同 八年	三二〇	三二、四六一	六六、二〇一
同 九年	三二九	三三、三一五	六六、五七八
同 十年	三二三	三四、八六六	六三、九四四
同 十一年	三二五	三五、六三〇	六一、一〇二
同 十二年	三二六	三七、四六二	六三、五七五
合 計	七、一一六	四三五、五七一	一〇、四八〇、四七
昨年度一日平均	人員 一四八人九分		
書冊 一九五冊			

明治四十年度より稍増加の傾向を示したるは、館外特許帯出を實施したるに基き、四十三年度以後の激増は主として、(一)目錄の完成(二)新入藏書を重なる閱覽人、學校、團體等へ告知方を實行せると(三)夜間開館の實行等は其主因なるが如し。殊に近來一般に讀書の趣味を解し來ると、就中附近青年團の本館を利用するもの著しく増加せる結果なるべしと思考せらる。

貸出圖書の割合は文學語學を首位に、歴史傳記之に次ぎ、近くは工學産業等の實務書類を閱覽するもの増加し來れり。

昨年度に於ける閱覽人員三萬七千四百六十二人を職業別とするときは左の如し

- 學生(中學生程度以上) 一〇、三八三
- 實業家 七、一一九
- 婦人(女學校生徒を含む) 三、七一三
- 僧侶 一、四一七
- 教員 一、一一三
- 官吏 三七八
- 其他 三、九二二
- 兒童及新聞閱覽人 九、四一七

◎特許帶出一覽

明治三十八年二月特許帶出實施以來、特許票を申與せし個人及團體は、五百八十四票に達せり、其内住所の移轉又は死亡等に由り、特許權の消滅せしものは二百五十三人あれども、京都智山勤學院、成田中學校、成田高等女學校等の番外貸出を加ふれば、現實に四百人に相當すべし、而して此多數特許者中、期限を過て注意を受けし如きはあれども、未だ規則に依りて律せざるべからざるが如き甚だしき反則者を見ざるは本館の効かに慶ぶ所なり。尙三十八年以降帶出回数及帶出圖書の累年統計を掲ぐれば左の如し

明治三十八年度	一一〇八回
明治三十九年度	一二八八回
明治四十年度	一三五三回
明治四十一年度	一四二一回
明治四十二年度	一四九二回
明治四十三年度	三四四〇回
明治四十四年度	七〇二〇回
大正元年度	八八四六回

同	二年度	八〇三八回	二二八六〇冊
同	三年度	九一八〇回	二〇五五六冊
同	四年度	一六二一六回	三〇二〇六冊
同	五年度	一四六一〇回	二五〇九八冊
同	六年度	一六七一〇回	二八〇五四冊
同	七年度	一六五八四回	二九四六九冊
同	八年度	一七三四六回	三二四六一冊
同	九年度	一七九七二回	二八一〇〇冊
同	十年度	一九五八六回	二九〇六八冊
同	十一年度	二〇七八〇回	三〇七三六冊
同	十二年度	二一九二四回	三三四六二冊
合計		二〇四九一九回	二九七五六〇冊

本館は地方青年團と、小學校教職員諸氏とに對し、特に借覽の便宜を寄與しつゝあり。是れ其齎す所の効果頗る廣く、且つ團長校長等之れが責任者たるが故に本館事務取扱上にも甚だ便宜多ければなり。而して近來附近の青年團にして、此の種の團體借覽申込増加の傾向あるは、喜ばしき現象なり。

◎大正十二年度 閱覽狀況一覽表

種別	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	一月	二月	三月	合計	百分比例
開館日數	二八	二九	二七	三〇	三〇	二九	二八	二九	二六	二六	二六	二六	三三六	
宗 教	一八〇	一五七	一五七	一三五	一九一	一六一	一五九	一三〇	七三	一五	九	六六	一〇八八	四・九
哲學、教育	二八	二八	三六	二五三	二七	二四三	二二	三三九	三三	三四八	二二	三〇	二九六七	八・〇
文學、語學	一九四	一九五〇	二二五	二四七六	三〇	二五五六	一四〇	一〇八	一五六三	一七〇	一七五	一九六	二九八四	八・六
歴史、傳記	五三	三九三	四〇〇	五四八	五九〇	四八四	三四四	四〇三	四三三	三六三	三三八	四三	七九五	二・二
地誌、紀行	二八七	二五五	二七〇	二九四	二二五	三二九	一五三	二〇六	三三	二二	三六	二六九	四〇九	一・二
社會、統計	三〇九	二五五	二七〇	二九四	二二五	三二九	一五三	二〇六	三三	二二	三六	二六九	四〇九	一・二
法學、經濟	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	一・二
醫學、生理學	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	一・二
工業、兵事	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	一・二
農業、産業	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	一・二
隨筆、叢書	二四八	二四八	二四八	二四八	二四八	二四八	二四八	二四八	二四八	二四八	二四八	二四八	二四八	一・二
合計	四一九五	三七七三	四〇〇三	四六五六	五三〇	四六一七	二八七二	三六八五	三三九五	三三〇	二九四	四二九	六三三七	一〇〇・〇
一日平均	四九・八	一三〇・一	一五九・三	一五五・二	一八三・〇	一五九・三	二五九・六	三三九・九	二七〇・五	二七〇・〇	一三二・四	一四六・一	一九九・〇	
館内閱覽人	一四〇八	一三三七	一六二二	一五二五	一八三三	一五三三	二五九六	三三九	二七〇	二七〇	一三二	一四六	一九九	
館外帶出者	八九八	八八七	八八七	九九〇	九七六	九六〇	九〇六	九八六	九八六	八七〇	八〇八	八八八	二二八	
合計	二三〇五	二二二五	二六一八	二五〇五	二七九	二四九三	一五八〇	一〇三四	一三〇	一三〇	二一八	二三六	三二七	
一日平均	八二・三	七三・三	九〇・二	八二・五	九六・六	八三・九	五二・七	六九・七	一〇・二	一〇・二	七二・八	七七・九	一一〇・九	

◎私立成田圖書館規則

- 第一條 本館ハ主トシテ普通圖書、佛書、雜誌等ヲ蒐集シテ廣ク公衆ノ閱覽ニ供シ一般社會ノ智徳啓蒙ニ裨益スルヲ以テ目的トス
- 第二條 何人ニテモ滿十二歳以上ノ者ハ本館ニ來リテ圖書ノ借覽ヲナスコトヲ得
- 第三條 本館ハ左ノ時限ヲ以テ開閉ス

開館時限	閉館時限
一月 午前九時	午後八時
二月 午前八時	午後九時
三月 午前七時	午後十時
四月 午前八時	午後九時
五月 午前七時	午後十時
六月 午前八時	午後九時
七月 午前七時	午後十時
八月 午前八時	午後九時
九月 午前七時	午後十時
十月 午前八時	午後九時
十一月 午前九時	午後八時
十二月 午前八時	午後九時
- 第四條 本館ノ定期休日ハ左ノ如シ但臨時休館ハ其時々揭示ス
 - 歳首 自一月一日 館内掃除 毎月一日
 - 紀元節 二月十一日 記念日 六月九日
 - 天長節 八月卅一日 天長節祝日 十月卅一日
 - 曝書期 凡十日以内 歳末 自十二月廿八日 至同三十一日
- 第五條 本館圖書閱覽ハ總テ無料トス
- 第六條 圖書閱覽希望者ハ圖書閱覽證ヘ求需ノ書名冊數番號及住所職業氏名月日ヲ記入シ貸渡所ヘ提出シテ書冊ヲ借受クベシ

- 第七條 貸附圖書ノ員數ハ求覽人ニ對シ一時ニ和裝書ハ二種十二冊洋裝書ハ二種二冊ヲ限リトシ和洋併借ノ時ハ各其半數ニ過グルヲ得ズ但語學ニ關スル辭書ノ併借ハ此ノ制限外トス
- 第八條 借受ノ圖書ハ閱覽室外ヘ携帶スルコトヲ得ズ
- 第九條 過失ト故意トニ關セズ借受ノ圖書ヲ紛失シ又ハ汚損毀傷シタル時ハ同一ノ圖書若クハ相當代價ヲ辨償セシム但汚損ノ狀況ニ依リ本文ヲ斟酌スルコトアルベシ又其行爲ノ次第ニ依リ一ヶ月乃至一年間登館ヲ謝絶スルコトアルベシ
- 第十條 本館ノ規則ニ違背シ又ハ本館臨時ノ揭示ニ從ハズ不法ノ行爲アル者ハ其情狀ニ依リ一ヶ月乃至一ヶ年間登館ヲ謝絶スルコトアルベシ
- 第十一條 閱覽席ヲ普通、婦人、少年ノ三區ニ別チアレバ限リニ他席ヲ侵スベカラズ
- 第十二條 閱覽所内ニ於テハ一切香讀、談話、喫煙ヲ禁ズ
- 第十三條 何人ニテモ圖書ヲ寄贈セラル、トキハ其目錄員數及住所氏名ヲ詳細シ寄贈圖書ニ添テ送付セラレタシ但寄贈圖書運搬費用ヲ自辨シ難キ向ハ時宜ニ依リ本館ヨリ之ヲ支辨ス
- 第十四條 凡ソ公衆ノ閱覽ニ供シ若シクハ保管ヲ請フノ目付ヲ以テ本館ニ圖書ヲ委託セント欲スル者ハ其事由目錄員數ヲ詳細シ本館ヘ照會シ承諾ヲ得タル後其圖書ヲ送致サルベシ
- 委託ノ圖書ハ館藏ト同一ノ取扱ヲナスベシ
- 委託ノ圖書ハ厚ク保護スト雖不幸火難盜難其他大災ニ罹リテ損失敗亡ヲ來スコトアリトモ本館ハ其責任ニ任セス
- 第十五條 館外圖書貸出特許規則ハ別ニ之ヲ定ム 以上

成田圖書館圖書貸出特許規則

- 第一條 本館圖書帶出ノ特許ヲ得ントスル者ハ左記ノ手續ヲナスベシ
 - 一 特許票附願書ヲ差出スベシ
 - 二 特許票附願書ハ保證人ヲ要ス
 - 三 特許票附願書ノ保證人ハ本館ノ指定セル者ニ限ル
 - 四 保證金五圓ヲ預納スベシ
 - 五 成田中學校、成田高等女學校、成田幼稚園、成田山慈化院教職員ハ同主任若クハ理事ノ證明ニ依リ特許票ヲ交附ス
 - 六 新勝寺徒弟及詰合員ニ限リ同寺執事ノ證明ニ依リ成田尋常高等小學校職員ニ限リ同校長證明ニ依リ特許票ヲ交附ス
 - 七 五、六項ノ場合ニハ四項ノ保證金ヲ要セム
 - 八 本館ハ前條ノ手續ヲ了シタル上ニテ特許票ヲ交附ス
 - 九 貸出圖書數ハ一回ニ付和裝書ハ二種十冊以內洋裝書ハ二種二冊以內トシ和洋併借ノ時ハ各半數以內トス
 - 十 貸出期限ハ一週間以上三週間以內ノ範圍ニ於テ本館ノ見込ヲ以テ其時々之ヲ定ム
 - 十一 期限ニ至リ尙續借セントスル者ハ一旦返納シ更ニ借受ノ手續ヲナスベシ
 - 十二 但他ニ同書ノ借覽ヲ請フモノアル時ハ續借ヲ謝絶スルコトアルベシ
 - 十三 第六條 特許借受ノ圖書ト雖モ本館ニ於テ要用アル時ハ臨時返戻セシムルコトアルベシ
 - 第十四條 特許票ヲ得タル者ニシテ他所ヘ轉居スルカ其他事故アリテ本館圖書ノ借覽ヲ要セザル時ハ其旨届出ツベシ

- 第八條 保證人死亡其他ノ事故ニ依リ資格ヲ失ヒタル時ハ更ニ保證人ヲ定メ定式ノ證書ヲ差出スベシ
- 第九條 左記ノ一ニ該當スル圖書ハ帶出ヲ許サズ
 - 一 大部ノ圖書
 - 二 各學科ノ事彙、字書、類書、書目、新聞紙
 - 三 來觀閱覽人ノ請求多キ圖書
 - 四 貴重高價ナル圖書
 - 五 新刊圖書ハ二ヶ月乃至三ヶ月後定期刊行書ハ裝釘ノ上ニアラザレハ貸出セズ
- 第十條 借覽期限ヲ經過シ本館ノ注意ヲ受クル二回ニ及ビ尙返戻セザル時ハ本館ハ特許票ノ效力ヲ取消シ其事情ニ依リ再ビ之ヲ付與セザルベシ此場合ニ於テハ保證金ヲ以テ帶出圖書ノ代金及其費用ニ充テ尙不足ヲ生ズル時ハ保證人ニ辨償セシムベシ
- 第十一條 借受圖書ヲ紛失シ若クハ汚損シタル時ハ本人及保證人ハ辨償ノ責ニ任ズ
- 第十二條 圖書帶出ハ開館時間中ニ限ルモノトス
- 第十三條 特許票ヲ返附スル時ハ直ニ保證金ヲ還附スベシ 以上

大正十二年圖書寄贈者芳名

安達 一郎	二一	加藤 文一	一	關川 博道	一	奈良高等師範學校	一
足立 乘國	一一七	鎌田共濟會圖書館	一	大日本實業組合聯合會	一	奈良縣立圖書館	一
石川 順	二	關西藝術新聞社	一	第八高等學校	一	成田町役場	一
石川 甚兵衛	二五三	鬼澤長左衛門	一	臺灣總督府圖書館	一	南茨文庫音樂部	二
依田 光二	一	北須 貞治	一	千葉縣警務部	三	日本興業銀行調查課	二
依田 川 敦	二	京都帝國圖書館	一	千葉縣知事官房	一	日本字文社	一
一誠堂書店	一	清瀧 智龍	一	千葉縣內務部	二	忍頂寺 務	二
茨城縣立圖書館	一	熊澤 一衛	一	朝鮮總督府	九	農務省農務局	二
今關 壽磨	一	慶應義塾圖書館	一	貯金 規彥	二	農務省文書課資料掛	一〇
岩淵 幸次郎	一	啓明 會	一	辻尼 規彥	二	野々村 修瀧	一
岩立 幸次郎	四	孝女伊麻呂跡保存會	一	葛原 旅館	二	長谷川 利吉	八
遠藤 與惣治	二	高野 千代松	一	鐵道大臣官房文書課	二	早川 清治	二七
印旛郡役所	一	國際聯盟協會	一	東京高等師範學校	一	林 正	一五
小川 保	二	互尊 文庫	一	統 計 局	一	肥 塚 巖	一
小川 益藏	二	小林 力彌	一	東北帝國大學	一	藤ヶ崎 照興	一
大垣市立圖書館	一	佐賀 國書館	一	東洋 協會	一	藤本 三郎	一
大須賀 風逸	一	佐 瀨 旭	一	都市計畫愛知地方委員會	一	古 谷 榮一	二
大塚 篤三	三	實業の日本社	一	富井宗之助	一	北海道廳拓殖部林務課	四
外務省通商局	七	神宮 文庫	一	富山市立圖書館	一	松 田 照應	一
加藤 信助	四	數見 省三	一	豊川氏傳記編纂會	一	松野 壽太郎	一
		鈴木 照泰	二	永盛 順正	一	滿鐵京城圖書館	一
						滿鐵鮮滿案內所	一
						三橋重郎兵衛	一
						民友社	一

武 藤 範 秀
文部省宗教局

八 山 本 信 三 郎
山 本 久

米 本 照 全
料理新聞社

林 業 試 驗 場
渡 邊 清

九 四

大正十二年雜誌新聞紙寄贈者芳名(毎號寄贈者のみを掲ぐ)

愛國婦人會	愛國婦人	石川 照勳	愛と力	赤い鳥	アサヒグラフ	アメリカン、レビニ	オプ、レビニユーズ	醫學及醫政	英語研究	英文大阪毎日	エジプト	大阪朝日新聞	改造	解放	後援	公道	高野山時報	學藝	學燈
懸 姿	家庭と佛教	合 掌	香取新聞	金の塔	金の鳥	現 代	倦 鳥	國民精神	債券時報號外	濟生會々報	ザ、ステューヂョ	ザ、レビニオブレビニユーズ	サンデイ毎日	史學雜誌	慈 航	時事新報	實生活	自働道話	
支 那	謝 恩	社會事業	週刊朝日	淑女界	衆 善	修養世界	書籍新報	眞 言	新修養	新小説	神 變	精 華	政政新論	精神運動	青年傳道	水産界	大亞細亞	第一義	
大日本山林會報	大日本私立衛生會雜誌	大日本農會報	大正詩文	中央公論	中央美術	中央佛教	中外日報	ち ば	千葉縣山林會報	帝國繪畫新報	帝國教育	帝國在軍人	東亞之光	東京朝日新聞縮刷版	東京每月新聞	同 仁	東洋藝術	日鮮佛教新聞	

私立成田圖書館一覽

- にひはり
 - 日本學校衛生
 - 日本勸業銀行月報
 - 農商新報
 - 農商研究
 - 萬朝報
 - 美術畫報
 - ひたち
 - 佛教俱樂部
 - 佛新新聞
 - 佛教新報
 - 文藝俱樂部
 - ヘラルドオブエジプト
 - 變態心理
 - 奉公
 - マルゼンスアナウン
 - スメンツ
 - 文部時報
 - やまと新聞
 - 讀入新聞
 - 旅行案内
 - 倫理講演集
 - 石川甚兵衛
 - 外文時報
 - 我觀
-
- 京津日日新聞
 - 京報
 - 國家學會雜誌
 - 實業
 - 日本及日本人
 - 三田評論
 - 板倉勝憲
 - 第一公論
 - 岩立幸次郎
 - 憲法月報
 - 洲田健二
 - 土上
 - 牛込新報
 - 牛込新報
 - 芸艸會
 - 芸艸會雜誌
 - 運輸時報
 - 運輸時報
 - 英語青年社
 - 英語青年
 - 陰陽新聞社
 - 陰陽新聞
 - 河村泰太郎
 - 禪宗
-
- 關西大學學報局
 - 千里山學報
 - 京都帝大圖書館
 - 增加漢書、洋書月報
 - 金鈴社
 - 金鈴
 - 久保田千代
 - 婦人世界
 - 研究社
 - 研究社月報
 - 國際聯盟協會
 - 國際知識
 - 國民英學會
 - 中外英語
 - 佐瀬角三郎
 - 千葉縣農會報
 - 而眞會
 - 密宗學報
 - 史蹟名勝天然紀念物保存會
 - 史蹟名勝天然紀念物
 - 史談會
 - 史談會選記錄
 - 十善會
 - 十善寶窟
-
- 常總民友新聞社
 - 常總民友新聞
 - 正民新聞社
 - 正民新聞
 - 新興社
 - 新興
 - 新勝寺
 - 慈善新報
 - 無礙光
 - 審美書院
 - 美術の日本
 - 杉山晴耕園
 - 須田寬治
 - 須田寬治
 - 角力雜誌
 - 生活社
 - 平民
 - 精神研究會
 - 國民道德
 - 關川博道
 - 脚氣預防救濟會雜誌
 - 國家醫學會雜誌
 - 兒科雜誌
 - 實驗醫報

私立成田圖書館一覽

- 治療藥報
 - 皮膚科及泌尿器科雜誌
 - 東京醫事新報
 - 日本消化機病學會雜誌
 - 臨床醫學
 - 臨床月報
 - 石油時報社
 - 石油時報
 - 宣揚社
 - 神道
 - 臺灣總督府鐵道部
 - 統計月報
 - 智山傳道會
 - 加持力
 - 千葉庶民新報社
 - 千葉庶民新報
 - 千葉每日新聞社
 - 千葉每日新聞
 - 智嶺新報社
 - 智嶺新報
 - 銚子湖候所
 - 銚子湖位觀湖月報
 - 銚子氣象月報
 - 銚子地震觀湖月報
-
- 帝國圖書館
 - 帝國圖書館報
 - 天臺發行所
 - 天臺
 - 東京市養育院
 - 東京市養育院月報
 - 統計局
 - 統計月報
 - 東洋哲學發行所
 - 東洋哲學
 - 成田敬二
 - 幼年世界
 - 成田高等女學校
 - 校友會雜誌
 - 成田山延命院
 - 橫濱貿易新報
 - 成田中學校
 - 校友會雜誌
 - 奈良縣立圖書館
 - 奈良圖書館報
 - 南潮會
 - わだつみ
 - 日本弘道會
 - 弘道
-
- 日本赤十字社
 - 博愛
 - 日本圖書館協會
 - 新刊圖書目錄
 - 日本藥學會
 - 藥學雜誌
 - 日比谷圖書館
 - 市立圖書館及其事業
 - 福岡縣立圖書館
 - 福岡圖書館報
 - 福岡會育兒院
 - フクデン
 - 豐山派宗務所
 - 豐山派宗報
 - 富士川遊
 - 兒童研究
 - 佛教慈善會
 - 慈德
 - 古川與一郎
 - ボケット
 - 文化農報社
 - 文化農報
 - 堀田家農事試驗場
 - 農場通信
-
- 前橋市立圖書館
 - 前橋市立圖書館報
 - 丸見屋商店
 - ミツワ文庫
 - 滿鐵讀書會
 - 讀書會雜誌
 - 宮城縣立圖書館
 - 圖書館月報
 - 若溪會
 - 教育
 - 森江書店
 - 三寶
 - 諸岡蒸
 - アサヒスポーツ
 - 八千代生命保險會社
 - 八千代社報
 - 山村兼
 - 向上海
 - 諸曲會發行所
 - 諸曲會
 - 米本照全
 - 野球界
 - 六大新報社
 - 六大新報

露光量違いの為重複撮影

私立成田図書館一覽

100

輪業世界社

輪業世界

早稻田大學圖書館

早稻田學報

無名氏

法律新聞

昭和七年七月五日印刷

成田印刷局發行

編輯人

淺井 照 大

印刷人

佐久間 義 治

發行所

成田 秀 英 會

成田山新勝寺

露光量違いの為重複撮影

私立成田圖書館一覽

100

輪業世界社
輪業世界
早稻田大學圖書館
早稻田學報
無名氏
法律新聞

大正十三年七月廿五日印刷
大正十三年七月廿八日發行

(非賣品)

編輯兼
發行人

淺井照次

千葉縣印旛郡成田町百九十三番地

印刷人

佐久間衡治

東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地

印刷所

株式會社 秀英舍

東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地

發行所

成田山新勝寺

◎土曜會

本山經營の教育事業も、既に五指を屈するに至れり。即ち中學校、圖書館、高等女學校、幼稚園、威化院とす、悉く成田山新勝寺なる根幹より傍生せる枝葉なれども、其事に従ふ人も多く、且つ場所を異にし、執る所の事務も同じからざれば、隨て相互の事情に迂遠なる顧みあるを免れず。如斯は獨り外來者に不便なるのみならず、同胞たる五事業の關係が、甚だ密接を缺くの憾みあり。依て各部の主任者を以て會員とし、直接に經營者たる山主僧正の指導を仰ぎ、又各自の意見をも開陳し、報告し、披露することゝして、去明治四十四年二月十一日の紀元節を以て、其發會式を舉げ、爾來繼續開會しつゝあり。本會員は

會長山主 荒木僧正

中學校 校長 笹川種郎

高等女學校 校長 笹川金太郎

威化院 主任 石川甚兵衛

外に

小野寺 清三郎(女學校理事)

關川 博道(幼稚園理事)

高川直三郎(中學校々々)

淺井 儀助(幼稚園會計主任)

山内平治郎(女學校々々)

小林庄太郎(元小學校長)

圖書館 主任 高津親善

幼稚園 保育主任 山田善亮

小學校々々長 三橋重政

高津親善 山田善亮 三橋重政 杉森勸治郎

終

の十七名なり